

---

# Left Alone

廣瀬 るな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Left Alone

### 【Zコード】

Z5694D

### 【作者名】

廣瀬 るな

### 【あらすじ】

ボクシングだけが生き甲斐で女を捨てたなんちゃって少年Yと彼女に恋する選手兼親友のM。そんな彼女がボクシング以上に愛してしまったのは彼の兄貴その人で。トラウマ満載。リアルでシリーズ、かなり痛い恋のお話。

## プロローグ

嫌な思いはいっぱいした方だと思う。でもそれは特別に自分だけじゃないし、他の人はもつとひどい目にあっている事も知っている。それに誰かがいつでも助けてくれるから、育ちに恵まれなかつた割には幸せだったのだと感じている。

不幸比べは無駄だからしない。

だから嫌な事は忘れる。

私にはいい友達もいて、学校も楽しかった。勉強はまあまあだったけど、部活は普通以上に満喫できた。

就職して、仕事も順調。スタッフは良い人たちばかりだし、お客様さんも喜んでくれていると思う。資格試験も通つて、今の世の中で失業しても食つていける自信はある。

だから今の自分はそれなりに幸せだと思う。

言い忘れたけど、人並みに恋をした事もある。クレイジーラブを地でいって、何もかもぶち壊した。若気の至りってヤツね。それがどんなに惨めな結果を残したかだなんて、話したくない。それほど熱い恋をした。

だからもうこれ以上の人生なんか望んじゃいない。

だからもうかまわないで。いいから。私は独りがいいの。放つといて。大丈夫だから。寂しいなんて、子供の言う事だから。

だつてそうでしょう？取り残されるより、自分が選んで独りの方  
が踏ん切りがつくつてモノだから。

つづく

L e f t   A l o n e

## プロローグ（後書き）

書きたくてしようがなかつたお話です。書けるって、嬉しい！！

## 第一話 懐かしい顔

はてさて、今日はセントバレンタインデイ。私は定刻通りに終わった職場を後に、ボクシングジムに向かう道を急いだ。男女問わずお客さん達やスタッフからもらったおチヨコは紙袋の中で軽やかに弾んでいて、私を何となく幸せな気分にしていた。

2月の夕暮れは微かに雪をちらんだ空氣の匂いがした。

案の定そこには近くの東東高校の制服に身を包んだ女子達が、  
きやあきやあとひしめきあつていた。自分にもあんな時代が有つた  
んだなあ、などと、嘘つぱりを呴きながら、

「寒いね。」

なんて声を掛けてみる。寒さが厳しくなると頬の傷が疼くから分かるんだ。

彼女達の半数は私目当てだつてのは分つていいし、週2回しか来ないとはいえジムの人寄せパンダを買って出でている者としては、愛想が良くなるのは必然。人畜無害をイメージした笑い顔で紙袋を隠しながらそばをすり抜ける。すると最近見慣れたピンクのマフラーの女子が綺麗にラッピングされた小箱を私の前に差し出した。

「あの、これ受け取つてください。」

中身はもちろん、というか多分チヨコレート。

「じめんね、気持ちは嬉しいけど、私、甘い物は口にしないんだ。」

とりあえず社交辞令で言つてみる。この子達の気持ちが何となく分かるから、絶対に嫌と言つ氣はないのだけれど。

「知っています。」

女子達は胸を張るように口を揃えて言つた。

「でも、ジムで誰が一番チヨコをもらつたか賭けをしているんでしょ。」

女子の子の情報網つて凄い。確かに私も一口千円で強制的に参加させ

られていた。

もちろん、ヴァーム5箱も捨てがたい。ライバルのホスト君達もかなり貰つて

くる事だろう。

「私たち、優里さんに勝つて欲しいんです。」

「受け取つてください。」

ご丁寧にもこれまた大きな紙袋が取り出され、一人一人私の顔を見つめながら

らその中に落としていく。こりゃどうやっても受け取るしか無いでしよう。

「お返しなんかいらないんです。受け取つてさえもらえれば。」  
そう言われてもしない訳にいかないでしょ。

最近の格闘技ブームでボクシングファンの女の子も増えていて、こうやってジムに来てくれているのだから、せっかくのチャンスだ。ぜひ生の試合を見てほしいと思う。3月の練習試合のチケットをお返しに贈ろうと考えた。多分、練習終わりにやつて来る塾帰りの男の子達の分を併せればかなりの枚数のチケットが必要になるだろう。こして私の給料は消えていくんだなあと。でも、それも良い。

「ジムの人たちと分けてくださいね。」

彼女達は砂糖菓子のようにくすくす笑った。なるほど。他の連中はもらえないと踏んでいる訳だね。私は苦笑いを浮かべた。

確かに、もうう奴はもううが、そうでない男も実際の所かなりいる。

## 結局

「ありがとう。」

つて名前を確認しながら紙袋を受け取ったその時、

「相変わらず有利は女にモテるなあ。」

とその声は聞こえた。高校時代の3年間呼ばれ続けていたその懐かしい響き。振り向いたそこにはきちんとしたスーツにステンカラーのコートを着た、柔らかな黒髪の見慣れない男が立っていた。

「おいおい、俺の事忘れたか。別れた“女房殿”にせつかく会いにきたつていうのに。」

彼は少しうつむきしようがないと笑った。女の子達が声を落とす。誰でしたっけ、そう言えたらいいのに、なんて少し思つた。姿形が変わつて

も忘れられないんだ、そう知つた事が少し悲しかつた。

「久しぶり、もとき基があんまりいい男で誰か分んなかつたよ。」

携帯が鳴つて、畠山からのメールが届く。

“木下がお前を捜している。悪いがジムの場所を教えた。”

悪い。  
しかも、遅い。

私は肩をすくめた。どんな顔をして会えばいいのか解らない。正直一度と会つつもりは無かつたから。

「勇利は変わらないな。ハンサムなままだ。」

その一言に思わず左の頬に指を這わせた。基の瞳が曇る。それでも私を見つめている視線を少しも逸らさうとはしなかつた。

「少し、話を聞いてもらえないかな。」

その声は私が覚えている彼の声より一段と低く、でも確かに基の声だつた。

これからトレーニングの予定だし、その後ジム友に夕飯に誘われていた。明日は休みとはいえ早朝から町内会の大清掃だ。

私には自分の“今”が有り“生活”が有る。

「嫌だ・・・・。」

遮るように彼はそのチャーミングな顔を歪めた。

「俺の一生のお願い、な。」

それは私が抗う事の出来なかつたあの笑顔。  
まさかまたあの間違いを犯すはずは無い、もつ學習したのだから。  
私は自分にそう言い聞かせた。

そうして私たちはジムに背を向けた。

まだ早い時間の居酒屋はガラガラにすいていた。馴染みの大将にお願いし2階の座敷に上がる。そこなら静かに話せるはずだつた。彼のくだけた雰囲気とは裏腹に、今晚は飲まない訳にはいかなくなりそうな予感がして気が重い。こいつとの複雑な関係を今まで誰にも話した事は無いし、打ち明けたいとも思わない。だからどんな用件でこいつがやつて来たにせよ、今夜の私は酒に逃げ場を求める、そんな気がした。

ビールのジョッキを軽くあわせたものの一人とも唇を触れさせただけ、飲んだポーズをとつただけだつた。

二人とも余裕をみせる振りをして、思いのほか緊張しているらしい。

「6年になるな。元気にしていたか？」

基が少し長い前髪を払う。私が覚えている基はいつも短い髪をしていた。当然と言えば当然だ。あの頃の私たちにとってボクシングが全てで、一人とも当たり前のようになつたのだから。そして今の私は肩まで髪をのばし、それらしく後ろで束ねている。

「ああ、それなりに。基はどう？」

「まあまあって所か。俺は大学出てから東京で就職したんだ。弁理士っていう資格取つて、特許がらみの仕事しているよ。毎日がディスクワーカーだけど、楽しいと言えば楽しくやつてている。」

「よかつたな。」

それからしばらくなつたり障りの無い話をした。早く本題を切り出せばいいのに、そう思う反面、基が何を言いに来たのかまるで解らず不安で胸が苦しく、この再会を無かつた事にしたいと思つた。無性に咽が乾くからジョッキを一気に飲み干して、その勢いで話をつなぐ。

「俺の方は希望かなつて鍼灸師になれたよ。今じゃボクシングジムのサポーターみたいな事やりながら、時々練習にも参加させてもら

つてるんだ。」

「俺はあれからボクシングをやめた。」

その事は風の噂で聞いていた。

「不思議だなあ。最近じゃ女がボクシングするのが流行つてるって言つのに、男のお前が辞めるなんて。」

基といふと、なぜか昔の男口調に戻る自分がいた。

「勇利の言つたとおり、俺には資質はあつても、才能は無かつたからな。」

ああ、そんな事まで覚えているのか。彼の記憶力のよさに脱帽だ。

「それに俺にはボクシングを続けるだけの情熱が無かつたんだ。お前みたいにな。」

その言葉は私に向かつての皮肉といつよりも、彼が自分自身に言い聞かせている、そんな風に聞こえた。

## 第一話 知られたくないかつた過去

今でも良く覚えている。その日は昨日までの寒さが嘘みたいに無くなつていて、暖かい日差しに咲き初めの桜の花びらがきらめいた。それまでこれから始まる全く新しい生活に不安が有つて、本当にこれで良いのかなつて、自分の選択に迷いも有つた。だからそんな祝福された始まりに高校生活は明るいんだ、なんて勇気づけられる気がした。

そんな入学式当日、整列の並びで近くになつた木下基は初対面の私にためらい無く声を掛けてきた。切り立てのなじみの悪い髪型、良く動く瞳、えくぼの浮き上がるその笑顔に彼の第一印象は

“やんちゃな中学生が紛れ込んだ”

そんな感じだつた。そのくせ36人いるクラスメートのうち仲のいい知り合いが女子しかいないと恥ずかしそうに頭を搔いた。

「正直、俺、さびしんばなんだよなあ。だからせ、仲良くしようぜ。」

私は女子では無いらしい。まあ、当然と言えば当然だつた。私がその日着ていたのは、紺ブレにチノパンといつ、とうてい女子高生には見えない入学式スタイルだつたのだから。しかも彼の着ているソレは正に私の着ている服そつくりで。ただ違うのは胸元のエンブルムぐらいなものだつた。今思い出すと笑えるのだけど、紋章の作りは私たちの育ちを象徴するかのように天と地ほども違つていたことにその時の私は気がつきもしなかつた。

15歳という未成熟な年齢は、同じ身長、同じ体型、同じ髪型、同じ服装の私たちを同じ性に見せていた。

だから勘違いは当たり前の事だつた。

何しろ私は自分が女になんか見えてほしくなかつたのだから。

城北高校は自由気質を重んじる私服の学校だつた。私にしてみればこの学校にはボクシングのマネージャーをする為に入りたかつたのだから、男ばかりのボクシング部に早くとけ込む為にもこんな打鬱陶しい“女”という性を捨てるつもりでかかつっていた。

名簿に載せた私の名前は

“山口 勇利”

なんて事は無い“ゆうり”は“ゆうり”でも  
“遊里”

の“ゆうり”が本名だったのだ。

同じ呼び名でも全然違うその名前。

遊里、女遊びの色里、郭。常識で考えれば自分の娘にそんな名前つける親なんていないと思つ。でも私の場合は違つていて。

「これじゃ“ソープランド山口屋”つてのと変わんないじゃないですか。」

合格発表の直後に私は城北高校の校長室に直談判に行つていた。

「本当は男の名前で“勇利”つてつけるはずが、女が産まれて来て慌てたもんだから、同じ音の“遊里”で届け出をしてしまつたんです。」

“勇利”の命名の半紙も持ちだし必死に頼み込んだ。

「父親が尊敬していたボクサーから名前をもらつたんです。ねつ？確かに漢字じゃ男名前になるけど“遊里”よりはずつとましでしょ？法的にきちんとした名前に改めるまで、お願ひだからこいつの名前を使わせてください。“遊里”つて名前を絶対、戸籍からも抹殺したいって気持ち、分つてくれますよね。こんな、色気違いみたいな名前、大つ嫌いなんです！高校に入ってまでその名前で呼ばれるのつて、耐えられないんです！」

校長先生は頷いてくれ、それ以上追求しなかつた。  
そして正式な通称名として学校から認可された。

そんな私の名前を彼は

「するどく（利）も勇ましいかあ、むちやくちやカツ『いい名前だ

なあ。」

と褒めてくれた。その一言で私は彼が自分の味方だつて思った。  
彼は中学でバスケットをしていたと言う。体が小さい割にはそれ  
なりの大会に出ていて、花形とはいかないまでもそこそこだつた。  
「でもさ、俺、自分が団体競技に向いていない気がするんだ。無理  
に協調性取り繕つてもなあつてさ。しかも高一でこの身長じゃ先思  
いやられるし。そこで考えたのが、ボクシング。カッコいいだろ？  
俺、身長166センチで体重54キロなんだけど、いくら食つても  
太らない体质みたいなんだよな。だから、減量とかちょっといと思う  
のさ。ここボクシング部つて県下じゃ有名なんだつて？ボクシン  
グなら高校から始めて仕上がるだろ？そうしたら俺でもインター  
ハイ、もしかしたら狙えそうじやん？」

そう言つてブレザーを脱ぐと、ざわめき戯れる同級生達の片隅で袖  
をまくり上げ、マッチョな筋肉ポーズをとつてみせた。

見事に、柔らかに膨らむ筋肉。贅肉が無く、太すぎず。緩んだ瞬  
間柔らかくほぐれる組織。

ははは、と笑う彼に我を忘れて見惚れた。

彼の売り込みは嘘じやなかつた。一目で分かるバランスのいい肉  
体。癖の無い骨格。有名中学でバスケをしていたという事は走り込  
みに耐えられる訳だから、持久力も有るはずだ。何よりバスケなら  
動体視力も期待できる。しかも普通は膝やどこかに故障が有るはず  
なのに、一つも無いと言つ。

正に私の理想の体だと思つた。

女はリングに上がれない。だから強い選手を育てて、自分の代わ  
りに勝つてもうつ事が長い間の夢だつたのだ。

その放課後、小学校からのジム友、といつても10年上の武に連  
れられ部室に向かおうとする私に、つるし上げを食らつたと勘違い

した基がついて來た。

本当は怖かつたと思う。身長は無いけれど周りのみんなは「」つくて、何よりボクサー特有の“目”というものが有るから。それなのに彼はついて來た。

私が女だと知つた後でも、友達としてのスタンスを崩さずに。そんな彼を神様がくれた贈り物だと思つた。自分はこいつの専属トレーナーになろう。そして一人でインターハイにいくんだ。

この時生涯の夢に一步近づいた気がした。

結局私が説得する必要は全くなくて、彼は嬉々として入部した。一人の仲は順調で、教室にいても部室にいても男とか女とかいつた壁はみじんも無くふざけ合つていた。そして周りの誰もがそんな私たちを、まあいかと見守つていてくれた気がする。毎日ボクシングに明け暮れ、とにかく楽しかつた。基と一緒だと何もかもがハッピーで、この世のすべてが輝いて見えた。

私は彼の中で次々と開花していくその才能に目を見張り、こいつの為に生きるのが自分の青春だつて信じて疑わなかつた。

基は私を“女房”と呼び、私は彼を“だんはん”（旦那様）と呼んでいた。ふざけた話だつた。お互いそんな気が全くなかつたから言い合えた呼び名だ。

そんな関係が変化したのは、一年になつた夏の終わり。

基は9月の地区の新人戦で準優勝し、私たちはそのあり得ないような勝利に浮かれまくた。拳を突き上げ吠えながらお互いを讃えた。一生の親友だと抱き合い、肩を組み、一人の絆が決して切れないものだと確信し合つた直後の事だつた。

中学の時の事だ。その頃の私には畠山孝之と言うパートナーがいた。それは高校に入つてからの基と私の関係に似ていた。ただ違う

のは私が孝之に抱かれていたという事だった。

その事が基にばれた。

づく

L e f t   A l o n e

つ

## 第二話 聞違いは繰り返す

孝之に抱かれたのは成り行きだつた。お互い恋愛した訳じゃない。私たちは子供で、セックスに興味が有つて、処理しなければいけないと言う漠然とした強迫観念を持っていた気がする。でもやはり辛かつたのは確かで。

とあるきっかけと違う学校に進学した事が幸いし、高校入学と同時に孝之との関係は卒業した。もちろん一度と連絡を取らうなどとは思わなかつた。

女にとつて愛情の無いセックスをするという事がどういう事なのか、気づかない振りをしている事が出来なくなつたからだつた。

だから私にとつては、蓋をしたい浅はかな過去だつた。

なのにまた私は別の理由をつけて同じ間違いを犯してしまつ事になる。

私はどうしようもない馬鹿なのだ。

同じボクシングというフィールドにいる限り、また彼に会う事は予想していた。現に小さな交流試合でのニアミスはたびたび有つたのだから。その“再び会う”という嫌悪感よりも私はボクシングを愛する事を選んだ。それに彼だって純粹にボクシングが好きだつて事を私は知つていたつもりだつた。

だから正面から顔を見合わせても自分は強く立つていられるとの時までは信じていた。

よりによつて、孝之は基の事実上のライバルだつた。

そしてその再会は最悪な形で現実になる。

ブロック大会、フェザー級決勝戦。私たちはお互いのコーナーにいた。その時の私は基以外の人間は見えていない、ある意味とても“幸せな”人間だったのだ。青コーナーの畠山は昔関係のあった男というよりも基の対戦相手以外の何者でもなく、私にとつては分析の対象だった。

思い出すのは彼の昔の癖、ジャブの時反対の肘が下がりやすいだとか、疲れてくると奇妙に足をスイッチし切り替える事だとか。

試合は接戦で、判定次第では負けたかもしれないと思つた。だから基が優勝を決めた瞬間、私達は人目を気にせず抱き合つて喜んだ。その退出の時、破れた孝之が私を呼び出したのだ。

“話したい事がある。”

と。

行きたくはなかつたけれど、その事で後から部の人間にちょつかいを出されても嫌だつた。その時は上手く話をまとめる自信が有つたのだ。

でも、現実は甘くない。

人気のない地下のトイレの口の前で、開口一番彼の静かな罵声が私の中でこだました。

「勇利つてさ、今でもダッヂワイフしてんの?」

つて。

痛い言葉だつた。

その昔私は彼のトレーナーになる事を夢見て、孝之は将来の世界チャンピオンを目指していた。私はただマグロのように、好きだとかの感情も無く彼の欲望を処理してあげていた訳だから、そう言われても仕方が無かつたのかもしれない。

気分が悪くなり、話なんか出来る状態じゃなくて逃げ出そうとした。その腕を掴まれた。

「俺、本当に勇利が好きだつたんだ。それなのに、なんでこんな事になつたんだよ。このまんま、ライバル続けるのか?もう一度、俺

んとこに返つてくる気はないのかよ。」「

そんな言葉、聞きたくなかった。

もう終わった関係だから。

彼が無理矢理かぶさつてくる。身長はさほど変わらないのにその力の差は想像以上に大きく、ある意味予想のついた“差”だった。

この絶対的な“差”が私にボクシングを諦めさせたのだと心の中の冷たい声が囁いた。これが現実だからって。

逃げようとする私に彼はキスをした。ガチガチと歯があたり彼の汗の匂いが鼻孔を満たす。

耳鳴りと同時に聞き慣れた声がして、蒼ざめた基がそこに立つていた。

一部始終を聞かれたのは明白だった。それでも彼は私をかい、悔しさからか恥ずかしさからか、今ではもう分析なんか出来ない感情に身動きも取れないでいる私をそこから連れ出してくれた。

でも、孝之が投げつけた“不信感”という石は、基の心に波紋をよんだ。確実に。

彼に負けて欲しくなかつた。私なんかの関係に悩んで、せつかくの才能が潰れてしまうなんて耐えられなかつた。基にはまだまだ可能性があつて、これから羽ばたいていくのに、私のせいだリタイアなんかして欲しくなかつた。

3年前の私はセックスの意味がよくわからなかつた。その事で子供ができるってことも知らなくて、孝之に教えてもらつたほどだ。避妊するから大丈夫と言われ、平氣な顔をしながら大人になれば誰でもする事だから言い聞かせ、でも怖くて体をすくめていた。

あの頃からは少しば成長し、男と女の知識も増えたつもりだつた。

だから基に抱かせた。

どうせたいした体じゃない。

私は他に問題の解決方法を知らなかつた。ただ、孝之に許した事を基にも許す事で価値を量り合い、とりあえずはイーブン。現在進行形という事で基の方が上、という、今思えば情けないほど子供のやり方で自分を、いいや自分たちを納得させ合つていたんだと思う。

Left A

つづく

lone

## 第三話 聞違いは繰り返す（後書き）

痛々しい話が続きます。勇利のバッカラウンドです。嫌いな人、ご免ね。

## 第四話 悲しい関係

基はいつもすまなそうに抱いた。高校2年と言えばやりたい真っ盛りだ。その頃には身長が一気に174センチまでのびた基は、恵まれた体格とつらやましいほど純粋なその気質でかなりモテていたと思う。

部室の裏で告白される姿を何度も目にしていたのだから。

ひらひらとしたスカートを翻す蝶の様な女の子達。お人形のような手足。年頃の男の子にとって可愛い彼女は夢だったろう。デートして、見せびらかして、じゃれ合って、じく普通の高校生の“えつち”して。

最初の頃彼が本気で誰かに恋をしたら私との関係は終わると思うていた。

現にほんの少しの間基には彼女ができる、私たちの仲は立ち消えになつた事もあるのだから。

何しろ彼には気取られ無いようそつそつにしむけたのは、この私。

私は自分に女として魅力が有るなんてうぬぼれてはいなかつた。たしかに小学校の頃にはそこそこ可愛い分類だつたとは思う。でも今は男にしか見えない短い髪型に、筋肉質に作つた体。表情も厳しそぎると思う。怒声も罵声も何でも有りだ。現にジャージを着ていたら男ばかりの大会会場でさえ女だと扱われた事は一度も無かつた。でも彼は必要以上に律儀で、結局インターハイを目指したいと言つ私の夢を一緒に見る事を選んだ。

つまり、恋愛をする余裕が無いほど一人はボクシングに打ち込んでいた。

基とのセックスは苦痛だった。抱かれるたびに、したい訳でもな

いのに濡れてくれる自分の体が不思議で、私って変だ、狂っているよと思った。

その現実が、自分は当たり前の女の子の様に恋をする人間じゃないんだって思わせてくれた。

そして私は再びダッシュワイルフの役目に徹する事になる。

マンガや小説に有るような恋人同士の語らいや、甘い嘘言は皆無だった。それどころか、一度も自分からキスをする事はなかつたし、私の指は最初から最後までシーツを掴んでいた。

それなのに、重なる毎に基の心が私に傾いてくるのが解つた。いつしか彼は私の顔色をうかがいながら歓ばせようとするようになり、じつと見つめながら愛撫を繰り返し、信じられないほどの絶頂の世界に連れて行つてくれるようになつた。

耳元で囁かれる

“ 勇利 ”

と言つ私の名前は

“ 好きだ ”

の代わりに発信されているようで、その響きにどうしようもない歓びと哀しみが沸き上がつた。

彼は誰が見ても理想の恋人だつた。

ボクサーとして華やかに決めている基。だからといって地味な努力もコツコツやる事の出来る根性が有つた。プロは無理だとしても、その輝きは私に取つてワールドチャンピオン並みだつた。

友人の信頼も厚い基。

いつしているのか解らないが、それなりにいい成績も維持していた。

パンチをもらわないようにガードを確実に固める彼の顔はボクサーラしからぬ綺麗なもので、笑うとえくぼの浮き出る横顔にすれ違う女の子達が騒いでいた。

私だって基が好きだつた。愛してたと言つても過言じゃない。

でもはっきり言えるのは、私が恋したのは彼の才能と将来にだつて事。

そう、何も持たない素の基に恋をしていた訳じやない。

そんな自分が嫌いだつた。純粹に彼を愛する事ができたらどんなによかつただろ。そのたくましい肩に腕をまわす事ができたらどんなに楽になれただろ。

でも、できなかつた。

こんな中途半端な心で恋してしまつたら、基を心底傷つけんと思つた。

私は彼の気持ちに値しない女なのだから。

そんな心の隙間に、雨の雫の様にしみ込んだのが基の冗貴だつた。

それは偶然が重なつただけだつた。

つづく

Left Alone

## 第五話 不審な男（前書き）

未成年の飲酒は法律で禁止されています。物語はフィクションです。

## 第五話 不審な男

初めて会った時の彼はあまりよく覚えていない。

新人戦の後の打ち上げで、せっかくのお祝いだからお酒を飲んでみようと話が決まり、一軒家の基の家に白羽の矢が立つた。2年の中でも一番年をくつてみえる井ノ原と栄が酒を買ってきて、幼く見える加藤と幸治は食い物を買ってきて。俺と基は減量のためしばらく遠ざかっていたお菓子コーナーで新製品を選んだ。

初めて口にしたお酒のせいでみんなふざけていた。いつしか王様ゲームが始まり、井ノ原と幸治が一本のポッキーを一人で食べると言つ罰で盛り上がっている時、仕事帰りの基の兄貴がやつて來たんだ。目の前に広がる男同士の痴態に慌てる事もなく、むしろにやつとわらつたスースツ姿の男。

それから視線が合つた気がする。

基とはあまり似ていらないなと思った。身長は確かに一回り大きい気がするが、細身な事には変わらない。でも、なぜか違うと感じた。6年も歳が離れているとそんなものかもしれない。

そして俺はこのときかなり馬鹿な事を彼に向かつて言つたんだと思う。仲間が一斉に吹き出し、手を叩き、その人は目に見えるほど動搖し部屋から出て行つた。

それつきりの事だつた。

次に会つたのは数週間後の週末の繁華街。

その頃には、俺は基と寝るよつになつていた。

俺は仕事で酔いつぶれる予定の母親を馴染みの交番で待つっていた。母の絵里子さんは水商売をしていた。子供の俺から見てもとても綺麗な人だ。俺が小学校2年のとき父親が事故で亡くなつて、それがお仕事のきっかけになつた。

お店のオーナーは父の古い友人とかで、絵里子さんを快く引き受けてくれたと言つ。ママさんは少し小太り気味だけいかにもママさんと言つた感じの優しい人だ。

その店はいわゆるスナックに毛の生えた様なクラブとでも言つのだろうか。絵里子さんはそこで夜6時から2時まで働く。平日の仕事はそんなにキツくない。ただ、給料日直後やボーナスが出た後、年末年始や年度末はかきいれ時になる。

そんな時絵里子さんは無理をする。

お店が終わるまでお付き合いし、新しいボトルの為に無茶をする。だからいつしか酔いつぶれた母さんを介抱するのは俺の習慣になつていた。

お迎えがかかるのはだいたい4時から5時と決まつていて、その日も時計は4時20分を指していた。

さすがにその時間帯に明らかに10代の俺がほつつき歩くのは都合が悪い。最初の頃は喫茶店で時間をつぶしていたが、ひょんな事から顔見知りの交番のお巡りさんに声をかけられ、それ以来図々しくもその人が居る晩は交番で過ごすようになつっていた。

眠い。俺はその交番の片隅で船を漕ぎだしていた。

そこに突然の女の人ののしり声。

「ぼつたくられた！－」

ここではそんな言い争いがしそつちゅうだ。俺は睡魔と仲良くなつててを繋いでいた。

断片的に店の名前が聞こえる。

ああ、またそこか、なんて思いながら頷く。うんうん、あそこは悪いね。でも、たいした金額はボラレ無い。せいぜい3掛けっこだる。薄田でサラリーマン風のその集団の人数を見る。4人。4人×1萬×3倍 12萬かあ。確かに安くはないよな。まあ、やたらと身なりがいいから5掛けいつたかなあ。でも、ヤバいの分つ

ていて入った口調も感じていて、ま、金持つてている奴が社会勉強したって話しか？なんて見ていると、その中の一人と目が合つた。どこで会つた事がある？身長180センチ弱の中肉中背。広い肩幅によく似合つ背広。手足の先が少し出している変わつたデザイン、きっと海外ブランドものだ。整つた顔つきは“生徒会長”的だ名の同級生を思い出させた。歳は大卒2年目と言つた所か。その人は俺に向かつて、奇妙なモノを見るかのように目を細めた。

この時は俺の事を“売り物”だと勘違いしているB-S系かと思った。

その女の人がひとしきり文句を言つた後、一緒にいた男の人達になだめすかされて交番を出ようとした時（こういうトラブルは処理が難しいらしい）、もう一度眠るつもりだった俺の腕を強引に引っ張るヤツがいた。

つづく

## 第六話 基の兄貴

「どうして勇利君がこんな所にいるんだ。」  
予想もしていなかつた事、しかも名前まで呼ばれて俺は一発で目を覚ました。

そいつの吐く息はやたらと酒臭かつた。

「すみません、笹川さん。先に返つてください。この子知り合いかんです。」

笹川とよばれた派手な女のは、せき今までの攻撃的な声とはうつて代わり、

「ふうん。」

と首をかしげた。

「肇ちゃんの恋人？」

「馬鹿言わないでください。」

男は苦笑いした。残りの男達がおおっとじよめぐ。自分で言うのもなんだが、俺は美少年の部類に入るらしい。

「ここからはプライベート、はい、帰つてください。」

お仲間を強制送還した後、男は広川巡査に私の事を訪ね始めた。広川さんは答えに詰まつていた。何しろ、俺が

“ここひどだれ？”

て顔していたんだから。迂闊に他人にいらない事を話してはいけない。常識だ。

彼はその沈黙を勘違ひしたらしかつた。

「さつきも言いましたが、この子は僕の弟の友人なんんです。僕はこういうのですが」

と言つて名刺を2枚差し出した。なるほど、ここの人はこういう場慣れをしている人らしい。酔っぱらいの割にしつかりしているじゃないか。2枚出した名刺は、名刺が本物である証なのだから。

「弟は高校でボクシングをしています。」の勇利君は、その口のマネ  
一ジャーなんですよ。」

どうやら俺を、補導されたまではいいけれど黙んまり決めた少年A  
と勘違いしたらしい。

「僕でよかつたら話しかけていいんですが。」

何ともお固い人だ。広川さんは名刺を私に見せた。

“木下肇”

「なんだ、基の兄貴かよ。」

私はすつとんきょんな声をあげていた。

その時携帯が鳴った。

案の定マスターからのお迎えメールだった。

「じゃ、そうこうことで。広川さん、ありがとう。」

俺はお巡りさんに手を振ると兄貴をそのままに置いて交番を出た。

「おっ、ちょっと、待ちなさい。」

彼は慌てついてこようとした。振り切れないだらうなあと思いつつ、自分のこんな生活を他人に知られるのが嫌で、厄介だと思った。  
「これからお仕事だから。」

勝手知つたる道を酔っぱらいやアフターのアフターみたいなお姉様の間を交わしながらすたすたと歩く。かなり酒臭く、相当酔つているはずのこの人はそれでもがんばって付いてきた。

「君は、何なんだ。」

しつこく腕を掴まれた。

「ちつ。」

面倒くせえ。

「あそこは交番は、俺にとつて喫茶店がわりなの。俺はこれから仕事明けの母親を迎えて、彼女を休ませて、お店掃除のバイトにいそしむ訳。オッケー？」

眉間にしわを寄せた顔。ま、解るはずが無い。

「詳しく述べて説明してくれ。仮にも君は高校生だろ？」「

それからこう言った。

「「」んな事が学校に知れたら、あまりいい顔をされないと思つが、どうだろ？」」

なるほど、さすが有名どじの出版社勤務。俺はさつきの鉛刺を思い浮かべていた。さすがに言葉の使い方が適切だつて。

別に学校にばれてもたいした事は無い。その為に絵里子さんのお迎えの時には必ず交番に顔出して悪い事していませんよつてアピールしているんだから。でも波風は立たない方が良いに決まつていて。だから俺は諦めた。

「ついて来なよ。そこで、説明してやつからせ。」

案の定絵里子さんはソファーで酔いつぶれていた。「」う見えてお客様さんがいる時はしゃきつとしているつて言うからたいしたものだと思う。片付け途中のマスターとママさんに付いて来たいらないお客様の事を説明する。

「 親友の兄貴。来る途中で見つかって、不審がるから連れてきた。二人は、

「あつそう、じゃあ、後はいつもどおりよろしくね。」

つて感じで何事も無かつたかのように帰つていつた。さすが水商売。何に動じる事も無い。

俺は兄貴の事は放つておいてミネラルウォーターのボトルを開けると、とりあえずソファに横たわつている絵里子さんの口に含ませた。一一日酔いは辛いから。

「「」の人が私の母親。綺麗な人だろ？」いつもは絵里子さんつて呼んでる。で、ここが職場。かきいれ時は絵里子さんがんばりすぎで、潰れちゃうんだ。そのお迎えにくるんで、あの交番でスタンバイしていた訳さ。交番のおっちゃんは古い馴染みだし、ここから家まで車で30分有るから、あそこで待つていた方が都合いいんだ。」夜遅くなるとここまで來るのに足が無かつた。まさか自転車でくる

事はできない。帰りは一応お店持ちだからいいとして、来るのにタクシーなんか使ってられなかつた。それなら24時間営業の喫茶店にいた方が金がかかるない。

俺は彼にも水を渡した。兄貴は遠慮する事無く

「ありがとう。」

ときれいな仕草で飲み干した。

時計は午前5時を少し過ぎていた。

「絵里子さんはこれから少しここで休ませてもらひうんだ。」

この時間に捕まるタクシーは少ない。

「その間、ここ掃除をしたり、在庫の確認をするのが俺のアルバイト。ま、兄貴も疲れていそうだから、そこに座つて寝てれば？」

俺はそう言いながら椅子をテーブルの上に乗せ始めた。

「でもさ、こんな事、基に話さないでくれるか？」

俺は何気なく切り出した。兄貴のさっきまで見せていた険しい表情はなりを潜めていて、俺のやっている事をじっと見つめていた。この人は真面目な人なんだなつて思つた。きっと基の事が心配なんだ。仮にも弟の親友が週末の繁華街で交番にいるようじや、そりや不安だらうから。

自分がってこんな生活が好きな訳じゃない。できるものなら絵里子さんにこんな仕事を辞めて欲しかつた。自分の体を切り売りしている様なものだ。でも母さんには母さんのプライドが有つて、どうしても自分の力で俺を高校だけは卒業させてやりたいつて思つてゐる事も知つていた。

手に職のない綺麗なだけが取り柄の女、しかも40歳だ。親子二人が食つていく為には、自給880円のスーパーのパートなんかじややつていけなかつた。

そのくせ俺にはバイト禁止と言つから変なものだ。

唯一やらせてくれるのがこの店の掃除バイト。絵里子さんが酔い

つぶれた日にだけの臨時の仕事。

俺はお店の電球をぜんぶチェックし、傘を雑巾で拭いた。

「俺の自宅での生活と学校の生活は関係無いから。それに俺達は上手くやつていいつもりだしな。」

それは兄貴に言つといつよりも自分自身に言い聞かせていく言葉だつた。

少し間を置いて、静かに響く声が

「それはどういう意味で言つていてるのかな？」

つて言つて来た。

ああ、頭のいい男は嫌いだ、と俺はため息をついた。

「勇利君は基のことを見くびっているのかい？それともこの僕が君を軽蔑する事を牽制しているのかな？」

そう言う意味でとつてほしくなくて、もつたいぶつた言い方をしたつて言つた。

「まあ、それも有るし。」

俺は少し口ごもった。

「別に親が水商売しているからつて基が俺の事を馬鹿にしたりさげずんだりする訳ないつて知つてる。それに兄貴は仮にも基の兄貴だぜ。そんな人間じやない。でもこんなつて俺はあごで周りを指した。

「暮らしをしている事を慘めだと思われたくない。」

そこにあるのは安っぽい調度と糖質のこびりついたボトルキープトイミテーションの“退廃”

「俺の母親がこういう仕事をしてゐる事、基は知つてゐるけど、見ると聞くとじや全然違うだろつ。」

俺は兄貴に背を向けた。お店の中はアルコールの据えた匂いといふされたタバコの香りともう一つ、人間特有の嫌な匂いが染み付いていた。

「基の兄貴は俺にとつて他人だし大人だから良いけどさ、基は親友だろ？だから同情されるのは辛いんだよ。」

もうそれ以上何も言えなくなっちゃって……。

「ああ」

つて兄貴はそこで一息ついた。

「そうかも知れない。」

その声は静かで、何もかも呑み込んでくれるようだつた。振り向くと彼は何とも言えない穏やかな表情を浮かべていた。

「別に躯を売つている訳じやなし。君は君の生き方を誇ればいい。だから

「ありがとう。」

俺はいつになく素直な気持ちでそう言った。滲む目を隠しながら。

俺はソファで寝ている一人に毛布をかけた。それから小さな扉を  
目一杯開いて朝の空気を入れる。

こんな場所でも朝になると朝の匂いがするから不思議だつた。

## 第七話 平凡な幸せ

当たり前のようにお店の中は汚れていて。それを洗剤をつけた雑巾でひたすらに擦つていく。

本当は業者さんにやつてももらつた方が確実で、お金もからなに違いない。絵里子さんも早くお店から追い出した方がお店の管理も楽だろう。

それでも俺を使ってくれるマスターに感謝。その分、業者さんじややらない所までやらなきゃって思つのは、ほんの少し操られている気もする。それでも、感謝。

「マリを出しにいくと、3件となりのスナックのママが大きなマリを出そうとしていた。この前腰を痛めたと聞いていたから代わりに運んだりすと

「ありがとね、勇利ちゃん。」

と優しく声をかけてくれる。どういたしまして。この人は以前帰ろうとする絵里子さんと俺に絡んだ客を上手い事追つ払つてくれた人だった。それ以来のご縁だ。

「少年、おしおりくんな?」

時々見かけるお姉さんが声を掛けてきた。口元を見ると吐いた様な跡がある。

「お姉さん、大丈夫?」

俺はあわててお店に戻りおしおりと水を差し出した。彼女は水を飲み干すと、化粧の崩れなどといった気にしないで顔を拭いた。

「ふあっ。生き返る。」

一瞬でその表情が変わった。

「いつもあんがとう。お礼ついでにちゃんとだけど、これあげる。」

そう言って紙袋を手渡した。

「馴染みのお客さんからもらつたんだけど、あたしにはビリもって感じでさ。悪いけど、貰つてくれない？」

この人はいつもこうだ。いらないと言つても、人にものあげるのが好きらしい。多分中身は食べ物だ。

「口チになります。」

「うん、いい子だ。」

彼女は俺の肩をポンポンと叩くと行つてしまつた。案の定中には北海道産の豪華乾物セットが入つていた。自腹じや買えない代物だ。思わず笑つてしまふ。

世の中普通にしていればいい事が巡つてくるもんだなあ、なんて思つた。

気がつくと8時を過ぎていた。兄貴を起こさうと声をかけるとすると彼はやんわりと体を起こした。

それから表情の読めない顔つきでこいつ言つた。

「勇利君、こんな事言つちや何だけど君には誘惑が多いだろつ。最高で一晩いくらつて言われた事がある?」

何を言われているかすぐに解つたけど、まさか基の兄貴からこんな台詞が出てくるなんて思いも寄らなかつたから、

「40萬・・・・・

つて正直に言つてしまつていた。

「ああ、もちろん、ふざけてだけだけど。」

慌てて「まかそうとする。いくら何でも絵空事の金額だし、さすがに軀を売るのは勘弁だ。兄の端正な顔がため息をついた。

「いや、妥当な金額だと思つよ。知つてるかい、ホモセクシュアルの男が綺麗な男の子のバージンに払う相場は、女の子の3倍だ。」それからゆつくつとソファに座り直した。

「ただ、そう言つ事に直面した時、忘れないで欲しい。いくら大きい金額がついたとしてもそれはお金でしかない。そして値札がついた時点で君は物になつてしまふ。買われてしまつた消耗品は使い古

され、壊わされて、価値が無くなつたら捨てられる。君の人としての「コア（核）」が無くなつてしまつ。その事を肝に銘じていて欲しい。

「なんて説教臭い言葉だろう。それにそんなの今時中学生でも知っている。それでもこの人が真剣に俺の事を心配してくれているのが解つた。

「こんな話しさしたら傷付くかもしれないが、君は男受けするタイプだ。綺麗な顔をしているし、筋肉質の割に線が細い。情にほだされやすくて、純真で、多分だか騙されやすい。タイミングさえ合えば50万の声がかかるかもしれない。きれいことは言わない。心も傷付くかもしれないがそれ以上にH.I.Vのリスクもある。現に僕の知り合いで一人、感染者した人がいる。僕は彼を責めるつもりはないが、周りの人を不幸にしてしまつている事実は目の当たりにしている。だから君にはいろんな意味で誘惑に負けないでいて欲しい。君が必要だとしてゐる人のためにも知つていてほしい。」

そう言うと、俺から目を逸らした。

「このことを言うのに、大の男でもさぞや勇気が必要だつただろうと思う。

「ありがとう。」

「この言葉が好きだ。」

「ありがとう。俺、大丈夫だから。」

俺は兄貴の前に立ちその額から鼻筋を指でなでた。

「俺には大切な人がいるもん。絵里子さんに、基。ボクシング部の連中もそうだし。ジムの連中も。さつきのお巡りさんもそう。俺の事、支えてくれているもん。」

切れ長の瞳が緩く開かれ、俺を真つすぐに見つめた。その口元が少し緩んだ。

「ああそうだ。たつた今、基の兄貴も加わつたぞ。」

俺は自分でも信じられないくらい穏やかな表情を浮かべてしまつた気がする。

平凡かも知れないけれど、俺は幸せだった。

e  
つづく

Left  
A  
l  
o  
n

第七話 平凡な幸せ（後書き）

兄貴が好きっ

## 第八話 読い（前書き）

未成年の飲酒は法律で禁止されております。

## 第八話 謙い

それから時々基の家で兄貴と会う事があった。  
その度に俺は穏やかな視線を感じていた。

俺は日頃基や他の部員の食い物にうるさい。食い物は筋肉を作るだけじゃなくて脂肪になるし、時として内蔵を痛める事がある。若いから無理がきくけど、その溜まったストレスが本番直前に出て来るかもしれないからだ。頑張りどころで頑張れなくて後悔するなんて悲惨だと思う。だから毎日体重と体脂肪を測らせ自制を促す。  
かといって高校男子、しかも運動部がそんな事聞くはずが無い。  
という訳で、月に一回はわざとはめを外すようにみんなに言つているのだ。好きなもの食つて、好きなもの飲んで、一晩中騒げ、と。  
人というものは変なものでこういわれると欲が減退するらしい。  
しかも日頃節制していると、フライドチキンとかジュースをその日一日にたらふく食べようとすると体が受け付けなくなつていたりする。だいたい胸焼けがおき、脂っこい食べ物や甘つたるい食べ物が嫌いになつてしまうものだ。

その反動か、みんなめっぽう弱いくせに酒は好きだった。

基と俺がゲーセンやカラオケやさんの周りにいるとき事情を知らない女の子が声をかけて来る。いわゆるナンパ？ 基が乗らない時は、まあだいたいほとんどがそうだけど、ヤツが俺に指を絡め、二人見つめ合つてにつこりすれば解決する。今はやりのアレだな。

でもあんまり頻回にそれをしていると他の連中に

「シャレにならん。」

と笑われるし、別の意味で危ない男から声がかかる事もある。一度三度とストーカーまがいの目に有つた事もある。しかも男だし。

ホストになんないかつて勧誘も結構しつこい。髪は短いのに私服のせいか18程度には見えるらしい。年齢言つて退散してもらおうとする、誕生日を教えるとまで言つてくる。

“大人になつたら男のロマンを見せてやる”

その意味が分からず少し話しを聞いてやつたが、たいした事じゃなかつた。要は金と女と車の話しだ。

欲しくないものはいらない。

だからボクシング以外、外で遊んでもつまらなかつた。  
てな訳で、月に一回ぐらいは仲間と基の家で宴会をするようになつた。

やたらとでかいテレビと恐ろしくいい音の出るスピーカーのある  
そのリビングは完全防音だそうで、騒ぐならこっちにしろと兄貴に  
言われ、それでは遠慮なくとおおいに盛り上がつた。快適なソファ  
に毛足の長い絨毯。モデルルームみたいに整理され、ともすれば冷た  
く感じそうな部屋なのに、そこには温かい家庭の匂いが有つた。

男一人で住んでいるのに、おかしいや。女一人で暮らしている自  
分の小さなアパートの方が、80年代のテレビのセットみたいに作  
りもの臭いって思えるなんて。

俺は心の底で小さなため息をついた。

いつだつて11時を過ぎた頃に基の兄貴は帰つて来る。そして風  
呂に入つた後、もうぼちぼち眠くなり始めた俺たちと、時々一緒に  
飲む様になつていた。

一応俺達は未成年な訳で、大人というものは注意する義務が有る  
はずなのに、この人は至つてのんきだつた。自分用のウイスキーを  
持つて来て（さすがにこれは飲ませてくれない）いつの間にかまぎ  
れて話しに加わつていたりして。

結構飲んで酔っぱらうんだけど、いらない説教をぶつたり、人の  
悪口を言つたり、責めたりする事は無くて。だからもちろん俺の秘  
密も守られていた。

今から思えば、そやつてやつてくるのは、基や俺たちを心配し  
てくれていたんだと思う。

そんな兄貴だから俺たちは密かに慕っていた。

彼が手にする“バカラ”とか言う重たいグラスを見る度に、この人は成熟した大人で、この7年という歳の差は一生埋まらないんだつて思った。でもそれと同時に、超えられない存在がいる事に何とはなしに喜びも感じていたんだ。

兄貴が基の自慢だつて事はみんなが知っていた。頭がいいとか、カッコいいって事じやない。兄貴は俺達“子供”を“大人”と対等に扱つてくれていたからだ。

だからその夏休みの夕方も特になんの問題も無いはずだった。

基は俺を抱きたいとき下唇を噛みながら俺を見つめる癖が有る。部の帰り道に一人で歩きながら時々感じる気配で分かるようになつた。

部の練習はキツく、全員がへとへとだつた。その反動だろうと思うけど、基の性欲は増していた。

それは基との約束だから。基が抱きたい時に抱いてもいいと。基がボクシングに打ち込める為なら抱かせてやると。ただしあくまで体だけの条件だつた。

ダッチワイフ。それがこの時の俺の名前だからな。

その日もいつものように彼の為にダッチワイフになつた。

彼の家に着き部屋に上がる。扉が閉まつたその瞬間から俺は基のモノになる。

2度の行為の後、シャワーを借りた。微かに疼く女を俺は冷たいシャワーで完全に洗い流す。

基の部屋を出るとまるでスイッチが切り替わつたように俺達は親友に戻つた。

基はできた男で、たとえ暗がりの部室でも、深夜の帰り道でも、一人きりのリビングでも一片たりともそのそぶりを見せた事が無い。見事なまでに自制されていて、ともすれば油断しがちな瞬間でも決して気を抜かない。だからこそ最近は抑制が外れた彼のベッドの上が怖かつた。

彼はそんな俺の不安を知らない。

それでもいつもみたいに夕飯を作り、ボクシングのタイトルマッチを見た。

スーパー・バンタム級だから基より少し重い。というか、本来基の身長でフェザーは軽過ぎだと思う。もしかしたらそこがこいつの限界かもしれないと思つた。彼はボクシングだけをするにはあまりに魅力的だ。高い身長に長い手足。よく動く足。優秀なアウトボクサーだけれど、彼の“太らない”は“筋肉も太くなれない”と同義語だから。

でも大会まで残り10日。その不安はもう忘れる事にした。

俺達は試合展開の話しなんかしながらじやっていた。もちろん、友人として。

そこに兄貴が帰つて來た。

早い帰宅だといつうのに、いつもよりも疲れて見えた。

案の定不機嫌で、俺は何となく嫌な予感がした。

「帰れ。」

兄貴の言葉は簡潔だった。その言葉にはあからさまに俺を嫌がる響きが有った。

何が気に障つたのか分からぬ。

なんだよ、いつの間に俺の事がそんなに嫌いになつたんだよ。何か悪い事したつて言うのかよ。俺は動搖した。俺はこの人が大好きだつたのに。俺と基の関係にお前は関係ないじゃないか。それに俺は好きでここに来ているんだ。そう思いながら、胸がちくちく痛んだ。

好きでいる？嘘だ。

本当はそれだけじゃない。それを思い出したとたん、俺は無償に腹が立つて來た。

そうだよ、俺は薄汚いよ。兄貴みたいにいいお育ちで、順風満帆いい大学でて立派な仕事に就いている人間になんか分らないだろうよ。俺は自分の事切り売りしているみたいなもんだもんな。援交してんのと変わんねえよ。もううものが現金かどうかの違いでさあ。でもさ、それでも手に入れたいもんが有るんだよ。俺にはそれが必要なんだ。

でなきゃ俺だつて壊れちまう。

「俺にはボクシング以外、しがみつけるものが無いんだからーー！」  
気がついたらその言葉を吐き捨てていた。

何も言えなくなつた俺を兄貴は送ると言つた。あいにくの土砂降りだ。自転車じゃ帰れない。しかも金曜日。俺は引きずられるように車に押し込まれた。

「勇利君がそこまでボクシングに固執するのはどうしてなんだ。何か“好き”以外の理由があるはずだ。」

兄貴の口から出た言葉は空氣の様で何を言われたかすぐには分らなかつた。でも、ほんの少しの時間置いて、なにを言われたのか解ると、それは痛い痛いカマイタチになつて俺を襲つた。

「はっ。」

きつとこの人には俺の悲しみを分かつちゃい無いんだ。そう、悪気

なんか無いんだと自分に言い聞かせる。

兄貴の車は時速60キロを保ち、俺の家へと向かつ。この人は自制心の固まりで、急ブレーキを踏む事すらさえ無い。そして俺は信号機の赤を滲ませた。

「君は泣き虫だな。まるで女の子みたいだ。」

彼はそう言つとうるさいほどによく降る雨の中、車を路肩に止めた。

「僕は君を泣かせたい訳じゃない。」

でも、俺は泣いていた。泣くつもりなんかあるもんか。誰が泣きたくてなくんだ？それでも涙は止まらないなくつて、悔しさのあまり、噛み締めた唇が千切れた。

泣くつもりなんか無かつた。

彼は俺を抱きしめた。

何考えてんだ、こいつ。

でも、俺の涙は止まるどころか、勢いを増していた。

つづく

## 第九話 理由

「どうして話す氣になんかなつたんだろう。それは多分、兄貴の腕の中があまりに暖かくつて俺はほだされていたんだと思つ。

「父ちゃんが死んだ時、俺は8歳だった。」

俺には人には言いたくない秘密がまだまだ沢山有つたんだ。

喧噪の中、ひどく大人のその人たちは汗を飛び散らせていた。パン、パン、パンとリズミカルにパンチングを繰り出す音。リング越しに怒声を放つおっちゃん。ボクシングジム。普通の子供は近寄りもしないだらうけれど、俺にとつてそこは遊園地だった。

「ゆーりちゃん、ゆーりちゃん。」

オーナーが俺を呼ぶ。

「今日も可愛いな、ゆーりちゃん。大きくなつたら、ここジムのマスコットになるんだよ。」

すると父ちゃんが大きく頷く。

「そうだ、そうだ、遊里。お前は父ちゃんの自慢の子だからな。」

「うん。」

「大きくなつたら、ここジムを宣伝して盛り立てるんだぞ。」

「うん。」

父ちゃんは白い歯を見せて笑つた。14オンスのグローブが似合つていた。

父ちゃんはボクシングが大好きだった。今じや丑を悪くしているけれど、昔はプロをしていた事があると言つ。だから今でも時々こうやつてアマチュアのジムで遊ばせもらつてゐると言つていた。そんなカッコいい父ちゃんが大好きだった。

通つて来ている人達はみんな父ちゃんの事を

“先輩”

と呼んで、隣りにいる俺の頭を撫でてくれた。

「いい子だね。ボクシング、好きかい？」

もちろん答えはこうだ。

「うん、大好き！大人になつたらボクシングの選手になるんだもん！」

みんなに笑われても恥ずかしくなんか無かつた。

「そんな良い子の遊里ちゃんに、良いものあげようね。」

そう言われて受け取つたのは見た事も無いほど大きなチョコレートケーキで。どうやらジム出身の選手がプロの初戦で勝つた記念に貰つたものらしい。

父ちゃんは祝賀会が有つたから、俺は一人飛ぶように家に帰つてもらつたケーキを母さんに見せびらかした。

その晩父ちゃんは死んだ。ジムの友人達と飲んだその帰り、酔っぱらいのけんかを止めようとして入つたその先で、軽くこすかれもつれた足下の小さな縁石に足を取られ、帰らぬ人になつた。

てこの原理。そんな事だ。

したたかに打つた頭蓋骨。

病院搬送直後に死亡確認されたと言つから、人の人生つて何だと思つ。

父ちゃんもかなり飲んでいたと警察の人は言つた。広川と名乗るそのお巡りさんはひどく申し訳なさそうに話した。

「双方、酒に酔つていたようです。」

少しずつ大人になりながら、双方の“双方”って誰のことを言つていたんだろうと時々思い出す事がある。

けんかしていた人たちか？それとも、父ちゃんか？？と。

俺と絵里子さんに残されたのは、3冊のアルバムと楽しかつた思い出だけだった。

いつしか、絵里子さんは夜の街に働きに出るようになる。いわゆる、母子家庭だ。お酒の飲めなかつたはずの絵里子さんは気がつい

たらザルと呼ばれるようになつていた。朝になるといつの間にか隣りで寝ている、ひどくむくんだ顔の母さんに水を飲ませてから学校に行くのが俺の生活になつた。

だから

「夢にしがみついて、ナニが悪い。」

俺の声は震えていた気がする。

「父ちゃんと俺を繋ぐものはボクシングしか無いんだよ。」

ジムのオーナーは俺を実の子供のように可愛がってくれた。時代の流れか健康ブームでボクシングの人気が高まり、沢山の人がジムに出入りしていた。学校帰りから深夜まで俺はそこにいた。だつてそこには俺の居場所が有つたから。

「墓には、こんな話、しないでくれ。」

ほとんど懇願に近い形で俺は呟いた。兄貴にだからこそはなせた話なんだ。

「あいつにこんなしみつたれた話なんか聞かせたくない。」

本当は誰にも話したくなかった。

「こんな女々しい俺は、本当の俺じゃないんだから・・・・」

本当の俺は、もっと強いんだ。決して誰にも負けない。俺は泣いたりするもんか。泣いたつて勝てやしないんだから。

気がついた時、俺の携帯が鳴つていた。

「もしもし。」

声の揺らぎが相手に伝わらないように囁く。

マスターからだった。時間は11時を少し過ぎたばかりだ。

今晩は雨降りで客の入りは少なかつたと言つ。そのせいで彼女は常連さん相手にピッチを早めてしまつたらしい。

「今、行きます。」

俺は明るい声で返事をした。店のオーナーはいい人で俺達を大切にしてくれてゐるんだから、つまらない心配なんかかけたくない。

不意に兄貴が車を 発進させた。

「お母さん、迎えにいくのか？」

「うん。」

「こんな夜はタクシーだつてすぐ捕まらないから、濡れないように送つていってあげよう。」

その声に同情とか哀れみなんか無くて、ただ物静かな兄貴がいた。隣りにはありがとうさえ言えない俺がいた。

俺達をアパートまで送つてくれた兄貴は帰りがけに言つた。

「インターハイまでは全力を尽くしなさい。でもそれが終わつたら今度は君自身の人生を生きるんだ。今の君を否定しているんじやない。でも今しか出来ない事もある。学生だからこそできる勉強や、学校での生活とか。だからもう少し自分に甘くなりなさい。力を抜いて。君は一生懸命すぎるんだ。一人で何もかも背負う事は無い。重すぎる荷物は人に預ける事も必要なんだ。基に相談できなければ、僕でもいい。いくら頼つてきてもかまわないから、もし話を聞いてほしいと思ったら、その時は連絡をくれないか。」

名刺を一枚手渡された。また泣きだしそうになる俺を見ずに兄貴は去つていった。

どうしてこの人は基の兄貴なんだろう。

どうして神様は俺にもこんな兄貴を授けてくらなかつたんだろう。

俺にも基の兄貴みたいな人が欲しかつた。

その時の俺はボクシングのベルトよりもっと大事な事が有るつて気づいてしまつた気がした。

L  
e  
f  
t

A  
l  
o  
n  
e

כָּבֵד

## 第九話 理由（後書き）

ゆうりの名前がややこしいことお感じだと思います。勇利・遊里・優里 すべて“ゆうり”とお読みください。じつして表記が違うのか、後半で出てきますのでお待ちくださいね。

## 第十話 青春の終わり

真夏のインターハイはあっけなく終わった。ボクシングは総体全体の一番最後の日程で、蝉が地鳴りのように鳴いていた事を覚えている。

そう、何もかも終わった。俺はうなだれる基の腰を抱き引き寄せた。

「いい顔しろよ。」

それから控え室の方へ足を向けると、応援席にいた友人達に大きく手を振った。カメラのフラッシュが真っ白い旗のようく翻る。俺は拳を突き上げ、歯をむき出して笑った。基にかけた腕に力がこもる。そこへようやくと彼が顔を上げた。

呆然とした、やるせないような顔。

俺は無償に腹が立つた。基には全力を尽くしたと言う自信が無いのだろうか。あれほどまでに出し切ったのだ。勝てなかつた事に価値が無い訳では無いのに。泣き言を呴く基を蹴り倒したいほどだった。可愛さ余って憎き倍といつヤツだ。

俺は中途半端な慰めの言葉をかけようなんて思わなかつた。

少なからず俺はやつた。基の為、ボクシング部の為、何より自分自身の為、この2年と半年全力を尽くす事ができた。その結果がたとえ他人には不本意だったとしても、俺は堂々と胸を張っている事ができる。

「俺にとつてお前はスーパースターなんだよ。」

インターハイベスト8。それを人はなんと評価するだろう。

“緩い（ぬるい）”なんて言つヤツがいたら俺がぶつ飛ばしてやる。

そして2学期が始まり、生活は別の忙しさを見せ始めた。

ボクシングにかまけていて手つかずだった諸々が押し寄せてきたんだ。さすがに進路の希望も具体的になる。体育祭もあり、学祭もあり、田舎押しだ。部の引き継ぎも思ったより大変だつた。

今まであまりに自分一人で背負い込みすぎていた事をさすがに反省した。あの時言われた兄貴の言葉を思いだし、ともすればため息が出そうになる。その引き継ぎ内容をまとめる為に土曜日だというのに登校し、やつとの事で一段落つける事ができた。あとは新しい主将とマネージャーで仲良くしていけるライバル校に挨拶に行くだけだ。その帰り道、基が

「久々に勇利の飯が食いたいな。」

なんて言い出した。この1ヶ月ほど基の家に行つていなかつた。

「もう減量の必要も無いからさあ、たまには肉が食いたいなあ。第一さ、お前が夏休み中毎日まともな飯作るから、食えなくなると辛いんだよ。」

基は男のくせによく口が回る。

「作んねえぞ。」

俺は笑つた。

インターハイも終わり俺達の関係も一段落つくはずだつた。話し合つたことは無かつたが、距離を置き始めていたし、暗黙の了解だと思つていた。

「頼むよ女房殿。俺達さあ最近ろくなもの食つてないんだよな。脚気になりそう。」

“俺達”が誰を指しているかすぐ分つた。今日は休みの日で兄貴が家にいると言う事だらう。

あれ以来基は兄貴と俺に気を使つていて、俺に向かつて兄貴をかばうような事を言つ。

「兄貴も勇利の事、気にしているんだぜ。」

などと。でもそんなこと分つていた。離れていても兄貴は俺の事心

配してくれているって知つてた。

「しゃあねえなあ、今日だけだぞ。」

さすがに兄貴のいる家で基も手を出しきれないだろうし。それにもう寝たくない事をはつきり告げて、決着をつけたい気持ちも有つた。

俺達はスーパーに寄り基の家に向かつた。

兄貴はいなかつた。何となく騙された氣もするが、とにかく飯を作る事にする。

基はダイニングテーブルノートに参考書を広げ勉強しようとしているかの様に見えたが、思いついた様に床に転がリストレッヂを始めていた。

俺はそれを漫然とした氣分で見ていた。

彼は大学進学希望組で、しかもかなりレベルの高い所をねらつているから、本当はもっとがつがつ勉強しなければいけない身分のはずだ。

いつたい何をやつしているんだろう。そんな余裕は無いはずなのに、と。

インテラハイで獲つてきた盾は飾られる事も無く、リビングにあるゴージャスな食器棚の上の耐震用の突つ張り棒の横に置かれ、埃を被つてているようだつた。

親友としての基に迷いが有るつて事を俺は感じていた。

俺の方はというと専門学校が希望でそこまでする必要は無い。ま、奨学金とるにはいい成績とらなきやいけないんだけど。

いつもの習慣で俺は作った食べ物の情報をノートに書き残していった。カロリーや栄養バランス、味の特徴を記録しておきたかったから。

3年後鍼灸師の専門学校を卒業し就職したら、お金を貯めて通信の大学に行きたいと思つていた。そこで栄養学の単位を取り、いつか本当のトレーナーになりたかった。さすがに大学に行くほどの余裕は今の家には無い。だからいつかそなりたいと思う、その気持

ちを込めて書いていた。

プレートに今日のメインのマーチローフの固まりを乗せる。それからトマト、カボチャ、ジャガイモ、パプリカも加え、表面を油で掃いた。オープンにそのプレートを入れ扉を閉めた瞬間、そのガラス越しに、いつの間にか背中に立っていた基と目が合った。

彼は唇を噛み締めていた。

ああ、来る。そう思つた。

ゆつくりとオープンのスイッチを入れる。もう、話さなければ・・・。

「もと・・・」

言いかけて、後ろから抱きしめられた。

つづく

Let Alone

## 第十話 青春の終わり（後書き）

昔、勇利・アルバチャコフ というボクシングの選手がありました、彼のボクシングが大好きでした。とにかくそのスタイルがクール！！無駄な動きがなくて、的確で、軽やかで。クロスカウンターって天才の武器だつて思いましたね。あはんっ。

拳を突き上げて“ノープロブレム！”つてのもかつこ良かつたあ。この話に出てくる“俺たちのガツッポーズ”は二人が彼のスタイルを意識していたとういオタクな暗示なのですが、さすがに“ノープロブレム”と言わせたらボクシング大好き様達から嫌われると思い止めました。ながつ

## 第十一話 龜裂（前書き）

合意の上ではない行為が書かれています。お嫌いな方はパス願います。  
す。」免なさい。

## 第十一話 龜裂

「勇利・・・」

柔らかく抱きしめられてはいるはずなのに身動きが取れない。

「こうしていると、俺達新婚さんみたいだと思わないか？」

彼の唇が首筋に当たる。彼の躯はしなやかで決して不快な訳じゃない。むしろ心地いい。だから、それがいけない。

「約束が違う。」

俺は首を回した。基のため息がかかる。腕が離され自由になつたと思つた瞬間、彼の肩に抱え上げられていた。こんな事は初めてだ。

「ちよっ、何すんだよ。」

その状態で抵抗なんてできなかつた。ずんずんと階段を登られそつとベッドに下ろされる。

俺の目を基が覗き込み、何か言いたげに瞬いた。

「基・・・話しがしたい。」

「ああ。」

彼はそのまま俺を見つめた。

「分つていてる。でも、後で。」

唇がやんわりと当たる。初めて基に抱かれたときは天と地のやり方で彼は誘いをかけるようになつていた。

「後で必ず聞くから。でも話しさは後で。今日は部でさんざん話したからさ。」

唇が軽く噛まれ、放され、再び合わせる。

「少し、休ませてくれ。」

紙一枚も入らないほど近距離で唇越しに囁かれる。彼の「じつ」つした指からは想像できない様な纖細なタッチが頬を伝わる。

「何を話したいか、分つていてる。だから・・・。今までの分のご褒美をくれないか？」

彼には俺がもう寝たくないと言いたい事が分つていて、そんな気が

した。だからこれが最後だと自分に言い聞かせた。

基の腕の中で乱れる自分の映像が頭の中で揺れる。本能のままに彼を受け入れ、その快樂に身を任せてしまいたい。好きだとか、愛しているだとか友情だとか何も考えずに済む世界に行けたらどんなに楽だろう。肩に手をまわし、引き寄せ、体中を摺り合わせ、しならせ、唇を噛み声を殺す事も無く。

彼の熟知した愛撫が俺の全身を這う。それでも何かが違うとどうとかで囁きが聞こえる。何かが逆らっている。

俺はシーツを選んだ。それをキツく掴み、基が期待する様な反応のすべてを否定した。

それでも一人は高まつた。もうすぐ放り出されてしまう。その気配を感じ始めたその時、音がした。玄関の柵が開く音、そして閉じる。その瞬間、俺の軀が石になつた。

誰もいないはずの階下から呼ぶ声が聞こえたのだ。

その声の主は当然の事のように俺達がいると知っていた。そして俺の名前が呼ばれる。

嫌だ!!

俺の中で何かが蠢いた。嫌だ、嫌だ、嫌だ。  
基を突き放した。ここは俺がいる所じやない!!

全身に恐怖が走った。

兄貴には知られなくなつた。もし俺が本当に基を好きだつたら

違つたと思つ。もし本氣で愛していたのなら、何も恥ずかしがる事など無くて、見つかっても堂々としていただらう。愛し合つてさえいれば。

兄貴が帰つてきた事を基も氣づいていた。だからあいつも少し体を引き距離をとつたんだと思つ。でもそのあきらめの表情の後、ゆるやかに田が吊り上がり今まで見た事のない顔つきにかわったかと思うと、離れようとする俺にのしかかつてきた。

駄目だ！！

彼はあつという間に俺を押さえつけた。

嫌だと叫ぼうとする口を塞がれ、俺の四肢は意味も無くあがいた。基の全ての力を全身に受けながら、もうどうにもなら無いと悟る。兄貴の気配を感じた。階段を踏みしめている感触が伝わる。もうすぐこの部屋にやって来る。

田の前が一瞬白くなる。

薄い壁一枚隔てて兄貴がいる。それをまるで鏡に映しているみたいに感じ取っていた。

肌が粟立つ。

来るな！！

心は嫌だと叫んでいるのに、躯の一部は女である事を歓ぶ俺を見ないでくれ！！

レイプと言えば身もふたもない。和姦というぐらいで勘弁つて所か。兄貴が入つて来なかつた、それだけが幸いだつた。俺は基に背を向けた。激しすぎる行為のせいで俺は久々に血を流していく、あれほどつけるなと言つていたキスマークが胸元に残つていた。こんな事が有つたんだ。距離を置こうと切り出すのは簡単だつた。

でも、言い出したのは基だの方だつた。

「しばらく一人きりなるのはよそつ。」

一瞬彼は田線を落とした。

「もう抱かない。な、聞いてくれ。俺達、普通の恋人同士じゃないつて事分つてる。でもこのまま終わらせるのは嫌なんだ。」

基はあごを上げると思い詰めた顔つきで俺を見据えた。

「愛してる。愛してるんだよ、勇利の事。一生大事にしたいんだ。」

その日は悲しいくらい澄んでいて。

「きちんと距離を置いてみせる。大学決まって、高校卒業したら、改めてお前の事迎えに行く。それまで心を決めていてくれ。それで辛抱する。お前に愛してもらえる様な男になるから。」

基は諦めないと誓った。そう、彼は諦めないだろう。

この日初めて彼は俺を愛していると言った。

彼がずっと口にしたかった言葉だつてこと、俺は知っている。それでも彼はそれを隠して来た。

それだけ基の気持ちが深い事に気づいていた。

この時の俺はきっとまだ基に未練が有つたに違いない。だから彼にきっぱりと別れを告げる事が出来なかつた。動搖させ試験が失敗する事を恐れていたんだ。

その事を俺は一生後悔する事になるとも知らないで。

ただそれから一度と基の家には行かなくなつた。

元々クラスは違う。学校の廊下ですれ違えばいつもと変わらなかつた。たまに覗きに行つた部室で時々会う事もある。帰り道が一緒になる事も何もかも以前と変わらなかつた。つまり、寝なくなつた。それだけの事だつた。

## 第十一話 龜裂（後書き）

あの、皆様。よろしければ感想など頂けないでしょ？か・・・。  
家内制手工業的に黙々書いておりまして、少々寂しく感じております。

あ、ひなみに最後はきつちりハッペーHondをさせますんで。御心配  
なぐ。

## 第十一話 会いたい人

記憶に有る限り元旦の朝は必ず晴れる。どうしてだらう。

俺は薄暗がりの中で夜明けの匂いを嗅ぎ取っていた。

昨夜は皆さんパークしたらしく、お店の床は紙吹雪やらワインの栓やら紙でできた帽子やらでぐちゃぐちゃに汚れていた。

ぐつすり酔いつぶれている絵里子さんを起こさないようにそつと床を掃く。今日はお湯で床を洗い流した方が良さそうだった。本当は洗剤を直接ぶちまけたかったけどさすがに絵里子さんにキツいなあ、なんて考えてやめた。

あの夏の日以来基との距離は保たれたままだつた。つい6時間前、ボクシング部恒例の初詣で会つた時には少し顔が丸くなつていて笑了た。

3年生は全員絵馬を書いてきた。

“希望大学に合格しますように”

と癖のある字で書き込む基を尻目に、

“世界平和”

と書き込む。

「勇利はミスユニアースかよ。」

笑う部員に、

「世の中平和じゃなきゃ、いいタイトルマッチが巡らないだろ。」  
と返すと全員がなるほどと頷いた。

隅っこで嫌にこそこそしている井ノ原の手元を基が覗き込み、一瞬表情を止め

「上手くいくと言ひな。」

と呟いていた。

“彼女と幸せになれますように”

隠すように取り付けられた絵馬にはそう記していあった。

その帰り道、深夜2時。基が途中まで送ってくれた。こんな日だからこそなのか絵里子さんはお仕事で、俺はお迎えの為に待機しなければいけなかつた。でもさすがにこの夜は交番に行く事もできない。交番も超のつかきいれ時だ。いつもの週末なら担ぎ込まれて来る困ったちやんの相手をしてやつたりする物だけど、年末年始は様相が変わる。ヤバい事もある。

インターハイが終わつた後、暇を持て余していた俺は最近家の近くに出来たジムに遊びに行く様になつていて、そこで知り合つたホストの駿ちゃんと仲良くなつていた。それで彼が先輩と共同生活している、母さんのお店に近いマンションで時間つぶしをさせてもらう事が多くなつてきた。どうせ夜はお仕事だから彼らはいない。その間俺は部屋の掃除や洗濯といった事をして時間を潰していた。でも基には話せない事情だから、何の説明もせずそこまで送つてもらつた。

見るからに賃貸のベランダの無いマンション。

基もなぜそこに送つたのか聞かなかつた。聞きたかつたに違ひない。彼の目は俺をにらみ伏せられた。

「じゃあな、受験勉強、がんばれよ。」

言い捨てて、基が何か言い出す前にエントランスを抜けエレベーターまで走つた。

その事を思い出しながら、俺はお店の中で空き瓶を数え仕入帳にメモを残した。基の気持ちに応える事は出来ない。でも受験を控えた今の彼に言つ事も出来なかつた。

その時だ。店の外で車の止まる音がした。そのくせドアの開く音がしないから誰か道にでも迷つたのだろうかと俺は気になつて外に出た。

そこにいたのは兄貴だつた。

3ヶ月ぶり、かな。俺の胸がじんわり熱くなつた。

疲れた顔に無精髭が浮かんでいた。いつもは飲んで酔つぱらつて

いる時でさえエリートサラリーマンらしくしているのに、今日に限ってリストラされた会社員のように冴えない。

分かつて来ているはずなのになぜか彼は俺を見て驚いた様な顔をした。声を掛ける気はなかったのかもしない。ああ、不味い事したのかな、そう思つて喜んでしまつた事を後悔した。

そうだ、兄貴には俺と基が寝てる事知られているんだった。

それでも兄貴の態度から冷たさは感じられず、特に用はないと言う。

「またま帰る途中だつた。」

の口調に俺はわざわざ会いにきてくれたつて事を感じとつた。嬉しくないはずが無い。だつて、さつきは涙が出るかと思つぐらい感動したんだから。

期待を込めて寄つて行く事を勧めた。汚い店内だけがまわなかつた。兄貴には既に知られている事だし、取り繕うのは柄じゃない。今度は何をつつかれるか正直びくびく物だつたが、肝心の兄貴はさっさとこの前のソファまで行くどころか横になつてしまつた。家まで送つて行くよ。とそう聞こえた気がする。タクシーがつかまらないだろうからと。

兄貴がいると空気が変わる。文句無く仕事が楽しくなつた。

兄貴が基の兄貴じゃなかつたらいいのに。

基の兄貴じゃなかつたら、ここに寄る事なんてないんだろう、そういう分つちやいるけど、でも、兄貴が純粹に俺の事を気にしてくれてここに来てくれた、そう思い込むのも正用ぐらい許してもらえるだらう。

ついでく

Left Alone

## 第十一話 会いたい人（後書き）

応援のコメント有り難うござります！

## 第十二話 消えない罪悪感（前書き）

幼児性愛者の話が出てきます。ふあっく！！な人は後ろ半分でお願いします。・・・でも惨い事にはなつてません。

## 第十二話 消えない罪悪感

結局兄貴は俺達のぼろアパートに来た。兄貴が俺の事を男だと信じてくれていてよかつたと思つ。どう見ても治安の悪い、1階角にある日当りの悪い最低賃貸料の我が家は、とうてい母娘が住む代物じゃなかつた。もつとも身寄りの無い母子家庭はもつと酷い所に住む事もある。融通の利かない母子寮で内職しているよりましなんだろうなんて、えげつない事を思つてみたりして。そつ考へて、自分の馬鹿さ加減に落ち込んでしまつ。

兄貴は失礼の無いようにとそつと部屋を伺つていた。どのタイミングで帰るか迷う兄貴を食い物で呼び止めた。コンビニ弁当の『常連さんは案の定食いついてきた。

俺の顔色を見ながら雑煮をする兄貴が理由なんか分らないけどおかしかつた。

「毒なんか入っちゃいないよ。」

悪態までついてしまう。まるで迷子のグレーテルにおやつをあげている気分だつた。騙しやしないつて。

三杯目も平らげた兄貴は少し眠そうに目を擦つた。

もう少し、ここにいてくれると嬉しいな。

その肩に手を置いた。思つたとおり酷くこつていて、俺の指の方が音を上げそつた。

「かつてえ、兄貴、働き過ぎ。」

無理矢理うつぶせにして肩を揉んだら兄貴が悲鳴を殺した。そりやそうだ。俺のマッサージはスポーツマッサーから教えてもらつているんだから。初步的な技術だけど効く事は請け合で、その分かなり痛い。気合いを込めてのしかかるから時々俺の髪が兄貴の襟足に触れていた。

兄貴の体は一見した所身長や歳の割には細かつた。兄弟で太りすぎ

らご体質なんだろ。うらやましい限りだ。俺は生理の後に油断するときめんに太る。だからケーキやチラコレート、スナック菓子なんか絶対食べられなかつた。ラーメン餃子も御法度。でも正面から見るとほつそりしている兄貴の体は以外とがつちりしていて、日本人らしからぬ体格だつた。いわゆる身が厚いと言つヤツだ。特に背面の筋肉が発達していた。

「兄貴もボクシングやつとけばよかつたの。」

そうしたら基よりも前に兄貴に会えたかもしだのに。

ぼうつと夢みたいな事を考えていた俺に、兄貴は突拍子も無い事を言い出した。なぜ今時の若者らしく髪を染めたり伸ばしたりしないのかと。

その質問に一瞬凍つた。いやな過去を思い出す。せつかくいい夢を見ていたのに叩き起された気分だつた。

「髪の毛こじるのつて、頭の悪い馬鹿な女みたいだと思わないか？」

「君ひりしくなこと」とを言つべ。」

兄貴はそんな風に俺のことを見つめた。

誰かが優しい声で諭すよつて言つべ。

「遊里ちゃん、遊里ちゃん。遊里ちゃんはママが大好きだよね。」

「うん。」

「せしたら、ママの為に向でもあるべ。」

「うん。」

「じゃあ、おじさんとこママが幸せな事、知つているよね。」

「うん。」

「それならおじさんがママの事これからもずっと幸せにしてあげね。」

「うん。」

「その代わりおじさんの事は遊里ちゃんが幸せにしてくれないとね。」

「遊里が？」

「やうだよ。ママの為にね。」

おじちゃんはネクタイを緩める。

「それでママが幸せになるの？」

「やうだよ。おじさんのこと遊里けやんが幸せにしてくれたら、それ以上におじさんの事を幸せにしてあげられるんだけどなあ。ママに新しい洋服を買つてあげるし、三人で遊園地に行つてアイスも食べよ。チラコレート味でもバナナ味でも何でも選んで良こよ。」

「本当に本当に？」

「約束したじゃないか、遊里けやん。おじさんがあなが嘘ついた。」

「分らない。」

「おじさんの事信じておくれ。」

おじちゃんはやわやわと髪を梳ぐ。それから時々口元に噛む。汚いって思った。

「でもね、この事マタ言つちいけなこよ。ママね、おじちゃんが遊里ちゃんのこと好きだつて知つたら怒るかもしれないから。そうじた『ママと一緒にいらねくなつち』。」

「うん。でもどじて？」

「だって、ママは遊里ちゃんも好きだけ、おじちゃんの事も好きだう。おじちゃんが遊里ちゃんの事一番愛してこるつて勘違いしたらこけないじゃないか。ママの事はおじちゃんも遊里ちゃんも同じくらい大好きなんだから、ね。だからこれからおじちゃんとする事、ママには絶対言つちやいけなこよ。」

「言つちやいけないのね。」

「もちろんだよ。お約束。一人でママの」と幸せとしたげようね。その手は奇妙にべたべたしてて、おじちゃんの荒い息が怖かった。ママ、凄く、凄く、いやだった。でも、我慢しなくていい、ママの為に。

「遊里子さんはそのまま店に出勤した後だった。

おじさんは金縁の眼鏡を外す。

「おじちゃんね、遊里ちゃんのこの髪がとっても好きなんだよ。」

おじちゃんが電気を消そうと立ち上がったその時、部屋をノックする音が聞こえた。

その音に俺は救われた。

「遊里ちゃん、いる？」

それは親父が死んだ事を伝えにきてくれた警察の人だった。あれ以来時々俺達の事を心配してくれていたのだった。

「はい。」

俺は心の内をおじちゃんに読まれないようにながら奥の間を飛び出しへアを開けた。

「うわあ、カッコいい。お巡りさんってやっぱり違うね。」

いつもは自分の服を着ているのに、今日に限って広川さんは制服を着ていて、とても凛々しかつた事を覚えている。

「今日はもうお仕事終わり？」

「やう、今日の勤務は終わり。帰る途中だつたんだ。遊里ちゃんは今日限りでお留守番なの？」

「うん・・・・ママ。お仕事だから。」

すると広川さんは俺の頭を優しく撫でてくれた。

「お利口さんだなあ、遊里ちゃんは。」褒美に、ほら、チョコレートを持ってきてあげたよ。何たつて今日はバレンタインだからね。

「わあい。」

俺は相変わらずチョコレートが大好きだった。

「ありがとう、おじさん。」

すると広川さんは苦笑いした。

「そつか、『お兄さん』って呼ばなきゃいけないのね。」

手にしたハート型の箱が嬉しかつた。そのままぴょんぴょんと飛び跳ねるから、短いスカートがパアツとめぐれ上がる。

「遊里ちゃんは女の子だからそんなおくんばしあいやいけないよ。」

広川さんがたしなめる。それまで誰にも

“女の子だから”

なんて叱られた事は無かつた。

「どうして？」

首を傾げる俺に広川さんばばつが悪そつに言つた。

「女人人はね、子供を産む事ができる事知つてゐるよね。もうすぐ遊里ちゃんも産めるようになるんだよ。だからその時まで大切におなかを隠しとかなきゃいけない。ほら、遊里ちゃんは美人だろ。」

「うん。」

俺ははずかしげも無く頷いた。だって、みんなが俺に向かつてそう言つものだから。

「美人さんは特に大事に守つておかないと、いい赤ちゃんが産めなくなつちやうんだよ。知つてるよね？」

「うん、知つてる！」

本当は知つてゐるはずも無く、少しでも背伸びをしたくつて返事をした。

広川さんが帰つた後一緒にチョコを食べようとおじさんを誘つた。さつきの続きをしたくなくて延ばそうとした。

と、おじさんは急に用事があると立ち上がり、家を出てそれっきり。

俺は一晩中泣きたい気分で待つていた。でもおじさんは帰つてこなかつた。

ワタシが素直におじさんの言つ事を聞かなかつたからだ。嫌だつて気持ちがばれたんだ。だからおじさんは幸せになれなくなつてしまつて、出て行つてしまつたんだ。本当はもつともつと我慢しなくちゃいけなかつたんだ。ワタシがママの事を不幸にしてしまつたんだ。

そのくせあの髪を撫でられる感触を思い出し、鳥肌が立つた。

そうだ、この髪が悪い。その時はそう思つた。このみんなが褒め

てくれる綺麗な髪が悪いんだ。綺麗な顔も悪い。もしおじちゃんがこの髪を気に入らなかつたら、こんな事にはならなかつたのだ。俺は見境無く髪の毛を切つた。裁ちバサミでじょきょきと。広げた新聞紙の上に黒い蛇がとぐろを巻いているみたいだつた。

何もかも自分が悪い、そう信じていた。

自分がママの幸せを奪つてしまつた。なんてね。

今じゃやうじやないこ事ぐら、頭では解つてゐるが、少

でもね、あの時の不快感以上に、その罪悪感が消えないんだ

Left Alone

つづく

## 第十二話 消えない罪悪感（後書き）

勇利の事をいじめていた訳ではございません。・・・。

## 第十四話 誤解

静かになってしまったせいか、じばらくマッシュサービスをしていると兄貴は小さな寝息を立てていた。全く無防備な顔をしている。この人でもこんなだらしない顔をするのかと不思議になるぐらいだ。マジックでちょびひげを描いたら怒られるかな、いや、いつそのこと写真を撮つてみようかしらん、などと考え独りで笑つた。

予備の布団なんか無いから自分の布団を持って来る。しかも床暖なんて高級な物も無く、兄貴の下に敷き込むように布団をかけた。仕方が無いからその横に潜り込む。寒いのは苦手。体脂肪12パーセントは女の子の身にはキツい。まあ、女の子って言つほどたいしたものじやないけどな。現に生理だつてよつやつと2ヶ月に一度だ。大きくあぐびをして枕を直した。これは、やらん。俺の物じや。このとき兄貴が動いた。

「・・・・・」

何かを呟き、俺の体に腕をまわした。

「あつたけえ・・・・・」

そのまましつかりと抱きとめられた。俺の両手は挙つたままで下ろしそうが無い。

こいつ、俺の事猫か湯たんぽとまちがつちゃいないか？  
のび始めたひげがぞらぞらと額に当たる。そのまま兄貴はくふく

ふと笑い喉を鳴らした。こいつが猫だ。

半ば押さえられた状態で俺は身動きが取れなかつた。

もしやこいつは真性のゲイかよ、なんて事が一瞬よぎる。でもそうじやなさそうだった。兄貴は気持ち良さそうに

「むにゃむにゃ」

と言つた。

とりあえず腕をリラックスすると兄貴の頭を抱え込むよになつた。不思議な事にその体の凸凹がジャストフィットでひつとも苦し

くない。のしかかっている重さも、まるで重たい布団のよつて自分で好みだつたりする。

俺つて阿呆だ。

でもまあ、しゃあない。

目覚めたとき、この人はどんな顔をするんだひう、なんてたちの悪い事を考えた。裏声で悲鳴を上げたりしてね。まあ自然に寝ていりやこの腕もほどけるだろう。俺は瞳を閉じた。本当は今、途方も無く嬉しくてドキドキしている事を自分自身に悟らせないよう。

田覚めると兄貴はいなかつた。その代わりに置き手紙が一つ。

“世話になりました。飯も旨かつた。ありがとう。えりこさんによろしく。”

よどみのない性格そのものの筆圧。万年筆のブルーブラックの濃淡が綺麗だった。

「絵里子さんはよろしくで、俺の名前は無いのかよ。」

ちえつ、なんて舌打ちしながら俺は手紙を畳んだ。お年玉をもらつた気分だった。

後で知った事だけれど、兄貴が使っている万年筆はショーファーとこうブランド物らしい。高校時代からの愛用品でメンテナンスが大変だと笑っていた。

その次の土曜日の朝、再び兄貴が店に来た。

仕事のローテーションで夜勤になってしまったと言つ。今しばらく毎週木金曜日は午後10時から午前8時まで会社にいなければいけないらしい。その帰り道に寄ってくれたといつのだつた。

「どうせ帰る途中だし、送つて行つてあげるよ。今まで基が世話をなつた事だから、少しぐらいは役に立たせてもうえると嬉しいんだが。」

買つて来たコンビニおにぎりを平らげ、ソファアであぐびをして、

俺の仕事が終わるまで缶コーヒーを啜っていた。俺の手にはホットウーロン。

一人で他愛無いおしゃべりをした。実は兄貴は俺達の高校の先輩だった事、剣道部の副主将だった事、そして団体戦でインターハイに出た事があるなど。他にも最近のトレーニング事情やスポーツ医学についても兄貴はよく知っていた。

「俺の夢は鍼灸師になつて、スポーツトレーナーになる事なんだ。いつの間にか俺はいつの間にか熱く語つていた。

「ほら、ボクサーってそれだけで食つて行ける選手なんてほとんどいないだろ？トレーナーもそれとおんなじでさ。それに俺このとおりだし、ジムで一生お世話になる事もできないし。特殊技能つけて、それで生計立てて、その隅っこで選手の応援もできたらいいと思わないか？好きな事して生きて行けるんだつたら最高じゃん。別にチャンピオン育てたいとか夢みたいな事は言わないけどさ、でも、アマチュアでも良いからこれからボクサーの力になつてやれたら本当に幸せだと思う。」

独りでしゃべりまくる俺に、兄貴はうんうんと嬉しそうに頷いてくれた。

仕事が終わると二人を乗せて家まで送つてくれた。

いつもみたいに絵里子さんを寝かせた後、一人で残り物の煮物をつついた。

「もしかして僕は役得しているのかな。」

兄貴は体の割りによく食つ。どんぶり一つが空になる。

「残つたら基の土産について思つたけど、無理だな、こりや。」

笑う俺に兄貴は済まないと肩をすくめた。

それから何とはなしに兄貴の肩を揉む。夫婦みたいだと思いながら。いや、待てよ、今の所基が俺の旦那だから、この人は愛人が、なんて。俺つて本当、阿呆だなあ。この人は愛人のタイプじゃない。豪商の若旦那だ。おおらかで坊くさくて頭はいいけど人も善い。むしろ後先考えず熱くなりやすい基の方がそのタイプだ。

「ここに来る事、墓、知っている?」「

うつぶせの兄貴にさりげなく聞いてみた。

「んんん。」

多分知らないの返事だと思つた。

「あいつにはしばらく黙つといてくれないかな。」

また墓に秘密が増えた。

「ほら、あいつもうすぐ受験だろ。ぎりぎりの所狙つて話しだし。」

ああ、相変わらずこいつている肩だ。

「こんな事で動搖させたくないから。」

本当に硬い。

「俺達春まで遊ばない約束してるのに、兄貴とこんな事してるのが  
ばれたらあいつ、いい気がしないだろ。」

なんだかその言葉が卑猥に聞こえた。

「別にやましい事は無いんだけどさ。」

俺今墓穴掘つた?

その兄貴からは何の反応もなく、寝てしまつてゐるようだつた。  
せっかくうつぶせな事だし、その腰周りを軽く揉んだ。なるほど、  
これが剣道をしていた人間の体か。微妙な左右差を感じながら、し  
ばらく指先でその体を揺すり続けた。

このまま寝ていくんだろうと布団を取つてみると、兄貴は起きて  
いてコートを手にしていた。

「もう帰るの。休んできけば行けばいいのに。」

俺は目を擦つた。かなり眠かつた。兄貴は何とも言えない表情で俺  
を見た。

「いや、止めておくよ。君の“だんばん”は嫉妬深いからな。」

その背中を腫然と見送つた。

「マジかよ・・・・」

俺の眠気が吹つ飛んだ。兄貴は俺が誘つてゐると思ったんだ。

ああ、でも仕方ない。仕方ないさ。現に俺は墓と寝てんだから。

そう思われたって・・・。

Left Alone

つづく

## 第十五話 禁句

もう兄貴は来ない、そう覚悟していたけれど、次の週末もコンビニの袋を持つてやって来た。何事も無かつたかのように。

今いるのは報道班で警察絡みが多いと話してくれた。最近結婚した高校の時の親友の奥さんというのが、同じ時期に剣道をしていたライバル校の選手の妹だと言う。ライバルの人は警察官になつて、偶然にも広報担当の部署で会つたらしい。

「人の縁つて分らないと思つてね。」

彼はにやにや笑つた。

「その後飲みに付き合わされたのはいいけれど、仕事の話しさ一切なしで、義弟の悪口をさんざん聞かされたよ。僕はその義弟の友人だつて言うのにね。」

兄貴はいつも代わらない。俺は胸を撫で下ろした。  
家に帰ると兄貴は自然にちやぶ台に座つた。

「運べよな。」

俺は温め直した総菜や箸、取り皿を差し出した。

「すまん、すまん。」

同じようにじ飯を食べる。一人で眠そうにあぐびをする。

「土曜の練習が有る時はどうしていた?」

「11時には間に合つから、遅れて行く事にしていた。」

「タフだなあ。」

「若かつたから。それに気を張つていると何とかなるもんではある。」

我ながらよくやつたと思つよ、うんうん。

「17で若かつた、かあ。」

兄貴は苦笑した。

「18、俺この前18になつたんだよ。これで晴れて深夜バイトアンド夜歩きオッケー、補導よさらば。」

「じゃあ、お祝いしないとな。」

兄貴は少し考える様な仕草をした。俺はそつとその背中に周り首筋を揉んだ。

「何がいいかな。」

兄貴が使っている万年筆がいいなあ。あのカツコいいヤツ。

「みんなで皿いものでも食べに行こうか。」

みんな？

「来週勇利君の試験が終わるんだろう。基もセンターが終わるし。息抜き兼ねてみんなで懐石なんてどうだ？」

ああ、そうか。この人は基の為にここに来ている様なものだもんな。俺は少し意地悪く考えた。もしかしたら俺が受験直前の基に近づかないように監視しているのかもしれない、なんてね。

「イタリアンの方がいいかな？」

「そんな事無いよ。ほらさ、きちんとした所に着ていく服無いからさ。それに基は一次試験の方がキツいんだろう。そんな暇無いよ。」

「そうか。」

俺は広い肩を指先で押して行つた。本当は恐る恐るだつた。この前みたいになりたくなかつた。いつ兄貴が嫌悪感を示すか分らない。それでも少しでも兄貴の役にたちたかつた。

「だつたらスースにしようか。」

俺は一瞬手を止めた。思つてもいなかつた。高給取りはプレゼントの額も違うらしい。確かに俺のサイズだと吊るしのスーツは売つていないだろう。いくらやせていてもウエスト58の男はいないから、セミオーダーだ。でもまさか高校卒業してまで男装しようとは思わなかつた。まあ確かに似合つだろうけど、俺は別にそう言つ疾患を持つているわけじやない。中学校はセーラー服を着ていたし、春には文物のパンツスーツを買おうと思つていたぐらいだ。はつきり言って兄貴ほど騙される人間も珍しいと思う。確かに入学当初、俺と基は一卵性の兄弟みたいにそつくりだつた。でも俺の体型はある頃から卒業まぢかの今までほとんど変わっていないし、反対に基は一周り半でかくなつてゐる。再び揉み始めた指先に思い切り力を入れ、

痛みが出るほど押ししてやつた。

「つつづ。」

兄貴が呻く。ここまで騙してしまつと、今更女ですつて言えないよなあ。てか、兄貴鈍すぎ。

「今回は遠慮しどぐ。知り合いが作ってくれるつていつてくれてるんだ。」

俺はいい男三人スーツ姿で闊歩する様子を想像した。見るからにエリートサラリーマンに現役運動会系男。それと自称小柄ジャーニーズ。自虐的だな。すげえ格好いいじゃん、ちょっと着崩せばそのまんまホストクラブの1・2・3なんてね。

「はい、おしまい。」

最後にびたんと平手で背中を叩いてやつた。

話しさ終わり、そう言つているのが分つたんだろう。兄貴はさつ

くつと立ち上がつた。

「ありがとう。欲しいものが決まつたら教えてくれ。」

それから振り返る事無く部屋を出て行つた。

またやつた。肝心の俺が、ありがとうを言つていしないじゃないか。

その夜軽く走りに行つて帰つて来ると、絵里子さんがテレビを見ながらぼんやりしていた。

「ただいま、絵里子さん。」

母さんは軽く頷いた。今日はお店が休みの日だつた。いつだつて疲れている。そんな彼女を昼間だけでも静かに休ませてあげたかったから俺はなるべく家にいない。一人分の朝ご飯と、お昼の弁当。夜に軽くつまめるものを用意して。

いつからだろづ、お互い一緒にいても話をしなくなつてしまつた。時々俺といるのが辛いんじやないかと思う気がしてならない。

だから彼女から話しかけてくれて本当に嬉しかつた。

「最近、明けで送つてくれている人、だあれ？」

寝ているように見えて母さんは気づいていたらしい。

「ああ、あの人ね。友達の兄貴。仕事がえりに拾ってくれるんだ。俺は話しを続けたかつた。

「とつてもいい人だよ。俺達の事、心配してくれる。送ってくれつて頼んでいないのに、世話をしてくれるんだ。」

絵里子さんは返事をせず、テレビを見続けていた。

その反応はいつもと変わらなかつた。

風呂に入り髪を乾かす俺に彼女が何気なく言つた。

「遊里はあんまり友達の話しあないわよね。」

つて。だつて母さん、聞いてくれないじやないか。

「あの人、本当は遊里の恋人？」

「まさか。」

違うよ、そんなはず無いじやないか。あの人は“高嶺の花”だよ。俺なんかが好きになつちゃいけない人だ。

「違うよ。」

「じゃあ、送つてもらひつの止めなさい。これからはタクシー使うの。」

一瞬何を言われたか分らなかつた。テレビの奥で誰かが笑う。  
「人に借りを作ると、ツケを払わされるわよ。」

「えつ？」

指で摘まれたメロンソーダ色のゼリービーンズが彼女の口元で止まつた。

「真面目そうに見える人に限つて、裏が有るからね。」

それはゆつくりと体の中に吸い込まれて行つた。

頭に浮かんだのは、金縁眼鏡にワイシャツを着た中年の男。その男は俺を膝に乗せ、囁く。それから、髪の毛を梳いて、撫で付け、口に含む。それから・・・・・

「冗談じやない！－兄貴はそんな人じやない！－どこの見てんだよ！－！」

人には沸点が有る。その時の俺はまさにそれだつた。

「あんたみたいに、糞みたいな男につかまるもんか！…」

気づいた時には両の手を握りしめ、ぶるぶると震えながら立つていった。

絵里子さんはびっくりと振り向き俺を凝視した。その顔は蒼ざめていて・・・・・！

俺は句を言つたんだろう。

その手をじんわりと開いた。

「「めんなさい。つい、かつとなつた。」

引きつるのもかまわず、必死に笑つた。

「ほり、今週俺、受験だからなんだかさ、ぴりぴりしちゃつててさ。」

俺はザックの中から持つて帰つて来た教科書をバラバラと出した。  
「正直、自信ないし。ごめん、ハツ当たりしちやつたね。ああ、今日はもう寝るわ。なんか勉強疲れかな？知恵熱出たりしてね。」

彼女は挑みかかる様な顔で俺を見つめている。

ごめん、母さん、本当にごめん。母さんにひどい事言つつもりなんか無かつたんだよ。謝るからさ、忘れてくれよ。もう一度と言わないからさ。

「そうだ、受験の日は朝早いから、迷惑かけたら「ごめんね。」

俺はじりじり下がつた。

「言いたい事が有るんなら、はつきり言こなさこよ。」

低いながらきつぱりと彼女はそう言った。

「嫌だなあ、母さん。言いたい事なんて・・・・・。実はさ、ほり、よくある話しださ、最近男の事で友達と揉めていたんだ。でさ、兄貴だけはいつも中立でしてくれる人だから、ありがたかつたんだよ。さすがにその人の事、あんな風に言われてさ・・・・・。どうして俺は泣いているんだろう。

「悲しかつた。」

最初に田を背けたのは絵里子さんの方で、俺はそれを合図に隣の部屋に行つた。

泣いたって意味が無い事ぐらい中学に入る頃には学習した。疲れるだけだ。そんな事するくらいだつたら、たっぷり寝て、走った方がいい。

それでもその夜俺はマウスピースみたいにタオルをがっちり噛んで声を殺していた。お守りみたいに手に持つていた兄貴の名刺が涙でよれよれになってしまっている事に気づいてもそれは止められなかつた。

Left Alone

つづく

## 第十六話 悩み事

朝起きてどんな顔で母さんに会えればいいのだろう。そんな心配をよそに、次の日の絵里子さんはいつものように寝ていて、俺は飯を作り学校に行つた。

何も変わらなかつた。

そんなこんなで受験は終わり、まあ合格はしただろうとは思つ。

そして週末、兄貴はまたやって來た。

断んなきやいけない、いつまでも甘えてらんないつて分かつてゐる。でも勝手にソファに座り込んで疲れた顔で缶コーヒーを啜る兄貴を見ていると、何も言えなくなつた。もしかしたら兄貴も同じで誰か頼つてくれる人がいないと生きてゆけないかも知れない、そんな事を思つた。

うんにゃ、違うだろう。この人はそんな弱い人じやない。この人は独りで生きていける人だ。

俺は最近、絵里子さんとの関係をサドとマゾの関係じやないかと思えてならなかつた。別に彼女が俺をいじめようとしているという事じやない。問題は俺の方だ。酔いつぶれた彼女を迎えに行つたり、彼女のしない家事の一切をしたり、面倒を見る事を苦痛だと感じる一方で、彼女に尽くしたく思う俺がいる。これじやあ、支配されるという形の依存だ。犬が主をほしがるのに似てゐる。

だから自分が嫌になる。俺はいつしか独りで生きていくようになりたいと思つた。

そんな事を考えながらぼんやり手を動かしていると兄貴が見つめていて、目元に微笑みを浮かべていた。

「今日は静かだね。」

その低くてよく響く声が俺の耳元でこだました。この人はなんてまろやかに話すんだろう。

「やうだね、疲れてんのかな？」

うつむきながらその視線を感じた。もひ一度見つめ返すと、笑顔が  
その口元にも広がり俺を包む。

なんて温かいんだろう。

ああ、どうしよう。あれほど辛いと思つていた悩みが、一瞬頭の中から消えていた。

俺は軽く首を振り笑っていた。兄貴といふと俺は真性の阿呆になる。

そうだ、俺の悩みなんてそんなものさ。吹けば、飛ぶんだ。兄貴さえいれば悩む事なんか無いんだ。

出来るなら、もし願いが叶うなら、俺が強くあれよう、て、兄貴にずっとそばにいてほしい、そう思った。

Left Alone

つづく

## 第十六話 悩み事（後書き）

兄貴バージョン” “Pain” 始めました。

廣瀬のセックスは ” ゆに ” のですが、男性視点で書いていますと、女性視点とはかなり違います。男性の方が純粋な気がするのです。書いていて正直身悶える有様。これからも御観覧に。

## 第十七話 失態

結局送つてもいい事にした。

大丈夫、繪里子さんには適当に言い訳を考えよう。

“タクシーを待つたけど来なかつたんだよ、それじゃあつて事になつても。”

こんなとき女でよかつたつて思う。嘘がすらすら浮かんで来るから。

家についた後も彼女はぐっすりと寝込んでいたようだつた。

俺はコートを脱ぐ兄貴を横目で見ていた。最近兄貴には兄貴の香りがあるつて気づいた。兄貴はタバコを吸わないけれど、着ている服はいつもヤニ臭い。職場で吸う人がいるらしい。その中にエッセンスみたいに兄貴の香りが混じつていて。コロンを付けているんじやなさそうだし、アフターシェイブローションとも違う。とにかく兄貴の香りだ。

俺はコートをハンガーにかけながら深呼吸して、こつそりその香りを吸い込んだ。

その日はおだまきを作ろうと思つた。茶碗蒸しの中に餡飴が入つてゐるアレだ。

圧力鍋をセットして強火にする。

兄貴が來たらと思つて頂き物の煎茶を用意しておいたんだけど、なんだよ、日切れしているじゃん、どうしようこれ。味落ちてるかなあなんて悩んで、新しいのを探した。その時突然響いた蒸氣の轟音。

「つあつ。」

慌てて火を弱くしようと身を乗り出し、その指がつまみに掛かつた瞬間、

「勇利！…」

俺はその声よりも早く兄貴に後ろに引き寄せられ、両手でかかえら

れていた。兄貴は少しして抱く腕に力を込め、一人の体は隙間無いほど重なつた。

兄貴の心臓の上に俺の耳があたつていて、背中越しに兄貴の早鐘みたいな心臓の鼓動が響いて来て、それに気づいた俺の心臓はもつと早いリズムを刻み始める。

ガスの火は消えてしまつていて。

しゅんしゅんという音が少しずつ間隔を置く。といつ事は、一人ともしばらくそのままだつたつて事だ。

・・・・俺達は何をしている？

「だ、大丈夫。」

体を硬くする兄貴の腕をポンポンと叩いた。

「圧力鍋、初めてだよね。これ、音はつるさいけど安全なんだぜ。そんなに驚くなよ、だらしない。」

その手はゆつくりと放され兄貴のショックを物語つていた。

「全く、男つて結構気が小せえよなあ。」

そのままもう一度火を付け、再び圧力がかかり鍋が鳴りだすのを待つ。今回は二人とも驚く事は無かつた。火を絞り、圧力弁が緩やかに回るのを見ていた。

「な、怖くないだろ？。」

兄貴はばつが悪そうにしながら、渡された箸と茶碗を持つていつた。一人ででか椀のおだまきをお玉ですくつて食べた。

こうしていると貧乏だけれど幸せな夫婦みたいでおかしかつた。この前と同じ。俺は恐る恐る肩を揉む。

「兄貴、何かに憑かれたんじゃない？」こり過ぎ。」

口は平然を装いながら、心臓はドキドキしていた。

「相変わらず、硬てえ。ちょっと服脱いで。」

暖房のスイッチを最大にしてジャケットとベストを脱がせた。脊柱にそつて指を下ろす。つぼにはまる度に、うつて声を殺して唸るのが可愛いと言えば可愛い。

特に腰は硬い。本当にナイスクワーカーが多いんだな。

「あんま、無理すんなよ。」

一度腰壊すと、一生駄目になっちゃうぞ。

なかなか筋肉に入つていかない指に業を煮やし、俺は額を兄貴の背中につけて指を押し込んだ。こうすれば額が支点になつてやり易いんだ。

「ぐえつ。」

潰れた力エルの様な声。

「我慢、我慢。」

俺は意地悪く囁いた。

「絵里子さんが起きちゃうから静かにしろ。声たてんなよ。」

この言葉はさすがに効いたのか、それからはじつと耐えていくようだつた。指の抵抗が少しづつ軽くなる。揉みほぐれて来た証拠だ。指の刺激を“押す”から“揺する”に替えた。こうすると深い筋肉に刺激が入る。体の奥の疲れが取れて楽になるはずだつた。ただそれだけのはずが兄貴の腰に当てた俺の手のひらがその肌の感触を吸収し始めた。痛み刺激の後に弛緩を始めた筋肉が薄いワイスシャツ越しに伝わる。

ヤバかった。

糊の利いたワイスシャツが言葉の無い部屋にかさかさなつた。

気づくと二人とも息を殺していた。

「もう、こんなもんだよな。」

俺は名残を惜しむように手を放した。

自分の中に渦巻くものの正体を俺は知つていた。

そう言えば基と最後に寝てから3か月経つか。それまで週2でしてたもんなあ。そりや、したくなるよな、普通。体つてそんな風にできるもんだよな。何てつたって、後半は好かつたもの。

俺はそんな“女”的自分が嫌いだ。誰でもいいなんて惨めだ。ま

してや兄貴に欲情するなんて馬鹿げている。

「ありがとう。もう、帰る。」

兄貴はさつと服を身に着け玄関をぐぐつた。

その後ろ姿はぴりぴりしていた。

慌てて後を追い、送ってくれた礼だけは言おうとした。そのはずが言えず、結局振り向かずに歩く兄貴の背中を見ながら車の所まで来てしまった。

兄貴は車に乗り込んで助手席の窓を降ろし、何か言いたい事があるのか、そんな目で俺を見た。

「あ、ありがとうを言おうと思つてさ。」

それからちよつと頑張つて口の端を上げた。

「でももういいから。お店もそろそろピークシーズンはズれるし、俺も受験終わつて2月から絵里子さんの職場の近くでバイトする事になつたし、何とかなるから。そこのバイトが上手くいけば中古の車が手に入りそうなんだ。だから、もう送つてもらわなくてもいいよ。今まで本当にありがとうございました。助かつた。」「

するとこわばつた顔が言った。

「迷惑だつたか。」

この人でもこんなに冷たい声が出るんだ。でも言わしたのはこの俺。

「違う。」

女は嘘が上手。

「でもさ、基がいい顔しないだろ。」

本当は兄貴といるのが怖いだけ。自分の中にいる“汚い女”が目を覚ましたので。

「あいつが頑張つてんのに、俺ばつか楽したら悪いじゃん。それに兄貴は本当は俺の兄貴じやなくてさ、基の兄貴なんだし。独り占めしたら駄目じやん。」

俺の手はポケットに入つたままだ。俺の方に身を乗り出していた兄

貴が座席に戻る。きっとこのまま会わなくなる、そんな気がした。

「信じて欲しいんだけど、俺さ兄貴が本当の兄貴だったらどんなに良かったかつて思うんだ。本当に、俺・・・・・。」

苦しくて言葉が詰まった。

「今度産まれてきたり、弟にしてくれよな。」

その言葉が終わらないうちに田の前でウインドウが上がり、兄貴の車は滑らかに行ってしまった。

Left Alone

つづく

## 第十七話 失態（後書き）

もしこの時、彼女が行動を起こしていたらどういう事になっていた  
と思います？

## 第十八話　日常（前書き）

ホストクラブについての記載有ります。汚い内容なので、そう言つ  
の嫌（綺麗な所だけ見ていたい）人はパスしてね。ついでに、フィ  
クションだから。

あつ、ついでに高校生はホストクラブお出入り禁止ですから。

## 第十八話　日常

部屋に戻ると襖がほんの少し開いていて、なんとなく絵里子さんが起きている気配を感じた。

「あの人、もうここに来ないから。」

俺は自分に言い聞かせていた。

「一度と来ない。お迎えなんていうないからって、はつきり言つたから。」

今度という今度は一度と来てくれるはずが無い。

それから俺はぐずぐずと毎日を過ごしていた。

考えたくないのにふとあの人の香りを思いだしてしまった。

兄貴の事が大切だつた。もしかしたら基よりも。俺にとつて産まれて初めて拠り所になつてくれた人だから。それなのに兄貴の事を汚してしまつた、そんな気がした。

よりによつて兄貴に抱いて欲しいだなんて。

あの人に組みしかれ、その体重を受け止めながら躯を交じり合わせる事を想像して熱くなつてしまつたなんて。

もしあの時、兄貴の躯に手を回してしまつていたらどうなつていただろう。そのとき兄貴が応えてくれたら?もちろん抱かれていた。絵里子さんは寝ていると信じて、彼の背中にしがみついていたと思う。それか、部屋を抜け出しどこか一人きりになれる所に向かつたに違ひない。そこで狂つたみたいに欲しがつただろう。

失うものの無い人生だと思つていたけれど、たつた一つ、兄貴の事を大切に想う気持ちだけは壊したくなかった。

俺に兄貴はふさわしくなんかない。俺の汚れてしまつた生き方をあの人の人生に交わらしてはいけない。

だからもう兄貴にはもう一度と会わない方がいい。

そんな思いの中、2月に入つてホストクラブでバイトを始めた。

といつても内勤だけ。少しでも先立つものが必要だつたから。

週4日の裏方さん。お店は19時から1時までと朝の5時から一部営業で、働くのは木曜から日曜の夜の方、土日祝日は都合がついたらその後もヘルプしてほしいと言わっていた。1時から5時までの休憩の間にお店を掃除し仕切り直しをするからだ。絵里子さんの仕事とほとんど同じ時間だから、彼女には頼み込んでやらせてもらつた。

「ほら、もう子供の気分じゃいけないだろ？どうせ春になつたらなにがしかのバイトと始めるんだし。どうせだつたら顔見知りのいるところで働いた方がいいからさ。それにそこだつたら絵里子さんと一緒に帰れるから絵里子さんも安心だよ。」

そこは近所のジムにトレーニングにくるホストさんが沢山いるお店だつた。駿ちゃんもその一人で、他のスタッフのお兄さん達とも以前から会つた事が有り気が置けなかつたし、今川さんもそこならいいんじやないかといつてくれた。とは言つても未成年だし、なにより偽物。

俺には“プレミア”がついてたらしい。自分じや知らなかつたけど、俺は交番詰めの男の子イコール箱詰め息子。訳して“ハコムス”と呼ばれた有名人だつたらしい。我ながら赤面な名前。そんな事もお酒を断れる理由になるから幸いだつた。でもお店のオーナーはそこのセールスが上手い。

“ハコムス”

の価値を最大限利用し、裏方のはずの俺の“将来の”指名料にとんでもない金額を付けていた。その4割が俺の手元に入ると聞かされ、目眩がしそうだつた。しかも

「この子はまだ未成年なんですよ。お酒がまだ飲めないんで飾り物なんです。ここいらじや結構有名な子で無茶させられないんですよ。だから今のところ内勤つけているんです。それにこのとおり

うぶなんで、まだ染めたくない所もありましてね。もう少しして（）ここで2年後つて言わない所がオーナーだ）成人しましたら道理の分つた（）常連さんだけご指名いただけるよつて考えてるんですよ。」

と売り込むらしい。

つまりこういう事だ。プレミアがつけばつくほど欲しくなる。駄目だと言わると（）り押ししたくなる。同じ品物でも、1万で買うより100万で買った方がいい場合があるという事だ。とりあえず俺の事が気になつたお客様は

“道理の分つた常連さん”

になるべくお金を湯水のように使い鷹揚な上客を装つ。にしきつお店はそういうものらしい。

人間の心理なんてそんなもんだ。手に入らないモノほど欲しくなる。

これつて俺にも当てはまるなつて思った。だから欲しいんだよつて。

ホストの世界は思つたよりも厳しかつた。

最初はこんな高いお金をとるなんてぼつたくりみたいで正直抵抗が有つた。

でもだんだん現実が分つて來た。

お客様の女性達の半数以上は風の人達で、みんな何かを背負つていた。

お店のピークは10時1時。週末のこの時間は厨房（といつても洗い物したりするぐらいだけど）に入った。この時間席を外す事でたちの悪いお客様につかまる可能性が低くなるからという店長の配慮らしい。つまり、服を脱がされたり、プロレス技かけられたり、焼酎10本開けるから一氣飲みしろとかだ。

それに偽物だから、下手に本物と一緒にいるのもまずいらしい。

だから俺は12時半過ぎにフロアに戻って、酔いつぶれたスタッフの世話をしながらの接客にまわる。

日が進むに連れてどうして体を壊すほどお酒飲んで頑張るのか、ホストって不思議だと思った。

飲む量が普通じゃない。

なんでこういう所の男子トイレが店の奥に有るのか知ってる？それは後半になると半数以上が便器に顔突っ込んでゲロ吐いて果てているから、それを見られないようにする為さ。いくら絵里子さんが飲んで酔いつぶれていても吐くほどじゃない。ましてや意識が飛ぶなんて事はない。声を掛ければ起きるし、肩を貸せば人並みに歩ける。でも彼らは違った。まるで何かに追い立てられているようだった。

それでも飲まない訳にはいかない。しかもそのうちの何人かは4時間後の日の出営業のスタッフだ。だから吐かない訳にはいかない。

「噛むんじゃねえぞ。」

俺はそう言つてタオルの巻いたスプーンを彼らの口の奥へ押し込んだ。

それが悲しくて、出来るだけお店に残つて後始末を手伝つた。どうせ短期バイトだからと体に無理をきかせた。

報酬は時給1300円。プラスチップ。何よりもオーナーが使わなくなつた車をくれると言つたから。あと3年と3ヶ月で車検の切れる中古のワゴン。免許は無いけど、今回の仕事で教習所に通えるお金ができる。絵里子さんのお迎えが楽になる。

駿ちゃんやオーナーは笑いながら俺の肩を叩いた。

「勇利は気質はホストだけど、性格が仕事に合つていない。」

金曜は明けた足で学校に行き、冷たいシャワー浴びて、保健室で寝て、出席を取つて昼には家に帰る。移動は自転車から電車に切り替えその間爆睡した。家事をしてまた寝てご出勤。その一日だけでも精神的にも肉体的にもキツかった。俺にはこんな仕事続けられな

いと思った。

昔同じマネージャーの幸治からもらったオーデコロンの強いバラの香りが、そんな俺の躯に染み付きつつ有る吐瀉物の匂いを消してくれた。

人はみんな何かを抱えて生きている。それでも、生きている。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第十九話 夢落ち

とろとろとまどひたでいる時その人は来た。てが、こじお店の中じやん。

俺は不覚にも店を掃除している最中に寝ちまつたらしい。

「あははっ。」

笑つて誤摩化しながらソファアから起きよつとするど、その人は当たり前の様に俺の隣に座つた。

『大丈夫か。』

そう言われた気がする。兄貴だった。無精髭を生やして疲れているけれど格好いい事には変わらない。

その人が笑つた。

『仕事はどうだ?』

「ああ、これね。」

誰が兄貴にこここの事教えたんだ?

『まあまあつてとこ。』

俺は肩をすくめた。紺地にピンストライプの借り物のスーツ、でかすぎるウエストをベルトで絞つていた。青い化纈のシャツにはだらしなくネクタイが引っかかるついていて。

いつも仕立てのいいスーツを着ている兄貴とは天と地の差だ。

『こじでどんな事するの?』

彼は俺の顔を覗き込んだ。

描き込んだ眉毛がめちゃくちゃ恥ずかしいから思わず前髪をなで付け隠してしまつ。

「とりあえず今は掃除。他はおつまみ運んだり、お絞り出したり・・・

『ふうん。』

その顔は、嘘付けって言つていた。

「あ、その、少しごらいはお密さんの相手するよ。」

『どんな風に?』

ああ、嫌だ。この人、分つていてるくせに。

からかわれているって知つても顔が紅くなる。

「担当さんが席外した時に女の人の話し聞いたり、おしゃべりしたり、とか・・・」

そんなに顔、近づけるなよ。息かかってるし。

『愛している、とか、言つ訳?』

その顔は兄貴らしくなく、にやにやしていた。拳げ句に

『僕でもなれると思つうかい?』

何言つてんだ。

『勇利だつたら、僕にいくら払うかな?』

その指先を俺の鼻に当てた。目が笑つている。

『勇利、愛してる。』

まったく。馬鹿にしやがつて。そう思いながら俺はおかしかった。こんな兄貴初めてだ。いつもウイスキーをがぶ飲みしていても、こんなになるほど酔つている所は見た事が無かつた。彼の唇が降りてきて、耳元で囁いた。

『愛している。』

鳥肌が立ち俺は思わず彼のコートを掴んでいた。

“ふざけるのもいい加減にしろ。本気にならじやないか!

!”

その瞬間兄貴の香りに包まれた。染み付いた紫煙と兄貴の肌の香り。それを胸一杯に吸い込んでいた。

兄貴はキスをした。躊躇うように、軽く。

俺はどうすればいい?彼を押しのける?唇を閉じる?それとも?俺はそつと兄貴の上唇を舐めた。

何も言わず、ただ唇を割り、兄貴の舌が俺のそれに絡んだ。駄目だと言わっても俺はしたと思つ。

これはきっと夢だ。こんな事有るはずが無いんだから。

だから、夢だから、兄貴に抱かれていたい。

「俺も、愛してる・・・・・」

両手を彼の体に回し強く引き寄せた。温かい躯。まるで現実みたいに兄貴の体の重さを感じる。

キスが深まり、閉じた瞳の奥で火花が散るよつだつた。

その感覚のあまりの生々しさに身震いがするほどだった。

これは夢だ。見ちゃいけない夢なんだ。起きないと。早く起きないと・・・・・！

目を見開こうとし見上げた天井は白い。

そうだ、俺は保健室で寝ていたはずじゃなか。しつかり目覚めなくつちや！何かがおかしい。

ぼんやりとした目に映ったのは兄貴なんかじやなくて、瞳を大きく見開いて見つめているえくぼの男だった。

「基・・・・・」

俺は彼の名を呑み込んだ。

両手は基にしつかりとしがみついていた。その手から力が抜ける。自分の唇に触れると、さつきまで感じていたそれは確かに基の感触だった。

彼は俺の額にキスをして、目尻を細め唇を引き締めた。それから俺たちのポーズ、拳を作り天に向かつて突き上げ歯を見せて笑った。

俺は兄貴のコートのハデな裏地を翻しながら去つて行く基の後ろ姿を瞳然として見送った。

明日は彼の一次試験だった。

この時感じた嫌悪感。そして俺は自分の気持ちにはつきりと気がついた。

俺は兄貴の事を好きなんじゃない。それ以上に愛しているんだって。

L  
e  
f  
t

A  
l  
o  
n  
e

جے

## 第一十話 卒業エキシビジョン

日が経つなんてあつという間。

卒業式は午前中で終わり、俺は友人達とではなく来てくれた絵里子さんと昼食を食べた。

この歳になつて親と食事をするのが嬉しいなんておかしいかもしないが、俺は本当に嬉しかった。

母さんと一緒に外食するのは小学校以来だ。最後に食べたナポリタンの味をまだ覚えていて、この日も思わず同じものを注文していた。ファミレスのランチがこんなに美味しいなんて正直思いもしなかつた。その上今日の夜、彼女は仕事を休んだ。家に帰つてからお祝いしてくれると誓つ。昨日何が食べたいと言われ、思わず、

「赤飯が食べたい。」

なんて事を言つたから、きっと今晚作ってくれるんだとわくわくした。

それはもしかしたら、これから基と決別しなければいけないっていう重たい気持ちを無理矢理ごまかしていた事なのかもしれない。

午後は部の用事があるから7時過ぎには家に帰ると約束し、絵里子さんと別れた。

ボクシング部には恒例の行事が有る。それは卒業生を送るエキシビジョン。2年生が階級関係なしの総当たり戦をして、3年がそれに賭ける。

一対戦1ラウンドオンリー。3分勝負。相手の様子見はいつさい無し。とにかく連打が条件。今年の選手は9人。午後2時開始のお祭りイベントだ。OBや観客も沢山集まり、ヤジを飛ばす。

これが結構キツい。

500メートルの全力疾走インターバルを8回やる。こんな感じじゃないかな。

下手すると20キロを90分で走るくらい次の日にへたる事請け合いだ。だからこそやるのだが。試合も最後の方は泥仕合になる。それがまた面白い。

Rush!! Rush!! 頭真っ白!!! 止まるな! 手を出せ!!!

みんなが踊る。

Rush!! Rush!! その瞬間は、死ぬ氣で連打!!!

去年は危うく出させられそうになりえらい目に合った。おもしろがる先輩や基を男子マネージャーの幸治が止めてくれた。

いくら何でも本気のスーパーは無理だ。まあ、他にやる女子がいて、女同士でやるのなら乗るけどね。俺より本質的に重い男の拳をもらうのはいくらおふざけでも頂けない。

今年の優勝候補は主将の菊池と副将の山下。主将の方が一階級軽い。でも彼は粘り強い、なんて3年同士で話しながら賭けになる。現金を賭けるんじゃない。景品を持ち寄るんだ。提供品は一人何品でオッケー。賭けに勝ったヤツから選んでいく。そして大会選手も同様にもらつて行くと言つシステムで、欲しい物がバツティングしたらジャンケンだ。

とは言つてもむずかしこじゃない。しかも外野まで参入し、最後は適当にみんなで分けきつてしまつ。

ある意味学園でも有数のエキシビジョン。

女子マネの京子と俺は、女で有る事の利点をフルに生かしものすゞこ景品を準備した。

部の男子の意中の女の子をリサーチして、その子達の写真を撮つて来たのだ。

もちろん使用目的をはつきり言つて。だから写真を撮らせてくれた子は、少なからずボクシング部の誰かに興味が有るってことははつきりしていて。それを広げた時のみんなの顔ときたら。それぞれが一点で釘付けになり、まるで

「関係のある物同志を線でつなげ」

状態だつた。俺と京子は顔を見合わせてにやりと笑つた。

結局この景品は一番人気になりそつた。

「はい、もう一人。」

俺は京子に流し目をくれ、栄に向かつてソレを取り出した。インターハイの時に撮つた京子の上目遣いが可愛いジャージ姿。でも、場所が悪い。布団の上。栄が真つ赤になつた。

「そう来ると思つてた。」

彼女もにやりと笑うと、基に向かつて一回り大きいフィルム袋を取り出した。

そこにはTシャツ一枚の俺が気持ち良さそうに寝ていた。しかもグラ半分透けてるし。

「それ、反則！」

俺は真つ赤になつていていたに違ない。

「ネガもよこせ。」

基の一聲で周りが静まり返つた。でもその後持ち前のチャーミングな笑顔を振りまくと、誰ともなくくすくす笑いが起つた。

「すんげー夫婦愛。」

「当たり前だろ、馬鹿。自分の女房を他の男にさらしてたまるか。」

結局基は当たり前のように俺の写真を手に入れ、ちょっと揉む様に持ち上げてから鞄にしまつた。それを見てまたみんなが笑う。彼はこういう空氣を読める男だ。

俺はオークレーの帽子、ミズノのシャツを手に入れた。まるで俺にじつらえたようじぴつたりで嬉しかった。

それから胴上げだ。

みんなでぎやあぎやあ言いながら、めけやくせな顔で3年が宙に舞う。何しろ全員軽いから。

最後から2番目が俺って流れらしく、かなり照れくさかった。でもそれ以上に俺はジエットコースターとか駄目なたちで、コーヒーカップとか見ていいだけでも田が回るから、正直怖くて。

誰かに足を取られた瞬間、俺の右手を基がつかんだ。

「夫婦だもんなあ！」

外野が冷やかかし、あつという間に俺たちは放り投げられていた。

「うあああああっ！……」

落下の瞬間に思わず悲鳴をあげてしまつ。絶対俺が一番高く放られて、一番低くキャッチされているって思った。

硬直する俺の手を基がぎゅっと握りしめた。ヤツをみるとしつかりと田が合い、左頬にえくぼを浮かべながら大きな声で笑っていて。

今の俺たちは対照的だった。

降ろされてからもガクブルで引きつっている俺の腕を持ち上げ、ポーズまでとらせやがって。挙げ句に基は俺の顔をがしつと両手で掴むと、

「ぶぢゅっ！…」

みたいなキスを額にしゃがつた。

後輩達まで、腹を抱えて笑っていた。

全てが終った部室を後にし、送つていいくといつ菊池と話しながら歩いていると、追い越して来た基が声を掛けて來た。

「預けておく。明日7時。待っているからな。どうせ今日は親と一緒にだる。写真は明日返すからさ。」

それだけ言つと小さい金属を俺の手のひらに押し付け

「今日はお前に譲るよ。」

と訳の分からぬ事を言い、他の男連中と去つていった。

「勇利先輩、それって？」

「ああ、これね。」

俺はその固まりを指で摘んだ。見慣れたその形。でもキー ホルダーはついていない。多分スペアキー。

「基んちの鍵。」

菊池が息を呑んだ。

「やっぱ、勇利先輩と基先輩、付き合つてんだあ。」

「いや、そう言う事ではないのではないかと。」

俺は無造作にそれをポケットに押し込んだ。

明日。明日にははつきりさせないといけない。もういい加減、付けを払おう。不良債務は雪だるま状態だ。

そうならない様頑張つたいたはずなのに気持ちが落ち込んだ。お互い軀だけの関係だつて割り切つて始めたはずじゃないか。基が畠山に言われた事で動搖したからこんな事になつたんじゃないか。

俺の事信じてくれたら、あんな事言い出さなかつたんじゃないのか。そんな責める言葉と同時に、関係を続けた優柔不断な自分が嫌になる。

明日。長過ぎた季節にさよならだ。

その時菊池が見つめている事に気づいた。こいつとは入部して來た時から気が合う。第二の基のようだつた。基すらも菊池を俺のツバメとからかつた。そいつが訳知り顔で微笑んだ。

「勇利先輩の好きな人つて、誰ですか？」

思つてもいなかつた質問に俺は狼狽えた。目の前をよぎる柔らかい

微笑み。その影に動搖した。

ああ、嫌だ。不意に会いたくなるこの気持ちをどうすればいいんだろつ。もう一度と会わない方がいい、そう自分に言い聞かせていたはずが、今日はずっとその姿を探していた。もしかしたら基の保護者として来てくれているんじゃないかと期待した。

一日会いたかった。

そのくせ視線が合うのが怖かった。挙げ句の果ては基に兄貴は来ないのかとさえ聞いていた。

「さっきまでいたよ。でも急な取材が入ったからって帰った。」

「お前の兄貴、薄情だなあ。」

気づかれるのが怖くて笑つてごまかした。

黙り込んだ俺に菊池は、

「卒業式の時、探していた人ですか？」

と言い放つた。思わず俺は顔を背けた。今の俺の顔を見られたくないからだ。

「上手くいくといいですね。」

彼の声はからかつてなんかいなくつて。

「卒業しても部には顔見せに来てくださいよ。」

「ああ、もちろん。」

うつむきながら、それさえも気まずいと思つた。

校門の前では沢山の女の子が基を取り囲んでいて、彼は俺達を見ると不満げな顔をした。その嫌そうな顔と言つたら。

「ざまあねえなあ。」

俺と菊池は顔を見合わせて笑つた。基は子供じみた所が有るせいか、女の子に騒がれるのが嫌いだ。しかも嫌いなタイプの

“ちょいアダルト系”

に人気がある。

“女つて何考えてるか解かんねえ。”

彼の声が聞こえるようだ。

かくいう俺もそこそこ女の子に人気があつたりするのだけれど、所詮女同士だからこういう特別な日には至つて静かだ。

反対にいつもは基の剣幕に遠慮し、遠巻きで見ている女の子達の方は本気モード全開で、さすがの彼も振り切れそうにないらしい。可愛らしい花束と、リボンにリボンを重ねたプレゼント。腕にしがみつく細い腕に、有り得ない事にキスしてくる女の子。カメラのフラッシュ。通り過ぎる他の男連中もその様子を呆れてみていた。そんなばつの悪い状況でも基はいつもの基のまま。そして俺たちは別れた。

つづく

Left Alone

第一十話 卒業エキシビジョン（後書き）

まちまち盛り上げてこなす

## 第一十一話 ミルクティ

朝の7時。

鍵をよこしたという事は、起こせという意味だろ？と思つた。

玄関脇の駐車場にシルバーグレーのプリウスが無い事を確認し、ほつとしたような寂しいような複雑な気分で鍵を差し込み、

「おはようござんす。」

小さく声を掛けてから家中に入り込んだ。

今日は基の大学入試の発表の日だ。偏差値5.9。ぎりぎりのボーダーラインに彼はいた。それを一緒に見に行こうと誘われたと思った。多分彼は受かっている、何となくその予感が有ったから。それを一緒に喜ぼうと。

俺は彼の親友？それとも・・・？

最初から決まっていた事だ。俺が選択するのは基との友情以外にない。

暑い日も寒い日も一緒に戦つて来た。単純に練習をする事だけじゃない。ボクシング部全体の士気を盛り上げる為に調整したり、いろいろな所に顔を出し練習できるきっかけを作つたり。全てをボクシングに費やした。確かに基と寝ていた事は恥ずかしい事かもしれない。でも、それ以上に俺たちは必死でやつて來たはずだ。

彼の手を取れたらどんなに楽だらうと思つ。きっと基はあるの笑顔で俺を抱きしめ、一生大にしてくれる。見栄えも良くて頭も良くてセックスも上手で。不満なんか無い。でも、一番大切な所が違うんだ。

ともすれば比べそうになる。兄貴は俺に絶対無理強いなんかしないし、俺がしたいと思えるまで待つてくれる。あの人は俺を見守つてくれる。

何よりも、まっさらになつた何も無い俺が心に思い浮かべるのは兄貴ただひとりだから。例え実らないつて分かつていても、根付いてしまつたこの気持ちを殺す事なんか出来ない。

関係を修繕したかった。10年20年後、親友としてのこの3年間を笑つて話せるようありたかった。俺たちがボクシングに明け暮れたこの時間は宝石のような時間だったんだと一生大切にしたかった。

だから今更彼を傷つけたくない、なんて生温い感情は捨てた。

とりあえずすぐに部屋に向かうのは止めようと思つた。基の部屋は危ない。

そうだ、携帯を鳴らさう。どうしてそれを思いつかなかつたんだろ？

それから一度外に出て、電話をかけた。

鳴らした携帯は家の中では響かなかつた。それどころか電話に出た基は寝ぼけてなんかいなくつて、後ろで電車が出発するアナウンスが聞こえた。

「今どこだよ。」

『どこって、筑波に向かうと』

基気は同時に受験した友人とわざわざ大学まで結果を見に行く所だと言つ。俺は拍子抜けした。

「なんだよ、7時つて夜の7時かよ。」

電話向こうで基が笑つた。

『なんだよつて、なんだよ。俺んちにもう来てんの？そつか。じゃあ、できるだけ早く帰るから、夕方には必ずそこにしてくれ。上手くいけば5時には帰れるから一緒に飯食おう。今晚は俺が用意するから作んなくつていよい。週末バイトがキツいって言つてだらう。俺のベッド使って寝てな。寝込み襲わないから安心しや。』

その後ろで誰かの冷やかす声が聞こえた。

『電話、じゅあ、何だし。もう、結果は出てるだろ。今晚直接会つて話そつ。ここまで来るとさすがに覚悟できている。俺も男だしな。そうだ、結果なんか出でいる。今更待つなんて意味が無いんだ。もう待つべきじゅない。分かつていて。試験の結果がどうあれ、俺は基と別れる。

「ありがとう、でも、いい。その前に話しておきたい事が有る。」電話でなんて卑怯だつて分かつてた。でも、今まで引き延ばしすぎたんだ。

『今じゃなきや、駄目かよ。』

「今、言いたいんだ。」

俺は言葉を強めた。

「俺は、お前の事・・・」

“愛してなんかいない。”

それを彼が遮つた。

「悪い、電車来た。じゃあ、夜に。会つて話そつ。』

手の中の携帯は中途半端な音を奏でていた。

なんだか疲れてしまい、鍵をかけるのもそこそこ基の部屋に行つた。

その窓際にはベッドがあつて。

俺はそこ何度も彼に抱かれた。その度に感情を殺していた。彼はその事に気づいていたはずだ。それなのにベッドで休んでいろという。

皮肉な話しだ。俺はダッヂワifixとして以外、この部屋にいた事、無いじゃないか。

ベッドの上で待つ氣なんか無かつた。かといつてリビングに行く気になれず。結局布団だけ拝借し床に転がつた。

ふわふわの羽毛布団は基の汗の匂いがした。

それから俺は泥沼のように眠つて、目が覚めた時には10時を少し過ぎていた。人は一時間半のサイクルで寝るつて言うけれど本当

だなあ。

と、丁度そのとき玄関の開く音がした。基気が帰つて来たとどうさにそう思い部屋を飛び出し階段を下りかけた。

違う。

俺は足を止めた。

そのはずが無い。大学までは片道3時間。往復で6時間。結果を見たりしたら最低でも7時間はかかる。学校への報告もある。基だって帰りは5時って言つてたじゃないか。玄関の見える踊り場手前で足を止め、俺はそつと引き返した。

今帰つて来たのは会いたくないあの人だ。

俺は部屋の隅で膝を抱えていた。もう眠れなかつた。今日は平日で会社員の兄貴が真っ昼間に家に帰つて来るなんて考えもしなかつた。

イライラする。

いつその事、家を出でいるんだつた。

じうやつて挨拶もしないでじつとしているなんて、本当に子供だと思う。でもやりようが無かつた。あの人の顔を見たら何かが狂つてしまふ気がした。

だからといつてトイレを我慢できるはずも無く。

俺はそつと階段を下りた。トイレ手前で水の流れる音にしまつたつて慌ててきびすを返したけど後の祭り。姿を消すのに間に合わず、ドアの開く気配にもう一度振り返りさりげなさを装つた。

「あ、お邪魔しています。鍵は基から借りました。」

少し頭を下げごまかす。目を合わせられない。

彼はいかにもくつろいでいるといった風情で俺を見た。カジュアルなブルーのストライプシャツにサーモンピンクのベスト。履きくたびれたチノパン。結局どこをとっても品がいい。そう言えどもこの人は本当かどうか知らないが、司法試験現役合格のスーパーエリートだったと聞いた事がある。この人だったらって信じてしまいそう

な噂だつた。

「君が来ているなんて気づかなかつた。久しぶり。」  
嘘つけ。知つていたくせに。俺は思わず目を上げた。

兄貴の瞳は乾いていて何を考えているか分らなかつた。

「ああ、どうぞ。」

彼は素早く場所を譲るとリビングの方へ向きを変えた。開いているドアからは兄貴が好きだと言つていたバイオリンの音が聞こえた。クライスラーだ。

興味無さげな兄貴の背中に、さつきまで会いたくないつて思つていたはずの気持ちがどこかへ行つてしまい、反対にこんなもんだよなと俺はいわれのない寂しさに囚われた。

どうせ俺は弟の男友達でしかないからな。

閉まろうとするドア越しに、

「試験はどうだつた？」

不意に声が掛かり俺に話しかけている事に気づく。

「おかげさまで合格しました。」

心なしか兄貴の声が緊張している気がした。

「おめでとう。頑張ったかいがあつたね。」

さすがに今回はお祝い云々は無いらしい。

「さつき基から電話が有つたけど、結果知つていい?」

「あ、いやちょっと。」

あわてて俺は顔だけを扉から覗かせた。

「後で本人から直接聞く事になつているから。ごめん。」

日差しを背に受けて兄貴の顔は見えない。ほんの少し見つめ合つた気がする。

「良かつたら、何か飲まないかい?」

ためらいがちにかけられた言葉を遮る様に俺は扉を閉めた。

せつかくの社交辞令を無視した自分の幼稚さがいやだつた。

便座に座つて落ち着くというのも情けないけど、頭を抱え、もう少し大人にならなきやつて思う。この年になつてハツ当たりだなん

て。

「わつわざ」免。切羽詰まつててや。」

俺はリビングのドアを少し開けて声をかけた。返事は無かった。  
しゃあない。

そのまま引き返そうとすると、

「どうぞ。」

と柔らかい声が聞こえた。兄貴はキッチンニアから出ていく所で、手には白い食器を持っていた。

「少し甘いからお好みとは違うと思ひけど、たまにはいいだろ。」「渡されたそれはミルクティらしい。田濁した褐色。微妙にシナモンの香り。

勧められた訳じやないけど勝手にソファに座わり、彼の視線を感じながら呟む。

「おいしい。」

ほっこり、そんな味だった。頬が緩む。確かにほんの少し甘いけどくど味はなく、まるみがあつて温かい。両の手のひらに吸い付く様な、これはカフェオレボールだろうか？その重さが心地いい。何とはなしに兄貴の味だと思い、立ち昇る優しい香りを吸い込んだ。

兄貴の事を一言で言えば

“ 審容 ”

だと思う。

俺はついついそれに甘えてしまう。そんな自分が嫌になる。限界ぎりぎりまで縋つてしまいそうで怖くなる。もうそうなったら俺は止まれないだろ。兄貴の迷惑そうな表情が目の前をちらついた。それでもきっと俺は引き返せない。

表面上にできた薄い膜を啜つた。まだ父ちゃんが生きていた頃、絵里子さんが作るホットミルクが好きだった。白砂糖じゃなくてザラメを使い、最後にシナモンシュガーをほんの少しふる。幸せの味だ。

その水面に張った膜をもぐもぐと食べるのが大好きだった。

天国の父ちゃんは何をしてんだろう。今頃生まれ変わっているのかな？

つづく

Left Alone

## 第一十一話 ミルクティ（後書き）

そろそろうらぶあまモード入ります 激甘の予定です。温かいお部屋、二人っきりの密室

それと、基バージョン（未公開）よりえらえろシーン一部抜粋の「彼女。」投稿しています。

Left Alone ここまでおつき合っていただいた強者でしたら耐えられるような、かなりきつい内容です。  
15禁すれすれ。エピローグの一言に力込めてます。ぜひじらんになつてください。

## 第一十一話 壊れる（前書き）

作者：謎のロシア人 エロセ・シユラバスキー・ながる でござい  
ます。

## 第一十一話 壊れる

その時斜め向かいのソファに座る兄貴が少し動き、俺の方を上目遣いで見つめていた事に気がついた。俺と田が合った彼は小さなため息と共に、

「基との関係はいつまで続ける気だ。」

そう言った。

予期なんてしていなかった。

突然の言葉に俺は体を硬くした。いずれ言われる事になるんだろうとは思っていたけど、その一言はフワフワと宙に浮いていて悲しい気持ちだけが湧いて来た。

関係、か。あいつと寝てるって事、兄貴に知られてる事ぐらい、知っていた。でも、俺だって別に好きでこんな関係になつたんじやない。できる事ならこんな関係、最初から無かつた事にしたいよ。もう別れるつて決めてるけど落ち込んでしまう。俺は好きでもない男に抱かれて平氣でいられ、その上何度も何度も快感を貪つて。やっぱり自分は名前通りの女なんだつて。普通じゃないんだつて。その沈黙を

「済まない。」

兄貴はさも申し訳なさそうに謝った。

なんだよ。なんで兄貴が謝るんだよ。  
兄貴は俺のトリガーリングを引く。心が弱くなっている瞬間を見越して引き金を引き絞る。  
嫌になる。

俺は唇を噛んだ。

「基とは別れてくれ。」

続けられた言葉に俺は啞然とした。そう言う事だったのか、と、  
そうだ、この人は俺を未だに男だと思っているんだった。俺は笑  
いたい気分になつた。男同士の関係はいかんと、本当はもつと前に  
俺に言いたかつたはずだ。何しろ俺にH.I.Vは怖いと説教したくら  
いだもの。

今までそれを言いたくて我慢していたんだよね。

「実はさ、俺、本当は女んですけど。びっくりした？ 兄貴があん  
まり上手い事騙されるから、言うに言えなくなつちまつてさあ。ご  
免。そんな訳です。」

そんな台詞が俺の頭に浮かぶと同時に、沸々と怒りが湧いて来た。  
なんだよ、俺だけかい？ 弟の事は責めないのかよ。俺も基も同罪  
だぜ。そんなに俺が誘惑しているように見えるのか？ これじゃああ  
の時俺をスベタつてののしつた畠山の母ちゃんと一緒だ。でも、兄  
貴の方がタチが悪い。

兄貴は優しい顔で俺の事監視していただけだつたんだ。  
お願ひだから少しは俺の話しも聞いてくれよ。

俺だつて辛いんだよ。

俺だつて誰かに解つて欲しい。愛してくれなんて言わないさ。で  
も、人並みに好きになつてもらえるくらい期待しちゃいかなかつた？

俺は基が好きなんじゃない。兄貴の事が好きなんだよ！！

手に持つボウルが震えた。こんな時変だけど、こんな高級そうな  
食器、割つたら弁償できない。そう思つて必死で震えを堪えた。  
大きな両手が俺の手に重なり、そつとボウルを取り上げる。その  
仕草があまりにも温かくて、この人が何を考えているか解らなかつ  
た。涙で滲む目で彼を見上げると、兄貴はゆっくりと唇を寄せた。  
ほんの少し、口の端に触れるようなキス。

なんだよ。俺の事男だと思つてんじゃねえの？

兄貴は俺が座つていた独り掛けのソファに上がり込み、俺を抱き

しめた。それからもう一度、やんわりと鳥の羽が触れるようなキスすると、泣いて欲しくないと呟いた。

確かに兄貴の声で言つた。俺の事が好きだから、泣かせたい訳じゃないんだと。

大好きな兄貴の香りに包まれて、俺は狂いそうだった。  
この人は俺を壊そうとしているんだろうか。そんな風に言われたら本気にしてしまう。

これは夢？

俺の頭をその手が撫でた。あれほど不快だと思つていた行為なのに兄貴がすると心地良い。

俺は思いつく限りいつも兄貴の腕の中で泣いていた気がする。

兄貴はいつだつて俺を受け入れてくれた。兄貴だけは特別だつた。この人を見上げながらどうしていいか解らず戸惑つた。本氣で好きだから。恋愛の経験は無いのに、セックスだけは覚えていて、それ以外のつながり方を知らない俺。手段も方法も知恵も無い。その上軀は彼の事を欲しいと言つていて。そんな俺を軽蔑だけはされたくなかった。

澄んでいる、でも少し困った様な瞳が俺を見つめていて。  
「基じや無い。俺が好きなのは、基じや無い。でも・・・・どうしていいか解らない。」

この人が何を考えているか解らない。俺の

“好き”

“愛している”

は、

の

“好き”

だから。

彼は俺を見下ろすと一瞬表情を止めた。それから大きく目を見開くと俺の首筋に熱い唇を押し付けた。舌先で愛撫を繰り返しながら、強く、強く、強く！

俺は叫ぶように告げていた。

「好き、兄貴が好き。」

体に回した腕に全ての力を込めた。放さないで！

「兄貴が好きなんだよう。」

我ながら情け無い声で懇願していた。体中が疼き、どうしても兄貴が欲しかった。

## 第一十一話 壊れる（後書き）

かつといじりまで参りました。

次はお待ちかね・・・いや、待っていないつて？

第一二三話 恋（前書き）

R15 性描写有ります。お嫌いな方は迂回願います。

## 第一二三話 恋

兄貴の手が俺の体をまさぐつた。その肌を滑っていく感触に目眩がする。その指が俺の胸に触れ彼が呆気に取られたのが分るから。

「女でご免。」

そんな言葉が頭に浮かんだ。同時に唇が塞がれた。

まるで津波のようだつた。

一瞬の間に呑み込まれる。何が起こったか気づく前に攫われ、高波に押し上げられ、溺れそうになり、その体にしがみつく。打ち上げられるように椅子から柔らかいリビングの絨毯の上に降ろされていた。

愛して欲しかつた。俺は一度だつて本当に好きな人に抱かれ事が無い。正確に言うと俺はこれまで恋なんて知らなかつたんだから。だから一度でもいい。この人に愛されたかつた。愛している人と躯でつながる喜びを知りたかつた。

兄貴の唇が愛していると囁いた。何度も何度も繰り返される。

厚手のフランネルのシャツのボタンが外され、タンクトップがたくし上げられ、肌寒いはずの空氣に晒されながら俺の躯は火照つた。貧相な躯。それでも彼は満足そうなため息と共にそつと頬をすり寄せた。

彼の唇と掌が俺のすべてを知りたいと行き交い、体中に兄貴の熱を感じ、俺は焼き尽きそつだつた。俺はしがみつく以外何も出来なくて。それでもこの人から与えられる痛みにも似た刺激の一つ一つに悲鳴をあげて応えていた。

融けそうで、燃えそうで。俺は形を無くし、意識だけが宙に浮きそうだ。

でも彼は服を脱ごうとしない。こんなに激しく求め合っているの

に、兄貴はなぜか躊躇っている。

「ねえ。」

俺は彼の胸元に指を滑らせた。自分が夢中なのかと悲しくなりそうだ。

この境界線を踏み越えたかった。

その時やつと気がついた。俺は少し鈍いらしい。

「妊娠なんかしない。」

そう言うと困った顔の兄貴は少し軀を引いて、それから俺を気遣う様な丁寧なキスを鼻の先に落とした。

「欲しい。でも、それだけじゃない。大切だから、大事にしたい。焦らなくても、君は僕の特別な人なんだ。」

その一言に限りなく愛されているって思つた。

でも俺にとつては兄貴こそが特別なんだ、そう伝えたかった。

危険を冒す価値がある、そう思えた。もちろん可能性は低いから。だから他の男にコンドームなしでやらせた事なんか一度も無い、そういう言つて反応を待つた。

「リスクがあるとか無いとか、兄貴とだつたらそういう言つの、関係ないんだよ。」

すると兄貴は真剣な表情で、覚悟は有るのかと言つた。

“覚悟！　！”

思わず大きなおなかを抱えた自分の姿が思い浮かんだ。産みたいと思った。辛い生活には慣れているから大丈夫。俺の膨らんだおなかをこの人が支えてくれたらどんな気分だろう。

兄貴の赤ちゃん・・・・！

「産んでもいいの？」

それは賭けだった。自分から抱いて欲しいと思っているのに、兄貴にも責任を強要しているんだから。

それでも彼の顔はほころび、俺はキツく抱きしめられた。愛の言

葉をささやきながら、俺を覆っている全ての服を取り去り、体中にキスを撒き散らした。

初めてのときよりも怖かった。彼を満足させられるか心配だった。服を脱いだ兄貴はとても大きくて6年の歳の違いが目の前に迫つて来た。

その背中に必死で腕をまわした。

好き。この人が好き。

なのに見下ろす瞳が一瞬不安そうに揺れた。どうして？俺はこんなに幸せなのに？

俺じや駄目なの？俺は兄貴を悲しませているの？

もう一度その背中に力を込め

“ お願い ”

そう言いかけた時、彼はほつと緩んだような表情を浮かべると、俺はその腕の中にしっかりと包み込まれていた。

生物学の本で読んだ事がある。どうして女が感じた後に動けなくなるのか。それは精子が体の外に流れてしまわないようにする、自然な働きだって。

片肘を立てて微笑む兄貴。その手の甲が俺の頬を撫でている。見つめられて恥ずかしいのに、俺はほつとしたまま、彼から目を逸らす事ができない。

「 てきてたら、産んでくれるんだよね。」

兄貴は小声で囁いた。それから俺の腰を引き寄せ、自分の体の上に乗せた。

その感触に胃の辺りが沸き立つ。

この人と愛を交わした？

「 嘘みたいだ。」

独り言のはずが彼はくすくすと笑つて受けた。

「嘘だつたら困る。」

その目はいたずらっ子のように輝いていた。

「俺の事、男だと信じていたくせに。」

なんだよ、この変わり様は。一人とも子供みたいだった。

不意に兄貴が俺の耳を噛んだ。思わず声が出る。あの蕩けた瞬間が蘇えり、躯を開こうとし慌てて身を隠す。今の恥ずかしい仕草を感じられたかと兄貴の瞳を覗き込むと、そっちの方がもっと露骨で恥ずかしかった。

兄貴がしてくれたように、俺も俺のやり方で愛している事を伝えたかった。

でもよく考えると、いつもやつて自分から男の人に触れるのは初めてだ。

「がつかりさせたら『めん。』

俺には本当の意味で

“愛し合ひ”

事の経験がある訳じゃない。

それでも不安は感じなかつた。きっとわざと一緒だ。躯の声を聞けばいいんだ。兄貴を感じていればいい。

「兄貴が好き。兄貴だけが好き。兄貴の事考えると他の事、どうでも良くなる。」

兄貴はこの世の全てだ。

両手をついてバランスをとりながら、彼の感触を確かめた。それから彼の手をとり俺の腰に持つて來た。兄貴に導いて欲しかつた。この人に愛される本能で俺は女に生まれ変わるんだと思った。

「兄貴の手で俺の事作り替えて。俺、兄貴の手で女になりたい。」

俺の躯の中で嬉しさが弾けていた。

「肇。」

彼は名前を口にした。

「兄貴じゃない。肇だ。」

はじめ、はじめ。兄貴の事を名前で呼ぶなんて恥ずかしかった。照

れぐさいけど、初めてその名前を呼んだ。

「は・じ・め。」

その響きに痺れた。

「筆が好き。」

大好き。筆が好き。筆が好き。

なんて好い名前なんだろう。俺はその名前を繰り返した。

Left Alone

つづく

## 第一二三話 恋（後書き）

「彼女。」をお読みになつた方ですと、基、兄貴、そして勇利の態度がそれぞれまるで違つてゐる気が思ひます。

性愛について、H里斯・ピーター著 聖域の雀 に出てくるワンシーンは圧巻！タブーを犯したとしても、愛情に突き動かされて起こした行為は神々しさを感じます。あんな文章を書ける様になります。

## 第一十四話 夢を見る

一人で少しまどろんだ。時計の針は一時を少し過ぎていて、南向きの部屋は午後の日差しで初夏のように温かかった。

先に立ち上がったのは兄貴の方で、大きめのタオルを持って来ると俺をその上に座らせた。最初何をしているのか分らずきょとんとしていたけれど、すぐにその理由が分った。

その事に驚き躯を振るわせる俺を、兄貴はとても満足そうに見ていて。

恥ずかしかつたけど、それだけじゃなかつた。

俺の躯に刻まれていた過去の全ての傷跡が消し去られ、この人と愛し合つた記憶だけが残つている。その事がとにかく嬉しかつた。だからシャワーを浴びる気にはならなかつた。肌に残つた兄貴の匂いをずっとまとつていたかつた。

兄貴は完璧だつた。単に格好良いとか学歴が高いつて事じやない。思いやりが有つて優しくて。

俺が身悶えるたびに

「怖くないから。」

つて囁いてくれて。俺の不安の全て取払い、その瞳を合わせ、自分以上に俺を大切してくれた。

先に服を着終えた兄貴はソファにもたれながら俺を待ち、手招きをした。その隣に座ると引き寄せられ短い可愛いキスをしてくれた。まるで恋人同志のように。

でも現実に戻つた俺は少し不安だつた。第一兄貴と俺とじや釣り合わない。この人が軽い気持ちでこんな事をするとは思えないけれど、今有つた事を無かつた事にしたい、そう思つても不思議じやなかつた。

そんな俺の心を見透かしたかのように、兄貴は言った。

「俺たちは恋人同士なのかな。」

この返事で何もかも決まる、そう思った。

“もう、恋人同士だろう？”

そんな風にさりげなくふざけて返そーか。でも出て来たのは俺の抱える不安そのものだつた。

「俺の事、彼女してくれる？」

何もかも兄貴次第だから。

兄貴はため息をつくと、仕方ないなあ、と言つた感じの笑い顔を浮かべ、どうしていいか分らずにいる俺に口づけた。

ほんの少し、つつく様なキス。そのくせ抱えている腕の力は強くつて身動きできなかつた。俺は唇を開いて欲しいと誘う。ゆっくりと差し入れられた柔らかな舌が俺の中を擦るのに、すぐに戻され、じらされ、いつの間にか俺は喘ぎ声を上げていた。これが本当のキスっていうものだつて思つた。

追いすがろうとする俺をよそに、まるで意地悪なヒョウのようこの人はゆつくりと唇を離す。でも彼の瞳に映つているのは欲望ではなくて、むしろ深くて見えない水の底の様だつた。

この時やつと彼が何を言いたかつたか解つた。

「僕は君の

“たつた一人”

になりたい。

それはとても落ち着いた静かな声だつた。

俺が今日ここに来た本当の目的は、基と別れる為だつたと告白した。

いつも兄貴の腕の中で泣いているものだから、それが習慣になってしまつたらしい。俺はその胸に顔を埋めていた。

俺はついさつき感じた

“今まで生きてきて最高の瞬間”

と、これから基に言う別れの言葉で胸が一杯になりそうだった。

男と女の間に友情つてあり得ないのかなあ。

俺は基に言つはずだつた別れの言葉を心中で思い出し繰り返していた。

始めから一人の間に恋愛感情は無いのだ。ただあの時はなり行きで躯を提供しただけだ。まるで教科書を貸すみたいに。そして俺は熱心な選手を手に入れた。ある種の取引だつたんだ。二人は親友、でもあれは愛じやない。俺達は繋がっているけど、それは男と女の情じやない。

「兄貴の事好きになつて初めて解つた。」

そう、俺は兄貴を好きになつて初めて

“ 愛している ”

つて事を知つたんだ。俺は兄貴から見返りを欲しいなんて思わないし、兄貴は無条件に俺を包んでくれる。何かをくれてやる事も奪う事も無い、心から受け入れたい。ただそれだけ。

「俺が愛しているのは後にも先にも兄貴だけだ。」

その事を基に分つてもらえるだろうか。俺は彼を愛していないと。基が思い詰めている事を知らない訳じやない。二次試験の前日にあんな事が有つて、彼は舞い上がりそうなほど喜んでいた。きっと彼は俺がいい返事を返すと確信したに違ひない。でも、あれは間違いだつたんだ。

家の合鍵もそう。彼は“持つていろ” そう言つ意味で俺に渡したつて事分かつてた。

その彼があと4時間で帰つて来る。多分、合格も決め、お祝いのシャンペンとお気に入りのテリの総菜と、ホールのチョコレートケーキを抱えて。頬にあのえくぼをたたえながら。

「ご免、基。」

それは声にならず、兄貴の胸元へと消えていった。

もつと早く基に別れを告げるべきだった。受験前に動搖させたく

ない、そんな気持ちではつきり言えずにいた自分が嫌だ。別れを先送りにすればするほど、基は傷付くというのに。

そんな俺を彼はただ頷くように抱きしめてくれていた。

この人は俺の中にある感情をありのままに受け止めてくれている、そういう気がした。だから俺を尊重し、俺自信で後悔しない様な結論を出せるよう待つてくれている、そう感じた。

「自分で言えるかい？」

この人は俺に勇気をくれる。

自分で決めた事を強い意志で貫けるようにな。

だから俺はきっぱり言つことが出来た。

「大丈夫。今の俺は誰よりも強いから。俺が基と別れを決めたのは、基を愛していないからだ。兄貴とこういう関係になったからじゃない。基と俺の関係は、もう既に結果の出でている事だった。」

俺達の別れに兄貴は関係がなかつた。俺は彼を愛していない。それが理由だから。だから独りで決着を着けなきやつて思った。

「少し・・・・時間がかかるかもしれない。」

俺の体に回つっていた手にわずかだけれど力が込められた事を感じた。

「基には納得して別れて欲しいと思っている。」

兄貴には悪いと思う。でもそれは必然だつた。

「自分でまた種は自分で拾うから。けじめだけはつけないと。」

納得がいかない、そう言われもめる予感が有つた。もしかして他に誰かいるのかと問いつめられるかもしれない。でも、それは基には関係ない。俺が誰を好きになろうが自由だ。だから兄貴を巻き込みたくなかつた。

もしかしたら兄貴が間に入つた方が話しさ早いのかもしれない。でもその考えはすぐに捨てた。けりはつくかもしれないがそれで彼が納得できるはずが無いから。

基は親友。だからこそ解つて欲しい事が有つた。

「決着がつくまで、会えないかもしれない・・・・」

頭の上で小さく頷く気配を感じた。

つやむやに流してしまったら、俺は兄弟の仲を引き裂くだけで、いつか兄貴は俺といいる事が苦痛になる日が来る。俺は確かに兄貴を愛しているけれど、それを基や兄貴を犠牲にしてもいいという口実にはしたくなかった。

兄貴はそんな俺に言った。

「心の底から君が好きだ。君を誇りに思つ。」

その一言で理解されているつて感じた。

「僕はいつまでも待つ。一生でもかまわない。勇利が勇利でいる事が出来る為なら、時間は問題じやない。僕が生きるつて事は、君が君である事なんだ。」

引き寄せられ、唇から愛をもらつ。眞面目そうに見えるひとほど裏があるなんて嘘だ。俺は彼の上に軀を乗せ、その誠実な顔を両手で包み、はつきりと名前を呼んでいた。

「肇は神様が俺にくれた一番の贈り物だ。俺、肇に認めてもらつて初めて自分の事が好きになれた。」

それが本心だつたから。この人は俺の悪い所や醜い所の全てを浄化してくれる。この人がいて初めて俺は生きる事が喜びだつて知つたんだ。

「肇の全てになりたい。」

できるものなら。この人が俺に注いでくれた愛の分だけ、俺だつてこの人を大切にしたい。

「ねえ、お願ひだからこんな俺の事見捨てないでね。俺が愛していくつて言つた事、信じてね。」

「馬鹿だなあ。」

その声は優しくて。

「僕は一生君のそばにいたいのに。」

この人の本音だと思つた。有り得ないほど幸せだった。

L  
e  
f  
t  
A  
l  
o  
n  
e

レバ

## 第一十四話 夢を見る（後書き）

次回予告　「免なさい、免なさい、免なさい！」

## 第一十五話 蜂蜜色の時間（前書き）

「ゴメンナサイ。結局どうあまセカンドストーリーを投入してしまいました。

## 第一一十五話 蜂蜜色の時間

「少し休まなくとも大丈夫?」

気持ちよくつて兄貴にもたれている俺にこの人はそう言つた。

「大丈夫。」

今はこうしていたい。兄貴の心臓の音を聞いていたかつた。

「筆が好きだから。」

その一言で、鼓動が早くなるのが分かつた。驚いて見上げると、兄貴は困った顔で俺を見下ろしていく。

「僕のベッドにおいて。」

そう言つた。

「お姫様だつこは嫌いかな?」

照れくさそうに。

「うん。」

それは初めての事だつたけど。

「して。」

そう言いながら彼の首に腕を巻き付けた。

兄貴のベッドは当然の様に兄貴の匂いがした。服のまま羽毛の布団に包まれ

「安心してお休み。」

つて言われ、腕の中に囲われた。でも、当然、眠れるはずが無くて。

「はじめ。」

そう言つて見つめている彼の気を引いた。

「ん?」

「もう、飽きちゃつた?」

兄貴が息を詰めた。

「馬鹿だな。」

困つたような、それでいて欲望を讃えた瞳が俺の顔を覗き込み

「いいの？」  
つて、聞いた。

シーツが心地よかつた。基に抱かれていたのが嘘の様だった。唇が合い、それを返す喜びを。内側の柔らかい所がこすれ合い、お互いの小さな違いを感じあつ。ぴちゃつぴちゃつていう小さな水音が頭の中でこだましていた。

「肇……」

自然にその名前がこぼれた。

「んつ・・・・・」

彼が差し入れる舌先に、自分の舌を丸める様にし、そつと下から絡めた。彼の喉が小さく鳴るのが嬉しくて、舌の先を揺らし彼を刺激する。なんて素敵なんだろう。自分一人が一方的に愛しているんじゃない。ましてや、受け取りを拒んでいる愛を強要されている訳じやない。これって、お互いが分け与え合う感情だつて思った。全神経を唇に集中して兄貴を感じうつとりしていた。そのはずが、

「あっ！」

この人の大きな手が動いて、俺の胸を包んだ。

「うくっ。」

摘まれ、こねられ悲鳴は彼の口の中。全てが飲み込まれ、ああ、蹂躪されているつて、思つた。俺はこの人に支配されている。俺はこの人の女だつて。

従属している。それは均等な関係ではないのだろうけれど。それでも俺はこの人のモノになりたかつた。

彼はゆっくりと唇を離す。

兄貴は意地悪だ。

欲しい、欲しい。この人の全てが欲しい。耐えきれなくて、しがみつき引き寄せる。

「お願い、ねえ、欲しいの。肇が欲しい。」

そしてこの人はいやらしかった。強すぎる刺激に怖くなり、思わず

「嫌つ。」

「つて抗うと、

「好いから。」

つて言つてもつと惨くする。奥歯を噛みしめ、反り返る俺に追い討ちをかける様にキスをして。

「声、聞かせて。」

いやらしい、いやらしい、いやらしい！！

身悶えが止まらない。快感がスパイラルで降りて来る。そのくせこの人の動きは緩慢で、俺の躯ばかりが別の生き物みたいに動いていた。

声かされるほど叫ばされ、何度も意識が飛びかけた。でも兄貴は余裕で、俺は味わい尽くされている、そんな感じだった。

そしていつか羞恥心と快樂のないまぜになつた渦に巻き込まれ、氣を失つていた。

「恥ずかしい・・・。」

気がついた俺は両手で顔を覆つて兄貴の視線を避けた。きっとAV女優並みに凄かつたんじやないかって、嫌になつた。とにかく、恥ずかしかつた。

「俺は、嬉しいよ。」

そつと抱き寄せられた。

「俺たちは愛しあつたんだ。俺たちは特別なんだよ。」

その関係に墮ちていきたかった。

それから少し寝て優しいキスで起こされて。兄貴と離れるのが辛かつた。

そんな風にぼんやりとしている俺の躯を兄貴が気遣う様に優しくタオルで拭いてくれ、張り付いている髪を撫でとかされた。

「風邪、ひかない様にね。」

なんて。

大切にされているのは分かつてゐるけど、手慣れてる。俺が言いつのはおかしいのかもしない。でも大人つてこういうものかつて思つた。

すると俺の頭の上で、ちょっと笑う音がして  
「俺だつて、童貞じやないわ。」

その上

「初めては高校1年の夏で、それからしばらくしてやつてるとこ弟に見られて。親にはしこたま怒られた。」

意外な言葉を聞いた。

「俺は普通の男だから。」

そつ言いながら、俺の首筋に甘く吸い付いた。

「愛してる人の事ばかり、考えてしまつ。」

その腕の中で揺すられながら、

「絵里子さんの休みの日に、改めて挨拶にいこう。」  
つて言つてくれた。

赤ちゃんができるたら、学校行けなくなるなつて思つた。でも兄貴が許してくれるなら、といふか、できたらやつぱり産みたいし。  
俺はまだ子供だから。子供が子供産むつて反対されるかもれないけれど。でも、多分大丈夫。この人は俺を一生守つてくれる、そんな気がした。

この人の赤ちゃんだつこして

『おかれり。』

なんて言いながら暮らす毎日つて、どんなだろつ。

兄貴に寄り添いながら、基の事を思い出してゐた。あいつの腕の中で何回も達した。動物つて、本能に勝てないつて思い知らされた。好きでもない男に抱かれて感じる事が惨めだった。  
でも、違う。

兄貴と交わすキスの方が何倍も良い。奇妙な話しだけれど、それだけで自分の軀にスイッチが入った。彼を迎える。その準備を始め、何もかもが潤つた。でもそれはとっても嬉しい感覚で、女でいる事がとても良い事だつて思えた。それに何よりも終わつた後に心があつたかくなつた。

それは基としていた快感だけのセックスなんかとはまるで違つていた。

「もうそろそろ。」

時計の針は4時を指していく。後一時間で約束の時間だつた。

兄貴に関係するものは何でもそう、気持ちいい。このベッドもうだ。このまま根っこが生えそつになるくらい素敵だつた。だから「行かない」と。

本当に離れられなくなつてしまつ。

「ずっとこのままこうしていたいなあ。・・・・時間が止まれば良いのに。」

未練がましい俺はもう一度兄貴の匂いを吸い込んだ。

「ここにいても良いんだよ。」

ふざけながら返され、兄貴が俺の代わりに基に話をつける気が有るつて事感じた。

「それは、駄目。」

兄貴の優しさにつけ込んじゃ駄目だよ。

「必ず戻つてくるから。」

その時まで、待つていてくれる?ねえ、お願い。戻つて来た俺の事、喜んでね。

基を待つ為に一人でリビングに戻つた。もちろんミルクティは冷めているから。

「何か飲み物でも入れようね。」

彼はコーヒーメーカーをセットした。俺は少しでも兄貴と離れるの

が辛くつて、その背中に寄り添っていた。

「甘えん坊。」

彼が笑うから。

「うん、そう。」「

つてシャツ越しに背中を引っ搔いてやった。

「俺、放っとかれると寂しくって死んじゃうかもしれないよ。だから、ねえ、独りにしないでね。」

すると兄貴は困った顔で振り向いて

「馬鹿な事言うんじゃない。」

つてたしなめた。それから

「君がいなくなってしまったら、僕がどうなるか考えて言っているのかい？勇利は僕がどうなつても平気って事なのかな？」なんて、意地悪を言いながら抱きしめてくれた。

「コーヒーが出来上がるまではほんの少し時間があつて。俺たちはもう一度ソファに戻つてキスをした。

空気の入れ替えられたりビングは一瞬肌寒かつたけれど、すぐに二人の熱で温かくなつた。

つづく

## 第一一十五話 蜂蜜色の時間（後書き）

できるだけ早く、予定の修羅場も書き上げます！

## 第一十六話 傷（前書き）

暴力シーンが有ります。苦手な方は回避願います。

## 第一十六話 傷

何も怖い事なんか無いって思った。兄貴のまっすぐな瞳に俺の姿が映っていて、その唇の端が緩やかに上がる。視線を交わし合う事がこんなに素敵な事だなんて。めちゃくちゃドキドキして、自分の中に眠っていた

“女の子のかけら”

がきらきらきらめいているみたいだつた。恋つて甘い。そして今俺は言葉も発せずただ想うだけの人魚姫じゃない。彼は目の前にいて、俺を受け止めてくれる。

「ねえ。」

「ん?」

好き。

「キスして。」

この人は俺を甘やかしてくれる。顎を持ち上げられ、キスをもらい、彼のたくましい背中に腕をまわした。彼に包み込まれる快楽に酔つていた。

最初に気づいたのは冷氣だった。北側の玄関から続く廊下から冷えた空気が流れて来て。それが危険を告げた。

はつと顔を上げると、まだ帰つてくるはずの無い基が啞然とした顔で俺たちを見つめていた。

「お前ら、何やつてんの?」

ひどく乾いた声だった。

俺が基を見たのと、彼が俺達に冷たい言葉を投げつけたのはほぼ同時に。

何をしているのか分からぬはずが無い。抱き合ひ、キスをして気持ちを確かめ合つていた。それ以外の何者でもなかつた。

だからその視線。その視線に体が凍るかと思つた。それは子供の頃くそおやじにやられそうになつた時にも感じた事が無い感覺だつた。逃げようと思つても逃げられない。そう思つた。

彼の怒りが怖いんじやない。それ以上に、追いつめられている基が怖かつた。

それは基であつて基じやなかつた。

近づく彼からは憤怒の青白い炎が見えるよつだつた。

俺の舌は凍り付き、言つはずだつた言葉もどこかへ消え去つて、思わず兄貴にしがみついていた。

「いやつ！」

来ないでくれ！！

兄貴の腕がしつかりと俺を抱きしめ、二人基と向かい合い、「基に話が有る。」

兄貴は躊躇わなかつた。そんな彼を遮り

「離れる。」

聞き慣れたはずの声がそつ命じた。

「離れろつて言つてんだよ。」

彼は怒鳴るでも無くそつ言つと、予想もしていなかつた強い力で俺を兄貴から引き離し、よろめく俺を無理矢理向かい合わせに立たせた。

「何やつてんだよ、勇利。」

俺の顔を覗き込み、基がこの現状を必死になつて否定しよつとしているのが分かつた。

「しつかりしろよ。お前、俺の女だらう？」

その声は悪ふざけをとがめる小学校の先生のようだ。俺に言い訳をしろと言つていた。それから、謝れと。

謝れ？

基は何を言つてゐるんだ？

沸々と沸き上がる思いがあつた。

俺はお前の女になんかなつた事、一度も無い。

俺はお前の所有物じゃない。

俺にだつて俺の気持ちが有るんだよ、なあ、基。お前がそれを大事にしてくれなかつただけだぜ。それどころか今まで踏みにじつていたぢやないか。それなのに、何言つてやがる。

ふざけるな!!

俺は渾身の力で基を振り払つた。基は意外な顔をした。

俺の中で何かが切れた。きれい」とぢやない。俺はお前と別れたいんだ！こんな関係、もう、嫌なんだ！！

「俺はお前のモノなんかぢやない。第一、基は俺の気持ちなんかおかまいなしだつたぢやないか。結局抱くのが目的だつたんだから。だからいつその事、ずっとダツチワイフのままでよかつたんだ。それなのに、何を今更。恋人みたいなふりは止めてくれ。俺達は愛し合つて抱き合つたんぢやない。後悔しないつて言つたのは、お前の方だ！！」

俺が壊したんぢやない。お前が壊したんだ！！

俺が好きでお前に抱かれていたと思っていたのか？俺が抱かれた後、どんなに惨めな気持ちになつたか、考えた事があるのか？どれほど俺がお前の事、愛せるようになろうと思つたか、考えた事あるのか？でも、駄目だつたんだよ。

そりや、気持ちよかつたさ。でもな、まるで反比例のグラフみたいに俺の中は冷めてつたんだよ。感じれば感じるほど、お前ぢや無い事が解るから、お前の事愛してるんぢやないつて解るから、どんどん自分が惨めになつてつたんだよ。こんな事続けている自分が大っ嫌いになつてつたんだよ。

「畜生！」

「うう、大嫌いだ！！大嫌いだ！！

「大嫌いだ！！」

腹の底から叫んでいた。

俺達は憎しみあう敵同士みたいに対峙した。俺だって正面から決着つけたかった。

それが、兄貴に後ろから抱きかかえられ少し後ずさった。

“ いけない。 ”

彼の腕が止める。俺はソファの向こうに押し出され、逃げろって言われてるのが分かつた。

俺を追いかける基を兄貴がつかみ、

「 よすんだ！」

「 放せ！！」

基が肩を回し腕を払う。それから、脇を締めビボットターンで拳を固め・・・・・。右の肘が下がつた。

「 止めろ！！」

叫びは届かなかつた。兄貴の心臓の下に突き上げるような拳。鈍い音。彼はそのまま手を留め、押し込むように膝を折り腰がねじれる。それはまるでスローモーションを見ているみたいだつた。

兄貴のせいなんかじゃない！！

「 俺が決めたんだ！」

俺たちの事にこの人を巻き込むな！

「 ふざけやがつて！！」

兄貴をかばおうと慌てて止めに入つた俺。泣き出しそうな、すがりつくような目が俺を見る。でも、そんなのご免だ！！同情なんかしてやるものか！

お前は自分が何したのか分かつてんのかよ！！

強い力を両肩に感じた。つかまれた。ああ、良�。でもな、力で何とかなるなんて思うなよ。にらみ返す俺に

「なんで・・・」  
彼が言いかけ・・・でも、それは最後まで聞く事ができなかつた・  
・・・。

ぐわんっ

頭が揺れた。

何が起こつたか解らない。

吐きそうだ。吐きそうだ。

ああ、吐きそうだ。目の前、暗いよ。  
気持ち悪い。

涼しい風が目の前をよぎつた。

兄貴と視線が合つた。どうしてそんな驚いた顔するんだよ。

・・・俺、今どこにいるの？

頭の上で何か音がして。見上げると、何かが落ちて來た。  
何だか見覚えが有る。俺の顔に当たつたそれは、前方に大きくバ  
ウンドして。

兄貴、あれつ？血、出でいない？出でるよ、血。ああ、止めないと。  
鼻血だね。頭高くしてね、喉に落ち込まないよ！。気持ち悪くな  
るからね。

ああ、吐きそう。

血？この血は俺の血？

ぽたぽたぽた・・・・?

手についてるよ。左？左の頬？血が出ている。でも、痛くないよ、大丈夫。それより・・・・気持ち悪い。

何みんなしてそんな顔するんだよ。これだから男は駄目なんだ。これ程度の血が出たぐらいで怖じ気づくなんて。

それより病院へ行かなきゃ。気持ち悪い。何かが変だ。

救急車？そんなの大げさだ。

怪我つて言つたって、どうせ顔だろ？お前知ってるじゃん。顔は血管発達してるから、小さな傷でも血が出やすい様にできたんだよ。騒ぐ必要なんか無いんだって。

え？一緒に行く？基が？いいよ。独りでいける。子供じゃないんだからさ。格好悪い。独りの方がいいんだよ。

じゃあな、また。ああ、部屋汚してご免、悪いな。後始末、よろしく。恩にきるよ。

自宅の近くの市民病院に行こう。後で保険証持つてくるのが厄介だから。保険証と言えば俺は今年度までひとり親福祉対象だ。今は3月だからラッキーと言えばラッキーか。医療費が少し安くなる。でも4月1日からはどうなるんだ。

ああ、嫌だな。また絵里子さんに迷惑かけちゃうよ。

今日は自転車じゃなくてよかつたなあ。ふらふらする。

タクシー。ナイスなタイミング。

だから、驚かないでよ。たいした怪我じゃない。でもさ、タクシートラfficキーってちょっと似てるよね。ははは。何、俺、変。・・・・酔っぱらってるみたいだよ。

Left Alone

つづく

## 第一一十七話 病院と検査と同情と（前書き）

怪我などに関する生々しい描写があります。苦手な方は回避願います。

## 第一十七話 病院と検査と同情

案内のカウンターにいくと可愛い女の人がぎょっとして俺を見た。

『大丈夫、大きさだな、顔の傷は血が多く出るようになつていいからさあ。見た目よりひどくないんだよ。』

そう言って、納得してもらつて。

えらく体格のいい看護師さんにどこかへ連れて行かれた。

受付手続き、やつたつけ？

血がついているからと言われ、代わりに

“ 検査着 ”

とか言う薄つペらい服に着替えさせられ肩からタオルを被せられた。脱いだシャツのボタンが無い事に気づいて欲しくなくて、こつそりと丸める。服の前が嫌になるほど開いてて、

『 寒いれすね。』

つてバスタオルを前でかき合わせつむいた。そんな俺を、側で付き添ってくれている看護師さんが舐めるように見ているみたいで怖かつた。

小さな個室で先生が待つていた。穏やかな顔のおじいちゃん先生だった。

『 何だかおおー』とつぼくつてスマセン。ちょっと転んだだけですよ。』

俺、呂律が回つていない？そんな事無いよね。それに先生が聞いて来る質問に少し遅れて答えている気がする・・・まるで酔っぱらいみたいだ。

先生はあつかんべをさせたり、瞼をひっくり返して俺を見た。

頭？打ったかな？意識は、ええと、少しだけ無くなつた気がします。気持ち悪いです。いえ、吐いてはいません。ご飯？食べました。

牛乳とパン。朝の6時半かな。それから、ミルクティを飲みました。  
美味しかつたです。

なんだか、泣きそうだ。

「胸の音を聞かせてくださいね。」

そう言われ、バスタオルをそつと持ち上げられ、俺にやんわりと目隠しをした。先生の目に何が映つているのか、俺には見えていないけれど、分かるから。

「違います。」

そう思わず弁解し、聴診器を耳にしているから聞こえないって後から思った。

タオルが降ろされた後も、先生の表情は変わらなかつた気がする。それより、傷の手当、しないの？あ、でもやつぱり血、止まつてるじゃん。ほら、心配なんか要らない。

「『』家族は？」

その一言で俺はやつと田<sup>だ</sup>が覚めて来た気がした。

「大丈夫ですから、私は。母は自宅にいるとは思いますけど、でも、忙しい人だから呼ばないでもらえますか。心配かけるのも嫌だし。保険証は後で自分で持つてきます。私、怪我なれているから。」

やつと笑えた。そう、この感じ。いつもの自分がやつと戻ってきた。先生は同情する様な顔つきで俺を見た気がした。それからいろいろな所に電話をかけた。

「検査はしないと。幸いCTの空きがあつて予約を取れたから。少し時間がかかりますよ。それと、他にいくつか検査があつてね。怪我をした女人には必ずするようにこの病院では決まつていてる事だから。悪く思わないでくださいね。あなたを守る為だから。」

検査を待つ間に消毒をしてもらつた。形成の医師だと名乗るその人は、顔の傷は浅く縫う必要は無いからセロテープみたいなもので止めておくと言つた。やつぱりね。

「なにで怪我をしたかは分かるかな？」

まるで答えを期待していない様な声でそう聞かれた。

ぼんやりと俺の記憶の目の前をかすめて通り過ぎる物が有った。多分、アレだ。リビングの食器棚の上。埃を被り、見捨てられたインターハイの第八位の盾。

「プラスチック。」

何の変哲も無いプラスチック。でもあの中には俺たちの3年間が詰まっていたはずだった。

「多分、プラスチックですから。」

ため息と、トキソイドという声が聞こえた気がした。

「まれにケロイド体質という人がいて、治りが思わしくない人がいる。それだけは気をつけないと。」

それからぶしつけなほど俺の躯を見た。

「女性としての栄養状態が悪い人ほどそうなんだよ。傷が熱を持つたら要注意だ。」

後で分かつた事だけれど、結局俺はそう言つ体質だつたらしい。

どうしておしつこの検査なんかするのかとコップを渡され文句を言つた。その上初めて内診台つてのに乗せられた。

「大丈夫よ。」

最初の看護婦さんがずっと死きつきりで手を握ってくれていた。

「たいした事ないのに大げさだなあ。」

でも優しい顔をしたその人は困った顔で俺を説得した。

「ご免なさいね。そうだとと思つけど、病院の決まりなの。すぐ終わるから、我慢してね。」

体の中に入つてくる金属は、本当に冷たかった。

絵里子さんがやつて来たのはC-T室から戻る途中だった。その頃にはもうすっかり体調も戻つていて、化粧すらしないでそこにいる母さんに驚いた。連絡するなって言つてたのに。

「遊里！？」

母さんは抱きついてきた。泣きながらその手に力を込めた。

「大丈夫だよ、母さん。何ともないから。友達んちの階段でこけて  
れ。」

思いついた言葉をとにかく口にした。少ししてからその嘘は現実味を帯びて自分の中に落ちて行つた。

「なんだか頭ぶつたみたい。でも、もう平気。ピンしゃんしてるよ。念のための検査つて、先生は言つてた。『免ね、心配かけて。』こんなのが怪我のうちには入らないよ。

「わざわざ来てもらう事無かつたのに。それより仕事、大丈夫？」その言葉に彼女は表情を変えた。苦虫を潰したようなつて言うのはこういう顔の事を言つんだろうな。でもなぜ？心配いらないつて言つてんのに。俺は大丈夫なんだから。

そう思いながら俺は絵里子さんを抱きしめた。絵里子さんはいつも女人の香りがする。お化粧の粉の匂いだ。今日はスッピンなのにいつもと変わらない。そう言えば昔からこの香りだった。父ちゃんと3人で行つた水族館でも、小学校の授業参観の時でも。

「心配ないから、母さん。それにしても、腹減ったなあ。朝からずっとなんにも食つてない。今何時だよ。」

“ ミルクティを飲みました ”

その言葉が不意に浮かんだ。俺の手のひらで揺れる、甘くて温かい、「ミルクティ・・・・」

絵里子さんがびっくりした顔で俺を見つめた。俺は泣いていた。

「ホツミルクが飲みたい。」

ご免ね、母さん。心配かけたりして、駄目な娘だね。

「ちっちゃくとも、怪我は怪我なんだね。へへつ、気が弱くなつてゐみたいだ。なんだかさ、久しぶりに母さんのホットミルク飲みたくなつた。変だね。昨日お赤飯食べ損ねたから、今日は帰つたら作つてよ。それなら簡単でしょう。ねえお願ひ。もの凄く、飲みたい

んだ。」

俺の手を握る絵里子さんの手もとても温かかった。

結局俺は一日入院が必要という事になった。

あてがわれたベッドで着替えをした。絵里子さんは先生から話しが有ると言われ、ここにはいなくてかなりほつとした。途中若い看護師の卵だという人が入院のパンフレットを持って来てくれて、ついでにと手伝つてくれて躯を拭いてくれた。本当は独りでやりたかつたけど、こびり付いた血は拭き取らないと気持ちが悪いし、でも自分でやるには限界があった。

20歳ぐらいのその人は好奇心一杯の目で俺の胸元のキスマークを見ていた。その上には基に掘まれた時の跡が痣になつて残っている。

病院の服を着るとそのキスマークが必要以上に目立つた。襟を搔き合わせる俺に彼女は待つていてるよう言い、しばらくして何かを手に戻つてきた。

「あなたも、覚えとくといいわよ。」

それから手にしたものをかたかた振つた。

「彼氏、激しそうな人だから。」

俺の顔を覗き込むおかしそうな顔に俺もつられて笑つてしまつた。

彼女は濃い色のファンデーション、できたら夏用のウォータープルーフがいいって教えてくれた。それを使うと絆創膏より自然に隠せるつて。

「でもさあ、それを常備しているお姉さんも、凄いよね。俺は軽口を叩いていた。彼女は真っ赤になつて、

「馬鹿つ。」

つて俺の肩にげんこつを当てる。

「君の彼氏つてどんな人？」

「秘密。いい男だよ。」

俺は都合の悪い事を全部忘れて、兄貴の温かい腕を思い出し赤くな

つた。

兄貴の体温、囁き声、抱きしめる腕の心地よさ、見つめる瞳。そしてあの香り。その全てに心が震える。

看護師さんが、

「怒気てる?」

つて俺の顔を見て笑った。

それにしてもおかしいの。俺、病院に入院しているよ。しかも、看護師さんとじやれてるし。

毎の出来事は幻覚だったって思えてきそうだ。

Left Alone

つづく

## 第一十八話 “ 絵里子さん ”

彼女が帰ると入れ違いに絵里子さんが部屋にやつて來た。

「先生と話をしてきたの。CTの結果もレントゲンの結果も異常なしですって。でも、今日はこのままベッドの上で安静にしていて様子を見るそつよ。何も無ければ明日には歸れるから。」

彼女は椅子に座らず俺を見下ろした。それからすつと田線を逸らしながら言つた。

「お友達の所に連絡しないとね。心配しているんじやない。」

そうだ、忘れてた。というより、忘れていたかつた。もう外は夕焼けで、あれから何時間も立つてゐる。兄貴の怪我が心配だつた。そうだ、兄貴の怪我。あれは鼻の奥の血管が切れた時の出血だ。

「電話しなきや。」

俺は慌てて携帯を探つた。

「駄目でしょ。」

その手を母さんが止めた。

「病院の中は携帯禁止。」

ああ、そうか。忘れていた。

「ちょっと公衆電話行つてくる。」

そんな俺の手を母さんは握つた。

「いい、遊里、よく聞いて。」

その声は穏やかだけどとても緊張していく。

「あなたは脳震盪を起こしたの。自分じゃ気付かなかつたかもしないけど、病院に着いても朦朧としていたの。ひどい目に合つてゐる。あなたはしつかりしているつもりかもしけりだけど、本当は違うのよ。」

俺は彼女が何を言いたいのか解る気がした。俺は肩を落とした。

「本当に、何にも・・・・・階段から落ちただけだから。」

必死に言い分けを考えた。絵里子さんが考へてゐる様な事じやない

よ。俺は別にそんな目に有つた訳じゃない。強姦された訳じゃない。でも、それを言つ事は出来なかつた。

「基の家の階段、足滑らせて一番上から落ちで、がんがんがんつて、いつたから。それで頭ぶつたせいで脳しんとつ起こしたんだよ、きっと。傷もその時出来たんだし。」

「分かつてゐる。階段から落ちた話しさ聞いたから。もつ過ぎた事は忘れましょう。そんな事、思い出したくないでしょう。でも、これ以上母さんを心配させないで。言う事聞いて、今は体を休める事だけに集中して。お願ひだから。私はあなたの母さんなのよ。」母さんは握る手に力を込めた。俺は答え様が無くて、その手にしがみついた。

「どうしてもひて言つんなら、私から友達に連絡してあげるから。遊里は今ベッドから出ちゃ駄目。いいわね。」

その声は初めて聞く、母さんの泣きそうな声だつた。

そう言えば、俺は母さんが泣く姿見るのは今回が初めてだ。父さんが死んだ時でも、俺の記憶の中の母さんは泣いたりはしなかつた。  
「ご免ね、母さん。心配かけて。俺、本当に親不孝だよね。

「母さんの言ひとおりにする。おとなしくしててるね。」

そんな俺を母さんは柔らかい目で見つめていた。不思議だなあ。母さんとこうして話すのが久しづびりな気がする。

「何か、飲み物買つてきたげるから。それまで友達の電話番号と、言いたい事、メモしちきなさい。」

そう言つと少し鼻をすすり、部屋を出て行つた。

母さんが出て行つた後こつそり携帯を取り出すと、マナーモードで気づかなかつた着信が12件も入つていた。でもその名前は全て基だつた。

『 今どこ? 』

『 大丈夫か? 』

『 心配だ。 』

震える声が何度も俺の名を呼ぶ。

『 ゆうり 』

一番小さい音で、布団を被つて「」そりと聞いた。本当は基の声なんか一度と聞きたくなんか無かった。でも、聞かない訳にはいかなかつたから。

『 こんなつもりじゃなかつた。 』

『 どうすれば良い? どうすれば良い? 』

付いていけば良かつた。俺、心配で死にそつだよ。ゆうり。返事してくれよ。』

『 声、聞かしてくれよ、頼むから。 』

『 許してくれ。俺だつて・・・苦しいよ。 』

『 会つて話し、しよう、な? 謝るから。今までの事のも、全部。悪かつた。俺が悪いってわかつてるから。謝らせてくれよ。 』

『 一度だけでも良い、お願ひだから会つてくれ。俺の話もし聞いてくれよ、頼むから。 』  
『 本気だつたんだ。本気で愛してるんだよ。お前の事。だからもう傷つけたくないなんか無いんだよ。それだけは分かつて欲しいんだ。 』  
彼がいくら泣こうか俺の心には届かない。歯を食いしばり、唇を噛んだ。

俺が悪いって、本当は分かつて。あの状況で基を責めるのは間違つてゐる。あいつの気持ち、知つてて。勘違いを放つといつてそのままにして来た俺がいけないって。その上、兄貴と寝たのもバレている。きっと。それは俺なりの直感だつた。だから基はあれほどまで怒つたんだつて。俺が浮氣をしたつて事だけじゃなくて、あの誠実な兄貴を汚したつて。

でも、だからこそ兄貴に当たるのはお門違いだ。

基の兄貴を盗つた。仲の良かつた兄弟の間を引き裂いた。その罪悪感以上に、兄貴に手を出したヤツを許せなかつた。

兄貴の事が心配だつた。

俺は入院案内の裏の白紙面を出し何度も繰り返し覚えてしまった番号を書いた。

兄貴の一度もかけた事の無い携帯番号。でも、何を言えばいいんだろう。

“今、病院です。たいした事はありません。後で連絡します。心配はいりません。それより兄貴の怪我が心配です。今晚は携帯が繋がらません。明日、また。”

とでも？

あれから二人はどうなったんだろう。不意に体が冷たくなつている事に気がついた。

ああ、取り返しのつかない事をした。

兄貴に会いたい。とにかく会つて抱きしめて欲しい。兄貴の無事を確かめたかった。

俺は独りぼっちだ。

どれだけそうして頭を抱えていたんだろう。時間が経つていた。でもまだ母さんは帰らない。兄貴に話したい事がありすぎて、言葉にするのが怖い。

ふと思いつ出してまだ電源を切つていなかつた携帯から基の番号を検索した。

変な話しだ。兄貴の番号はそらで言えるのに基の番号は電話機に覚えさせている。数字を見れば基だと分るけど、自分ではそれを覚えていない。その上今の俺はあいつと直接話す勇気がなく、母さんに別れを言わせようとしていた。番号を書き下し、テリートし、電源を切り、もうこれつきりと咳やく。

“こちらの心配はいりません。無事です。それよりも新しい生活を頑張ってください。”

そのメモを帰つて来た母さんに渡した。

「これが友達。それと、こつちがその兄貴。」

紙には一人の携帯番号以外に書く事が出来なかつた。

「俺が階段から落ちた時、兄貴が受け止めようとしてくれたからさ。絵里子さん、知つてるよね。ほら、時々車で俺たちの事を送つてくれたあの人だよ。兄貴はとっても良い人だから、俺の体の事、心配してると思うから。大丈夫つて、俺は平氣だつて伝えてね。兄貴が悪いんじやないんだから。」

気がついたら、弁解じみた事を言つていた。

その晩絵里子さんは仕事を休んだ。

「もうそろそろ私も歳だから。」

そして、面会時間ギリギリまでいて他愛の無い話しあし、帰り際、

「ねえ、遊里。母さん今の仕事、辞めてもいいかな。」

つてぽつんと言つた。

「母さんも、疲れちゃつた。遊里にこれまで以上に負担かけるかもしれないけど、いいかな？」

私はぽかんと口を開けていた。それを見て母さんは目を伏せた。

「いいよ。」

俺は心のこもらない声で答えていた。

「母さんがそうしたいなら。」

それからじわじわと言葉の意味が分かつてきた。

「俺も少し疲れてきた。家に帰つても絵里子さん、いないし、すれ違いばっかりで、なんだかさ、今まで一緒に暮らしていく、一緒に暮らしていられないみたいだつたから。」  
体が震えているなんて。

「母さん、他人みたいだつたもん。俺、母さんの事大好きなのに、見捨てられてるのかなつて思つてた。たつた一人だけの家族なのに・  
・・・・」

俺は初めて母さんに本当の事を言つていた。

「俺、正直言うとね、母さんがいなくて・・・・寂しかった。」

そんな俺の肩を母さんが抱いた。

「ありがとう、遊里。本当はね、せつせつお店に辞めるつてお願いしてたんだ。母さん、もつ“絵里子さん”は辞めたかったんだ。」

この時初めて俺は母さんと親子の会話をした、そんな気がした。

つづく

L e f t   A l o n e

## 第二十九話 待ち人

次の日自宅に帰ると赤飯が用意されていた。

「凄い！！」

俺は手を叩いて喜んだ。

卒業式の日はありつけなかつた。後で母さんは赤飯を作るのには特別な豆が必要ですぐには手に入らなかつた、そう教えてくれた。でも今日の前にあるのは昔よく食べた赤飯そのものだつた。

一人取り合つて食べた。その塩味が懐かしかつた。小豆の硬さも覚えているから不思議だ。

「俺さあ、いくら同じよつに作ろうとしても、必ず違う味に仕上がるだよなあ。不思議。今度教えてよ、ね。」

母さんは嬉しそうに笑つた。

本当に嬉しそうに笑つた。

次の日、兄貴からの電話は来なかつた。  
握りしめた携帯が温かい。

電話が鳴る事は有つても、あの人の番号じゃない。  
充電していくも目が離せない。

そして次の日も。

今日も病院へ行く。一日の半分を使って。そして明日も・・・。

一日、一日。それはスローモーションの様に過ぎていく。

頭の方はもう何ともない、でも、傷が治らない。自分でも分る、熱が引かない。抗生素が万能薬だなんて誰が言つたんだろう。

火照る。顔が。それから、逃げ場の無い気持ち。これを、どうすれば良い？

自分から連絡する事なんてできなかつた。怖かつた。あの後二人はどうなつたんだろう。兄貴からの電話を待つしか無かつた。兄貴がかけてくれる気になるまで。

入院している病室で、俺が退屈しているのを知つた同室の人気が見せてくれた週刊誌。そこには

“ヒストリー”

つてタイトルで連載が載つてあり。普通の人が事故に巻き込まれ人生がどう変わつたか。その事で今までの自分を振り返りどう思つているのか。淡々と、それでいて当事者じやなきや語れない言葉で書いてあつた。決して感動で泣いてしまうような文じやない。でも心に何かが残る事は確かで。その文末には、文責 木下肇 とあつた。そのおばちゃんは、妙に感情のこもつた口調で兄貴の文を読んだ。それ書いたの、俺の恋人だよつて自慢したかつたけど言えなくつて。

どうせ

“嘘だあ”

つて笑われるつて思つた。

その事を思い出し、苦笑いがこみ上げて来る。

本当は、嘘、だつたのかも知れないつて。

あれから丁度6日経ち。病院から帰るバスを待つていて救急車で運ばれて来る人を見た。若い女性で頭から血を流し。側には恋人らしい男に人が付き添つて、叫んでいた。

「死ぬな！」

と。

### 救急隊の人の

“ 交通事故 ”

という声が聞こえてきて、こんな風に引き裂かれる恋人同士もいるんだつて思うと、自分はまだしなのかもしれない、少しそう思つた。

だから一度だけチャンスをもらおう。不意に思い立ち、携帯を取り出した。5回。自分に言い聞かせた。5回で出なかつたら、もうそれでお終い。

震える手で数字を押して。

言いたい事はひとつだけ。

『会いたい。』

それだけで良かつた。それで通じなければ、もう諦めようと。

最後にオノフックを押そうとした、その時だ。携帯が鳴りだし俺は慌てた。兄貴？でも違う。見慣れない番号。名前が出ないから知り合いとは思えない。それから聞こえてきた声は基だつた。

『聞こえているんだろう？勇利。この前のメッセージ、受け取つたから。俺からもサヨナラ言いたくてさ。俺、もう家出たし。一度と会えなくなる。一度と俺たちの人生は交わらない。哀しいけど、全部呑み込むから。済まなかつた。元気で。それだけ。』

しばらく電話の切れた音を聞いていた。

電話を握りしめたたずみ、画面に落ちた零で泣いているつて気がついて。周りの人気が心配そうに見つめていた。

「日に、『ヨミガ・・・・。』

そつ言つてじまかし、携帯をしました。

俺は自分が嫌いだ。利己的で、我今まで。

あいつの聲を聞いてやれば良かつたのに。あいつだけが苦しむ事なんて無かつたのに。分かつてした事なのに。最後ぐらい、二人で話さなければいけなかつたのに。

週末は母さんの最後の仕事になつた。母さんは来週から近くの新聞屋さんで働く事に決まつた。朝の3時から7時。休憩をして、12時から4時。広告なんかを折る仕事だ。昼夜が逆になる。もちろん収入は減るけど、春になれば俺もバイトを始める。

「お祝いだね、退職祝い。」

俺は12時で帰つて来ると約束していた絵里子さんを、家中をピ力ピ力に掃除し、彼女の好きなチューーリップを飾つて待つた。それからチーズケーキを焼いた。母さんは沢山の花束とプレゼントを抱えて帰つてきた。でもほとんどしらふだった。

「ねえ母さん、チューーリップの花言葉、知つてる?」

母さんは知らないと笑つた。

「“愛情”って言つんだつてさ。母さんにぴったりだ。」

二人で懐かしい話しどした。俺が保育園に通つていた頃、大好きだつた大輔君が引っ越すと聞いて一日中泣いていた事。小学校に入つた年、友達のバレエの発表会を見に行き将来はプリマになるとだだをこねた事。初めての遠足が嬉しくつて夜に眠れず、結局寝坊しておやつを忘れた事。何もかも昨日の事のようだ。

それから母さんは思い出した様に、俺に友達から連絡が有つたかと聞いた。首を振る俺に、

「そうなの。」

と言つたきり、黙つてしまつた。

その晩、寝しなにホットミルクを作つてくれた。

つづく

## 第三十話 失ったもの・手に入れたもの

もうすぐ春が来る。

本当はする予定だつたホストのバイトは当たり前のようキャンセルしていた。でも免許が取れしだい車は譲るとオーナーは言つてくれた。

「十分がんばつてくれたからね。君の気持ちをみんなが嬉しいと思つていたんだよ。」

昔だつたらその言葉を素直に喜べた。でも今の自分は少し変わつてしまつた気がする。

車の必要がなくなつたのも皮肉だつた。

母さんの元の職場の人達に挨拶にいく事も考えたけど止めた。

それでも時間は過ぎていく。

教習所だけは契約が有るから行かない訳にはいかない。ただそれだけの生活。

入学後は奨学金の申請をするつもりだ。学校の奨学金と、県の奨学金、国の奨学金。学費免除申請も。その為にはいい成績を取らなきやいけない。ただ漠然と過ごしていられる日々には限りがあるつて知つていた。

毎朝2時半に家を出て行く母さんにいつてうつしやいを言い、それからしばらく寝かせてもうつてから起きる。朝ご飯を作り、帰つて来た母さんとそれを食べる。それから一人で掃除をして、一人で洗濯物を干した。夕方には一緒に買い出しをして、献立を考える。時々母さんの新しい服を選んだりもした。

「遊里はいらないの？」

つて言われて

「学校の雰囲気に合わせようかなって思つてるから。まだいいや。」  
なんて答えてみたり。

「スカートだつたら得意だからつくれてあげる。」

その「デザイン」に爆笑した。

「母さんね、こう見えて昔宝塚に憧れてたのよね。」

でもそれ、ネグリジェだよ。

それから毎晩8時には布団に入る母さんにお休みを言つた。  
確実に新しい生活が始まっている。

母さんの色の抜けたような肌は少し日焼けし、髪も根元の方から  
黒くなつていつていて。何よりも笑うようになつた。それは父ちゃん  
と暮らしていた頃を思い出させた。

基以外の友達からはたまに連絡が来た。そして電話を受けるたび  
に落胆する俺がいた。だつてそれは本当に聞きたい声じゃなかつた  
から。

京子は俺を責める言葉を吐いた。

『どうして基の事振ったの？あいつ、真剣だつたんだから。マジで  
勇利の事大事にしたかつたんだよ。』

どうして京子が知つているか解らなかつた。

「基から何を聞いた？」

思わず出でてしまった険しい口調に彼女は口ごもる。

『基が、報告の電話、くれないから。』

そう彼女は言いよどんだ。

『合格発表の日に勇利に告白するつて。だから協力してくれつて言  
われてた。プレゼント選ぶの手伝つてる時、いつか俺達が結婚する  
事になつたら祝辞頼むつてあいつ、笑つてたから。きっと上手くい  
くんだろうなつて思つてたんだ。でも基から連絡ないし、勇利も何  
一つ言つてこないでしじう・・・。そしたら勇利が基の事拒絕し  
たつてしか、考えられないじゃん。』

京子の言つている意味は解つた。でも解りたくないなんか無い。

「俺が好きな人、基だと思つていたのかよ？」

「彼女を傷つけてやりたかった。

「基じやないよ。あいつの事なんか何とも思っちゃいない。男にすら見えなかつた。俺が好きなのは全然違う人だ。だからいらないおせつかい、一度とするなよな。」

友達なんかいらない。車もお金もいらない。ボクシングだつて何もかも。捨てろと言われたらすぐには捨ててみせる。だから神様、あの人を頂戴。

俺の人生に、あの人だけが欲しい。

俺は高校生活つてヤツにもう未練はない、そう自分に言い聞かせた。

ふと氣づくこれまでそれなりに友達は多かつたけど、本気でつながりたいと思うヤツがない。女の友達もいるけど、親友じやない。

悲しい。

あんな関係だつたつて言つのに、親友と呼べるのは誰よりも基ただ一人だつた。

もし相談できるなら、この悩みを打ち明けるとしたら、基しかいないなんて。

## 第三十話 失ったもの・手に入れたもの（後書き）

この期間に何が有ったかは後ほど出できます。  
Pain の方にはこれからそここの部分が登場します。  
ある意味ネタバレになります。ご了承下さい。

3月も終盤に入ったその日、母さんは俺の傷の状態を先生から聞きショックも受けたようだつた。一生消えないケロイドの跡が残ると言われたのだ。

「でもさ、時間が経つと少しあは肌に馴染むつて言つていたじゃないか。」

顔の傷なんて俺は笑い飛ばした。ビリでもいい。鏡さえ見なきやいんだから。

そんな事よりもこの不安定な気持ちを母さんに知られたくないつた。いくら待つても兄貴からの連絡は無くつて、やっぱ、捨てられたのかなあつて。俺、疫病神みたいだもんなつて。

アレから兄貴と基が元通りに暮らさせていると思えるほど俺は馬鹿じやない。俺さえいなければこんな事にならずに済んだのに。

その上俺が基に

“ 恋人として ”

抱かれていたんじや無い事も多分分かつてゐる。あの頭のいい人が

“ ダツチワif ”

の意味を取り違えるはずが無いから。例えバレたとしても、こんなかたちで知つて欲しくなかつた。さすがに

“ 大人のおもちゃ ”

が弟のお下がりだつたら、最低だ。

あいつと寝てもいいつて思えた、2年前の俺は子供で。躯はモノでしかないから、こんな躯なんかどうでも良いモノなんだつて信じてた。でもそれが過ちだつて今は分かつてゐる。

だからその過去を知られたのが怖かつた。

嘘でも良いから基とは

“ 恋人として ”

抱かれていた、そう思つていて欲しかつた。

そしてあの時の情熱が特別なものなんだって。兄貴だから素直に応えられたって事を信じて欲しかった。

あいつに何度も抱かれ、自分の軀がすっかり女にさせられてる事くらい気がついていた。嫌だと思つても感じてしまう、淫乱なんだつて。でもやっぱり兄貴は特別で。あの人の腕の中で初めて自分が解放された気がした。怖がらなくて良いくつて。この人に任せればいいんだつて。だから全てをさらけ出す事が出来たのに。

それなのに……。

何もかもが惨めだった。あの瞬間が素晴らしいほど、それは俺を落ち込ませ、何度も番号を押した兄貴の電話番号をその最後の通話に切り替える勇気を俺から奪つていった。

もしあ人の声が冷たくて、ほんの少しでも軽蔑の匂いを嗅いでしまつたら、そんな後悔が目の前をよぎつていった。

病院の帰り道、うつむきながら歩いている俺に母さんは意外な話を持ち出した。

「木下肇さんだつたかしら。」

と。

「えつ？」

兄貴の名前をいつ母さんに教えただろう？ そう一瞬考えて、ああ、そうか。病院から電話をしてもらつたんだと思い出す。

「兄貴がどうしたの？」

探る様に聞いていた。どうしてここで兄貴の名前が出てくのかまるで分からぬ。もしかしたらあのときの電話がつながらなくて、兄貴に俺の番号を教えていなかつた、そう言われる事を期待していたのかもしれない。

「あのね」

それはとても言いづらそうに聞こえた。

「那人、遊里の事階段の下で助けてくれようとした人だったわよね。」

「うん、そうだよ。」

続きが聞きたかった。

「その人がどうしたの？」

「その人ね、私たちの事何度も車で送ってくれた人、だつたわよね？』

「そうだよ。』

母さんがその事を快く思つていな『つて気づいていた。だからその先が不安だった。

「その人がこの前、会いにきたの。』

「えつ？』

思わず歩いている足が止まりそうになり慌てて足を動かしていた。

「な、何だつたの？』

会いにきたつて・・・・俺は会つてなんかいやしない。何があつたのか想像がつかなかつた。

「でもどうして？兄貴がなんて？』

母さんは少し言いよどみ

「家の近くで会つたのよ。』

と。それから付け加えるかの様に

「凄く心配していた。』

と言つた。どうして近くまで来ててくれたのに俺には会つてくれなかつたのか。その答えを聞きたくなかった。・・・・会いたくないからだ。凄く心配していたつて言われても、母さんがそう言つてるだけかもしれないじゃないか。それでも

「大丈夫つて、言つてくれた？』

必死になつて唇の端を持ち上げた。

「俺はこのとおり、ピンシャンしているから。いらぬ心配かける必要なんか無いよ。兄貴、善い人だからさ。下手に心配かけると悪いから。』

沈黙が流れ、先に口を開いたのは母さんの方だった。

「母さんね、偶然家の近くで木下さんに会つたのよ。でね、少し話

しをしたの。遊里の怪我の事とか、入院の事とか。彼、こっちが不安になるぐらい心配していたわ。それでね、自分の事を責めてた。未熟だつて。

「それって、どういう意味？」

あの人有限つて未熟だなんて有り得ないじゃないか。

「責任をとるには未熟だつて。」

さらりと言われたその台詞を嘘だと思ったかった。兄貴がそんな見え透いた言葉で俺から逃げようとするなんて。

「そつか。」

続きを話しかけようとした母さんを無理矢理さえぎり

「きつと俺の事を受け止めきれなかつたつて、そう言う事だね。いいのにね、そんな事。悪いの、俺だし。それより基の兄貴つて古典的なハンサムだろう。目立つよね。俺、男に産まれてたらあんな風になりたかつたなあ。そうそう、ハンサムと言えば、ホストクラブの話し、教えたつけ？年明けにしばらくやつていたお店だけど、そこで傷が治つたら週1で働かないかつてさ。顔に傷もオッケーだつて。男つて得だよね。傷が有るからハンサムに見えるらしいよ。俺はできるだけ明るく見えるように笑つた。この時の母さんは

“仕方が無いわね”

つて顔でごまかしてくれた気がした。

入学式の前日、目深に帽子をかぶつて彼の家の前まで行つた。別に隠れていた訳じゃない。傷は塞がつたけど、しばらく直射日光に当たるなと言われていたから。

そこには大きな引っ越し会社の車が横付けされていて、小学生ぐらいの子供が新しい家だとはしゃいでいた。

その帰り道、もうぼろぼろになつていた兄貴の名刺を捨てた。こんな紙切れを宝物だと思っていた子供の様な自分が嫌いだ。それをコンビニのゴミ箱に突っ込んで、これでいいんだつて、自分に言い

聞かせた。もともと縁の無かった関係なんだからって。

つづく

Left Alone

## 第二十一話 呼び名

あの春から6年が経つなんて。それは長い様で短かった。時間が経つて事はこういう事なんだと思つ。あれほど辛くって、本当に明日が来るのかなって思えるほど苦しんでいた毎日が、振り返つてみれば過去になつてゐる。そしてあの思い出は少しづつ自分の傍から遠ざかり、いつしか実際に有つた事とは思えないほどになつていた。過去は過去だつた。

何しろ今私は毎日を平凡に暮らしてゐる。あれから普通に学校に行き、卒業し、普通に就職して。職場と自宅を往復しながら時々ジムとスーパーに寄つて帰る単調で変化の無い暮らし。

ボクシングに対する情熱は冷めたとまではいかないにしろ、今では惰性を帶びつあり、社会的に孤立してしまいそうな自分をなんとか奮い立たせ外の世界に目を向けさせている、そんな部分が大きかつた。

そんな私の気持ちとは裏腹に目の前の男は始終笑っていた。もともと根が明るく、炭酸飲料水みたいな性格で。でも、24と言つ歳になつてもへらへらしているその姿はむしろ気味が悪く、彼が緊張している事を暗示していた。しばらく天氣や行政といった当たりさわりの無い話で時間を過ごした後、彼は思い出した様に

「そうそう、俺、こういうのです。」

「そぞろと内ポケットに手を突っ込むと、クリームがかつた名刺を差し出した。

“特許部 特許一課 主任 弁理士 木下 基”

両手でそれを受け取り、指先で上質紙の滑らかさを感じ彼のスタイルの高さに気がついた。きっと彼の

“主任”

と言う肩書きは実質、そうなのだ。

それから彼は弁理士と言う聞き慣れない職種について教えてくれ

た。

「こう見えてもスペシャリストだぜ。」

基が噛み碎いて話してくれているはずの専門用語のほとんどは理解できず、仕事柄ワイドショーネタにばかり詳しくなった私との生活の違いを見せつけられているようだった。それはアレから一人が歩んで来たはずの道のりそのものなのだろう。私は流され、彼は努力を。物事は結果が全てだ。

「出世株？」

からかうと

「そりゃもう。」

と笑いながら2杯目のビールを口にする。その口元が瞬間素に戻るのを目の端がとらえていた。蛍光灯の明かりの下、名刺から浮かび上がる金色のエンブレムが眩しかつた。目の前の基はもう高校生ではない。あの頃の兄貴と同じ、立派な大人だった。

そのくせここまで来ておいて別の話しへはぐらかし、肝心な事は何も話しださない基。テーブルの上の焼き鳥は冷め、ジョッキが再び空になろうとしている。私も駄目な人間だけど、こいつもそうだ。私はなんだかおかしくなつた。彼は彼なりに勇気を出してここまで来たはずなのに。数年前にやつて来た畠山もこんな風にふらりと現れた事を思います。もつともあいつの場合、あの頃の事を謝り、今の彼女を大切にしたいと、言いたい事だけ言つて去つてしまつたけれど。

笑つてうつむいてしまつた私に彼が不信そうに首をかしげる。いいよ、もう。私から切りだすから。

「名前を替えたんだ。」

見つめている基に自分の名刺を渡した。彼は驚かず

「知ってる。」

と目を落とした。それから受け取つたその長方形の紙をしげしげと眺め、戸惑う様な、困つたような、それでいてほつとした様な表情を浮かべていた。多分、畠山から話しさ聞いていたつて事は想像が

ついた。彼と会った時、名字が変わることを話していたから。

でも、私は基に名前が変わったと言つたのではない。替えたと言つたのだ。その事に彼は気づかない。基に認めてもらつまでは『ソーブラント山口屋』なんて、ふざけながら貶めていた

“山口遊里”

の名前は

“広川優里”

になっていた。

高校時代、どうしても戸籍上の名前を書かなければいけない書類に本名を書いていると基は名前をえらぶと言つてきたものだ。

「俺の女房が“遊里”じゃなあ。いくら親父が付けてくれた名前でも“色里”なんて、さすがにNGだろ。今さ、こういつの前のトドブルつて多いから、簡単に改正できるんだぜ。」

軽い口調で話してはいるものの、目は真剣で。その後彼は必要手続きについて色々と資料を探してくれたのだった。

「将来の為に目だけ通しとけ。なんなら俺がお前に名前つけてやるから。」

それから私以上に気合いを入れて勝負運を示す漢字をいろいろと調べてくれたりもした。

あの頃の彼は頼もしい友人だった。

その彼は、

「広川さんかあ。」

まるで老眼かの様に名刺を近づけたり離したりしながらしげしげとそれを見ていた。それからひょいと裏返し、英語の表記に少し驚いた様に片眉を吊り上げる仕草。それをほんの少し優越感を感じながら眺めていた。今更だけど、少しぐらい見栄を張りたい気持ちがそこには有つた。

「国際的だろ？？勤め先の母体がグローバルな会社で、柔道とマラソンの日本代表組織委員会と契約していくさ。会社方針なんだ。」

私ができちんと生活をしているのだと。

「そ、うか。お前も頑張つてんなあ。アドバイザーかあ。」

でもその表記がただの肩書き職だなんて恥ずかしくて言えなかつた。

彼はそつと微笑んで名刺入れにそれを仕舞つた。それから一息、

小さなため息をつくと

「広川さん、かあ。」

とほんの少しえぐばを見せながら眉をしかめ、

「もつといい名前、有つただろうに。」

そんな言葉が漏れた気がした。その意味が辛くて

「木下とか？」

そう切り返しそうになり、口の中で何かを「ニニヨ、ニニヨ」と呟いていた。

「ゴメン、忘れて。」

二人同時に同じ言葉を言つていた。

時間が経つた。そう言いながら、未だ乗り越えられない事があるつて。彼の目を見る事が出来ずつむいた。

それでも、彼の言葉に責める音色はみじんも無く、

『いい名前』

が兄貴の名前だつて、直感的に分かつた。基があの状況を受け入れていて、今の彼は私と兄貴が上手くいつて欲しかつた、そう思つている事を感じ、何だか頭が痺れている気がした。

もしさまた会う事が有つたら、謝るう。以前に何度も思つていた事が有る。その考えが心の中を浮き沈みしていた。

どれだけそうやつていただろう。ふと我に返り、ああつて。

姓もそうだけど、名前を変えたんだよ、基。その事をじわりと実感し、彼にとつて私は過去の人間なのだと気がついた。その事を寂しく思うと同時に心の重荷がとれた気がした。

「あの時は、本気だつた。本気で、兄貴の事しか見えてなかつた。」  
きつとそれが一番の謝罪の言葉になるんじゃないかつて思えたから。  
基はぽんぽんと私の頭を掌で叩いた。それから

「今、幸せか？」

とおずおずと尋ねた。

「ああ。いい家族に恵まれた。」

その時の彼は少し間を置いてから頷いた。

「おめでとう。」

彼が心から祝福してくれようとしている事が解つた。悪夢の様な6年前が夢だった、そんな感覚にとらわれそうになる。

「今日はお前に謝りにきたんだ。ああ、来てよかつた。」

基は苦しそうに口元をゆがめそのくせ笑つた。

「友達がさ、言つたんだよ、勇利に会いに行けって。ただ悩んでいるだけじゃ一生悩み続けるだけだつて。でさ、自分と向き合つて力夕付けろつて。俺が本当にお前の事を愛していたつて言い切れるならできるはずだつて。知つたふりしてさ。俺はそいつと話していく気がついたんだ。本当はお前にいくら感謝してもし足りなはずなのに、ずっと自分が辛いと思って恨んでいたんだつて。自分の気持ちを押し付けるだけ押し付けといいて、肝心のお前の気持ちは見ないフリして來たんだ。その事に何となく気がついていたけど、認めてしまつのが怖かつた。でもさ、この歳になつてようやつとその事に向き合えるようになつたんだ。許して欲しい。俺のした事。いや、許してもらわなくともいい。俺が自分のした事が解るようになつたと、それだけ、知つてもらえればもう何も望まない。今更言うのもなんだけど、俺たちは誰よりも濃い“青春”って時代を過ぐしてたんだと思うんだ。」

じんわりと滲んでいる瞳を、私から目を逸らさうとしなかつた。

「勇利。」

彼が呼ぶ私の名前はあの頃の新緑の様な輝きを含んでいた。  
「幸せになれよ。」

## 第三十一話 呼び名（後書き）

彼女の名前代わっています。でも、どこかで聞いた名前じゃないですか？

そんな彼の姿を、あの頃に憧れていたはずの未来の自分の姿だと思つた。いつかきっとなれる、思慮深くて人を思いやれる人間。そうなれた基を羨ましいと思うと同時に、自分の現実を直視させられた気がした。私はあの頃から日々通り（どうどうめぐり）で変化が無く。心のどこかで基と兄貴を恨み続け。その感情を醜いと思いつがらも消せずにいた。だからこそ、謝るのは本当は自分なんだって反省しなければいけないのはこっちだつて突きつけられた気がした。

「相変わらず、基は阿呆だなあ。」

目頭が熱くなるから、それをぐつと堪えた。

始めようとなれば始まらない関係だった事を彼は知らない。それを許したのはむしろ私。私は間違いを覚悟で道を進んだ。その事を彼は知らない。

一年生の寺島亜由美ちゃんが私に声を掛けてきたのは私たちが一年の11月を少し過ぎた頃、だつたと思う。

彼女は基を好きだと言つた。私に基に釣り合はない、だから別れて欲しいと。

こういう女の子は以前から多かつた。がさつな男女で、成績も下から数えた方が早い母子家庭の奨学生は遠慮しようと面と向かつててくる子もいたほどに。

私達は別に付き合つている訳じやないから好きにしりと言つと、「じゃあ、私、告白しますからー！」

ほとんどの子がそう言つて食い下がつた。その後の事なんか興味が無かつた。

でも、その子は違つた。

「付き合つていないので寝るんだ。凄い。えちとも？」

私は肩をすくめただけだった。なんとでも言えばいい。どうして知

つているのかなんて聞き返す義理も無い。見た目の彼女はいわゆる高校生らしくて可愛い女の子。男子に人気がないとは到底思えなかつた。グロスは透明、マスカラは控えめ。キメの細かい肌にピンクのほっぺ。すんなりと伸びた足とペニーローファー。基の隣に腕を組んで歩く彼女を想像し、何となくそれも悪く無い気がした。派手じゃない所が彼に気にいられる確率大だつた。

彼女は基がごく普通に男の性欲を持つている事を知つている。

私は

“ダツチワイフ、お役御免”

悪くない。

その時の私は笑つていたんだと思つ。唾然とする彼女にこう勧めた。

「自分は今の所“女房”だけど、君には“愛人”の選択も有るよね。」

と。

「本妻お墨付き、なんてどう？基がその気になれば入れ替わるなんて簡単だろ？その為にさボクシング部の女子マネにならない？そこで自然に落としてみたら？その方が可能性上がるんじゃない？俺は止めないよ。」

彼女は真っ赤になつて、受けて立つと言つた。

その後彼女は入部し、雑用を真面目にこなしながら少しづつ基との距離を詰めていった。それでも彼が私を抱く事には変わらず、彼女がイライラしているのは明らかだった。

だからその背中をそつと押した。

「ま、みんなの前で告ぐるくらいしてみれば。」

12月30日。恒例の初詣の集合時間が連絡網でまわつたその日の事だ。氣の強い彼女なら私の前で告白すると思つた。私が嫉妬で見苦しいマネをして後ろの祭りだと。

案の定彼女は初詣の帰り際、基と仲のいい部員が残つてゐるその場で告白した。もちろん私もいる。

基は

“えつ”  
て顔をして一瞬私の方を見た。というか、見た気がする。彼女が告白を始める素振りを見せた時、私はさりげなく幸治の隣に行き新年の練習会の話しを始めた。そして彼女の告白にさもびっくりした顔を見せ、幸治と顔を見合わせた。いかにも基本人には興味が無いとでも言つように。それからみんなと一緒に冷やかした。

彼は一度視線を落とし、じっと自慢のえくぼを作り、その場で彼女にOKの返事をした。

みんなで基の肩を叩いた。もちろん私も。それから一人を残して帰つた。

お似合いの二人は上手くいくはずだった。そのはずが彼はなんだか日増しに疲れていくようだつた。挙げ句に  
“女つてどうしてあんなに面倒なんだよ”  
と愚痴までこぼし始めてしまつた。

「何贅沢言つてやがる。亜由美ちゃん取られて地団駄踏んでる男がどれだけいると思つてんだ。仮にも“彼女”なんだから手間暇かけて可愛がつたげなきや。」

すると彼は

「ボクシングする時間が削られても平氣なのかよ。」  
と恨めしそうに呴いた。私はしれつと言つてやつた。

「基なら大丈夫、タフだから。それよりなんだよ“手間ひまかけるほどの価値のない女”が好きなのか?このぐうたらめ。」

二人きりの部室で笑い飛ばしてやつた。

後で考えるとそれは辻褄が合わなかつた。私は基に

“もつと可愛がつて欲しかつた”

と言つていたとも取れる訳だ。あの時の私達の関係を

“血の通わない人形”

と定義していたのは私自身だつたはずなのに。

それでも基が本来の切れを無くしている事は気がかりだった。私は昼休みに亜由美ちゃんを呼び出し少しクレームをつけた。基のペースが落ちていると。

正直、彼女は女子マネとしてかなりがんばっていたと思う。自分の頭を使う訳ではないつまらない雑用もきちんと手を抜かずにやつていたし、基とつき合っているからと言って部活中にそれを持ち込む事はほとんどなかった。だからむしろ私の中の彼女の評価は高かつたのだ。

それでも

「本妻としてはそこんとこ、気になる訳よ。」

彼には全国で活躍してもらうつもりだったから。

彼女は私を睨んだきり何も言わなかつた。風の強い日で彼女の長い髪が宙を舞つていた。

そんな3月のある日、彼女は突然マネージャーを辞めた。

誰にも何も言わず。

暗黙の了解で基と彼女が別れたらしいとみんなが知つていた。

彼は悩んでいた。私は手を出貸すべきじゃない、もう手を離れた事だ。そう分つていたからその問題には触れず、以前の様に馬鹿話をしながら一緒に下校した。

部の休みだつたその日、久々に夕焼け空を見ていた。いつになく茜色が空一面に広がつていて、その時基が言った。

「やっぱ俺、ボクシングに集中している方がいいわ。」

何を言いたいのかピンと来た。だからすぐに断るうつと思つた。もう十分義理は果たしたはずだと。それなのに私は、

「そうだな。」

と言つて額面通りに受け取つた様に見せかけ誤摩化した。それから後は一人黙りこくつて分岐になる基の自宅まで歩いた。彼は立ち止まり

「誰にも負けたくない。勝ちたいんだ。」

別れ際の玄関でそう言つた。射抜く様な眼差し。殺し文句だ。その

事を二人とも知っていた。基は私を落とすつもりで矢を放ち、私は逃げればいいものをただ呆然とその言葉を胸に受けた。

彼は立ち尽くす私の手を引いた。

私の心中に基からボクシングを奪うモノに対する嫉妬が有った。その事はよくわかっている。だからこそ

“彼にボクシングを続けさせる事ができるのならば・・・”

誰かが心中で囁いた。

“今までだつてやつて來た事。引き換えにするのは容易い”

それが悪魔だつたと氣づいたのは、基の部屋で後ろから抱きしめられた時だった。

窓から空を眺めているとゆっくりカーテンが閉められて。彼は私の首筋に唇を這わせ言葉にならない何かを呴きながら、以前より長く服を着たまま寄り添つていた。

もう逃げ出せなかつた。

息を詰めるようにジーンズが降りされ、しゃがみ込みながら尻から膝の裏、くるぶしへと口づけが落とされていく。背中からまわった手が俺の眼下でシャツのボタンを外していき、ブラの外れた胸元をそっと包んだ。

基はため息をついた。

私は基自信すら気づいていない彼の想いをひしひしと感じとつていた。

“悪魔の囁き”

それは分岐点だ。私はその選択を間違えた。もし彼を本当に大事に思うなら、それは決して受け取つてはいけない気持ちだつたのだ。私に応えなければいかなくなつた基は、恐ろしいほどのペースで自分を取り戻し、あのスランプが嘘のようだつた。

でも契約はそれだけじゃ終わらないつて本当は分かつていた。今回は私自身、確信犯だつた。一人で傷付く道を選んだ。

「どちらか一方が悪いなんて関係じゃなかつたはずだ。お前だけじ

やない。私だつて悪かつた事、知つてゐるだろ。私の方こそ謝なんきやいけないくらいなのに。」

この6年間抱え続けた謝罪の言葉だつた。あの頃の私たちは幼く、未成熟で、目の前にある事しか見えずにいた。でも今ならよくわかる。責任はフイフティーフイフティ。

「知らなかつただろうけど、私は基が傷付く事知つていて関係を持つたんだよ。お前、いいヤツだから割り切れなくなるだらうなつて。それでもインターハイに行つて欲しくつて焚き付けてたんだから、今思えばこっちの方がひどいヤツだよ。」

彼の人の善さにつけ込んだのはこの私。ひたすらに真つすぐな基を知つていて、彼が壊れる予感から目を逸らしたのだから。

「基に会えて良かった。このままだとずっと罪の意識持つたまま生き続けていくとこだつた。基に悪い事したつて。基にしこりを残させて、嫌な思い出ばかり作つてしまつて。今さ、本当にいい男になつた基見て、感動してる。基も幸せそうで良かつた。」

私は初めて基の前で涙をみせてしまつた。

あの人以外の事で泣く事があるなんて。この6年間、考えた事が無かつた。

「会いにきてくれて、ありがとう。」

涙を隠す事も忘れ、彼の大きくてしつかりとした手を握りしめていた。

またいつか会えたらい、そう私たちは微笑んだ。

彼は別れ際紙袋に入つた小箱を取り出しき

「3年間のお礼。」

そう言つてえくぼを見せた。

「勇利は甘いもの嫌いだつて覚えてるけど、たまにはいいだろ?このチョコ、凄く美味いんだぜ。騙されたと思って食べてくれ。」緑のラッピングの上には、はなかなか口にする事が出来ない有名ブ

ランドの口<sup>ゴ</sup>が入つていて

「うわっ、金持ち。」

私は少し驚いた。あの頃の私は彼の前で甘い物を口にした覚えがほとんど無い。それは選手だけが減量していくトレーナーの私が好き放題していたらフェアじゃないつて思っていたからだつた。彼はその事を私が甘いものが嫌いなんだと誤解していて、そう言う物を勧められ困っている私の代わりに断りを入れてくれさえしたものだつた。それなのに今の彼は

「チャレンジしてみなよ。以外と好きになるかもよ。」

そう言って箱を差し出す。人は“変化する”と言つ事を言いたいに違ひない、そう思った。

「美味そう。」

受け取つたその箱は以外と重さが有り、手の中にずつしりと響いた。

「ガキどもと一緒に頂くわ。御馳走さん。」

「うわっ、それ子供に食わせんのかよ。もつたいねえー。」

彼はあきれた様に笑い、

「じやあな。」

と手を振つた。

酔いも冷めつつある中、独り歩きながら空を仰いだ。星の見えない濁つた空。それでもどこか懐かしい。

基は過去にケリをつけにきた。それが出来た彼を羨ましいと思うと同時に、言葉の端に見え隠れしていた女性の姿に安堵した。心の奥では、今でも彼は私にとってとても大切な友人で。そんな彼の幸せを無条件に喜べる自分が嬉しかつた。

基があの人の話しあえてしなかつた事にも気づいていた。何しろ兄弟だから、全くの音信不通とまではかないだろ。だからそれはきっと、私に対するある種のいたわりなんだろうと言う事はうすうす感じた。多分、あの人はあの人で幸せになつているのだ。

それ故に、彼は自分の気持ちの整理と一緒に、私の背中を押してくれたんだと思う。彼の勇気に感謝したい。心からそう思う。だが

「アリの糸を、踏み出す」。

Left Alone  
つぶべ

## 第二十三話 分岐点（後書き）

基に誤解されてこる事をすっかり忘れてこるお馬鹿さんやつでした。

それも、分岐点です。

## 第三十四話 前進

その帰り道、決心を固めた私は6年間一度も押した事のない携帯番号を押していた。彼が出るなんて期待はしていない。それどころか、他の人が持ち主になつていて迷惑をかける事だけは避けたくて。そのくせ一度だけ、どうしても押してみたい番号だった。だからオンフックを押した直後、私は早口で言いきつた。

「兄貴の事、今でも好きです。きっと、一生好き。でももう諦めます。他の人と一緒になります。」

呼び出し音が続き、言い終わつたはずなのに切る事が出来ず。電話の向こうで人が出る気配に慌てて携帯を閉めていた。

「馬鹿みたい。」

でもそれは、私なりの前進のつもりだった。

その晩お父さんは深夜勤だつた。母さんは交番勤務の広川さんと4年前に再婚したのだ。

あの頃母さんが仕事を変えてから一人で話しをする事も多くなつて。その時、昔父ちゃんの死を知らせにきた広川さんの話になつた。実はあれからもずっと面倒を見てくれていたのだと。母さんが仕事で遅くなる時には彼がいる交番で時間をつぶしていた事なんかを話すととても驚いて、ぜひ礼を言いたいと言つた。それが縁だった。広川さんは6年前に奥さんを亡くし、男独りで小さい子供一人を育てていたのだった。

今では5人の家族で広川さんの家にひしめき合つて暮らしている。そこは古いながらも庭付きで。母さんはガーデニングと称し家庭菜園を広げ、最近はパツチワーカにはまつている。それからガキどもが毎晩の様におかず争いを繰り広げ、朝飯の為に早起きをしていた。

そんな一人が寝付いた22時、私はお風呂に入つて落ち着いた後母さんに言った。

「 笹川さんの話し、受けようかと思つけど、どう思つ?」

彼女はこたつ越しに身を乗り出し私の手をしっかりと握り何も言わずに頷いた。

母さんの反応を見て自分の選択が間違いじゃないって思った。そ  
う、これがいい。そう思つ。

広川さんと再婚してからの母さんはよく

“ 女の幸せは結婚だ。 ”

と言つようになつた。一人きりでくつろぎながらお茶を飲みながら過ごしている、そんな夜は特に。

「 私じゃ無理だつて。 」

多分湯呑みから立ち上がる湯気のせいで左頬の傷が浮き上がつているに違ひないと意識しながら私は答える。

すると時母さんは決まつて瞳を逸らす。私もうつむく。母さんが心配してくれているつてのはよくわかっている。

「 これでもいいつて人がいたら、そのとき考えるよ。 」

実のところ母さんが思うほどこの傷は悪さをしていなかつた。でも彼女にはそう思つていてもらつた方が便利だつた。恋人なんていらないから。

専門学校に通い始めの頃、確かにこの傷に負い目は有つた。誤摩化す為に慣れない化粧をしたほどだ。でも次第に人の目も気にならなくなり、ノーメイクでコンパに出るほど団太くなつた。そう、意外なほど傷を気にしない男の人も多いのだ。何しろ、絵里子さんの娘だ。素は良い。

今時カレカノがないのは不自然な事なんだろう。その気は無くてもとりあえず付き合つてみて少しづつ好きになつてくれれば良いと言われ、そんな何人かと付き合つた事も有つた。早く兄貴の事を忘れたかつた。センスのいい男もいれば、話しの上手な男もいた。キスの上手い男も。でも、駄目だつた。男の仕草一つ一つに兄貴を思い出し、抱きしめられるたびにこの人じゃないと心が軋み、それ

以上の関係に進む事が出来なかつた。

相手が私を好きだと言えば言つほど罪悪感を覚え、こんなにいい人なのに愛し返せない自分が嫌になつた。

「僕の名前は、元晴。はじめじやない。」

最後に付き合つた人の言葉が心に残る。

その彼はボクシング部の後輩だつた。ほとんどの連中とは縁が切れていたが、菊池とは部の相談事で連絡を取る事が多く、大学に進みアマチュアボクサーをしている彼の応援にだけは行つていた。その彼が一つ階級を上げてチャレンジをしたときの事だ。

「初戦勝つたらつき合つてください！！先輩！！！」

大勢のギャラリーの中で叫ばれたから期待に応えてやつた。

「1 R K Oで勝つてこい！！」

でそのとおりになつた。

「済みませんねえ、先輩。僕とつき合つ事になつちやつて。」

周りがちゃかすものだから、自然に断れない雰囲気になつて、だらだらとおつきあいを始めた。

彼は気さくで、面白く、何より性格が合つた。

でも始まりがそんなんだから、別れ際に軽くキスをするだけのプラトニックな付き合いが半年も続いた。その彼がある時真顔で

「誕生日に欲しいものが有る。」

と言つた。

夜景の綺麗なホテルにチエックインし、おどおどする私の手を引いてバーまで連れて行かされ

「こういうとこ、緊張する・・・・。」

「あなたのそう言つ所が好きなんです。」

菊池はおかしそうに笑うと高過ぎるスツールに腰掛ける私を支えてくれた。

そしてもういい加減踏み出そつと思い進んだ関係の先に兄貴がいた。

その最中に瞳を閉じながら兄貴の名前を呼んでいた。

今まで上手くやつて来れたんだから何とかなると思つてたのに・・・

ショックだつた。

ご免なさいを呴きながら私は泣きじやくつていた。

菊池の腕の中にいながら思い描いたのは兄貴以外の何者でもなく、あの腕のぬくもりや肌の匂いは色鮮やかに私の中に生きていた。

そしてその時の私は、あらう事か泣く事での人の事を思い出そうとさえしていた。

「昔の人だから。もう、忘れない人だから。」

忘れなければいけないから。強引でもいいから他の男に抱いて欲しかつた。自分を塗り替えて欲しかつた。

菊池はそんな私をシーツごと包み、服を着る様に言つた。

「忘れられない人がいるつて事、知つてた。」

その言い方は嫌になるほどあの人には口調に似ていた。

「忘れさせてみせるつて思つていたけど、駄目だつたね。でも、なんだか諦めがつきました。良いんですよ、その人の事、忘れない方が良い。その人はあなたにとつて本当に大切な人なんだから。むしろ忘れるべきじゃないんだ。」

彼の背中越し、コンドームをまとめる、パチンつて音が今でも心に残つている。

もう恋なんてできないと思つた。

その気持ちは今でも変わらない。

後で聞いた話だけれども、母さんと父さんは見合い結婚だつたらしい。

「初めて会つた時、こんながさつな人は勘弁つて、本氣で思つたのよ。」

母さんは昔を笑つた。

「でもあの人、しつこくってね。負けちゃったのよ。」

俺の記憶の中の父さんと母さんはいつも笑っていて、本当に幸せだった・・・・。

だからわざわざ選択も有るんだって初めて思えた。愛せなければいけない、なんて事は考えなくて。

期待とか希望ではなく、何も無いままさらな所から作る関係が。

## Left Alone

つづく

第三十四話 前進（後書き）

電話の向いに？…そりや、兄貴がいたんですよ

笹川さんは長い付き合いで、兄貴と交番で会つたあの夜に大騒ぎしていたあの女性だ。その後繁華街で偶然会出くわし、Bしと勘違いされて

『肇ちゃんの恋人なの？！』

と根掘り葉掘り聞かれたのが縁だつた。会社を辞め独立した都合でどうしても写真を撮らせて欲しいと言われインターハイまでついて来た事もある。他にも面白いからと誰にも内緒の約束でコスプレ写真まで撮らされ、挙げ句に雑誌に掲載までされていた。それでも悪意の無い人柄のせいなのか、憎む気にはなれず。数年前にこの近くでオフィスをかまえる様になつてからは一緒に酒を飲む事も時々有つた。

彼女は年上で優しくつて話を聞くのが上手で、何も言わないけれど恐ろしく勘の良い人だと思った。それでも会うと何となく気持ちが安らぐ人だ。

でも1年前のあの夜はそれだけじゃなくて、ミドルトンと書いてある見覚えのあるアイリッシュウイスキーが目の前に有つたのがいけなかつたんだと思う。底の分厚いロックグラスも。それにやたら暗いピアノの曲が

“たつた独り、独りぼっち”

としつこいぐらい私に置み掛けてくるようだつた。

「話、聞いたげるよ。」

察しのいい彼女がさりげなく話しかけるから。

「ちょっとね。」

なんて愚痴つたりした。

「昔好きだった人がそれよく飲んでたなつて。結局全然上手くいかなくつて、すぐ別れちゃつたんですけどね。若氣の至りつてヤツかな。その人はとびっきり大人で私は子供だったから。自分ばっかり

本気になっちゃって後先見えなくって。好きになればなるほどその人には迷惑かけるばっかりで最低だつたんですよ。その頃の気持ち、

今でも引きずってるかな、なんてね。もう踏ん切りつけてもいい頃だとは思うんですけど。駄目ですね。

「優里ちゃんが好きだつたつてんだから、よっぽど良い男だつたのね。」

冷やかすから

「勿論。」

つて答えていた。

「優しくつて、我慢強くつて。」

温かくつて、穏やかで。厳しいけどいつでも公平で。私のありのままを受け止めてくれた人。

私が口をつぐんだから、もうそれ以上は聞いてこなかつた。この人は人の心の内が見える人だから。じぼれそうになる涙を堪え

「誰か良い人いたら紹介してくださいよ。」

そんな事ではぐらかした私の肩を

「任せなさい。」

と数回叩き、お酒をついでくれた。

そして馬鹿な私は気がついていた。私は笹川さんの中にさえ兄貴の面影を探しているんだと。

その週末、今まで撮った写真を元に仲人ばばあ（彼女が言った）を趣味にしているから見合いをしてみないかと彼女が連絡てくれた。ただ私に限つては新しく写真を撮り直すという。さすがに10代の頃の写真じゃ詐欺だつたし、話しを聞きつけた母さんがとにかく乗り気だつたのだ。

「キレイに撮つてもらいなさいよ。」

と。なにしろ言い出したのは自分だし、結局一人の懇願に負けて笹川さんに見合い用の写真を撮つてもらつた。髪を結つて、ピンクのスーツ着て。その上オプションだと言われトレーニングウェアの写真も撮らされた。

「優里ちゃんスタイル良いから受けれるわよ。」

なんて、ある意味危ない発言だ。

ヒットするはずが無い、そう思っていたのに、一叩きした笹川さんがやってきてお勧め物件あり、なんて言つからピンときた。「傷の写つていらない角度の写真を見せたとか、修正加えちゃったとか、ないよね？」

彼女は目に見えて動搖し口もつた。嘘のつけない可愛い人だと思い、私は思わず声を立てて笑ってしまった。

それ以来、見合いは断り続け彼女もさらりと流してくれていた。そのはずが、数日前にどうしても進めたい話があると突然自宅まで押し掛けて来たのだ。

傷の事も家柄も何もかも問題ないと言ひ。母さんは諸手を挙げて喜んだ。

相手は30代のサラリーマンで、初婚。真面目だけが取り柄のあまり面白みのない男だと笹川さんは説明した。大酒は飲むけど、ギャンブルは好まず、多分借金も無い。タバコも吸わない。女遊びの噂も聞いた事が無く、すこぶる健康。ただ長男だけれど、面倒な家ではないらしい。年収も十分すぎるほど有った。でも私にしてみればいよいよもつて怪しい。彼女の挙げた条件はあまりに出来過ぎだった。

「写真はね、忙しくて用意ができなかつたの。」

嘘くさいと思つた。彼女が

“写真を忘れる”

なんてあり得ない。笹川さんは早口にまくしたてた。

「大事な事言い忘れてたわねえ。彼ね、シンガポールに赴任決まって6ヶ月後には向こうなのよ。だから誰でもいいとまでは言わないけど焦つてんの。話がまとまつたら忙しくなるけど、ご免ね。」

何となくそれだけじゃない気がした。含みのある彼女の言い方に大きな問題があるに違いないと思った。でもそれでこそ私にふさわしいのかもしれない。たとえ女装癖が有つても、体毛が一本もなくして

も驚かない覚悟をした。

そんな私の心を察して、 笹川さんが言い放った。

「ここの私が信頼できる人間なの。傷の事をとやかく言う様な、けつ  
の穴の狭い男じゃないから。だから優里ちゃんは私を信じると思つ  
てちょうだい。」

この言葉は効いた。

その見合いを受ける、 そう返事をした。 私が 笹川さんに電話をして  
いる時の母さんは田をざゅつとつぶり、 何かを祈つて いるようだ  
った。

「じゃあそつ言つ事で。 もじこ先方様が私と会つてそれでいいって  
言つのなら、 そのままお受けしようと思ひます。 私の仕事の事とか  
かまいません。 辞めてシンガポールについていきます。 笹川さんが  
信頼できるつて言つくらいの人だから、 間違いないでしょ。 信じ  
てますからね。」

そう言つた瞬間、 母さんは私に向かつて、 いや、 電話向こうの 笹川  
さんに向かつてかもしてない、 両手を挙むように摺り合わせた。

そんな母さんに、

「あのね、」

私は思い切つて話を始めた。

「本当はね、 ずっと好きな人がいたんだ。」

それからあの悪夢なの様な日の事をかいづまんで話した。

つき合つていた基よりも、 その兄貴の事をもっと好きになつてしまつた事。 兄貴も同じ気持ちでいてくれた事を知つて有頂天になり、 抱いてほしいとせがんだ事。 避妊しなくていいと言い出したのは自分で、 彼は産んでほしいと言つた事。

「若かつたから、 一生一度の恋だつて溺れてた。 結婚するとかしないとかじやなくて、 私を本当に理解してくれる人がいるつてことが嬉しかつた。」

それから兄貴と寝た事が基にばれ、 もみ合つて いるうちに怪我をし

た事も。

「嘘ついてて」免ね、本当。怪我をしたのは私かもしれないけど、でも悪いのはむしろ私だつたから、弁解なんか出来なくて。子供っぽい言い訳だけど、あの人の事守らなきやつて思つたのかもね。」

そうしたら母さんは聞いた。

「今の優里の気持ちはどうなの？」

「消せない。」

迷わず答えていた。母さんが兄貴の事あまり良く思つていない事知つてたけど。

「結局別れる事になつてしまつたけど、あの人は私にとつて人生最大の贈り物だつたつて思う。色々有つたけど、でもやっぱり出会えた運命に感謝してる。だから、もう十分。十分すぎるほど十分。もう若くはないこれからは新しい生き方をするつもり。それにね、母さん。実はその人からはとても良いもの、もらつたんだよ。」

私はとつておきの話をした。

「名前替える時、どうして“優しい”の“優”にしたのって聞いたでしょ？それね、その人が私に言つたからなんだ。私には“勇ましい”的“勇”より“優しい”的“優”が似合つて。」

母さんは少し息を詰めたみたいだつた。

「那人、本当に善い人だつたのね、優里。あなたの事、愛していたのね。本当にあなたの事を見ていてくれたのね。」

私は大きく頷いた。兄貴が、そして兄貴を愛した自分が誇らしかつた。

今更兄貴を想つてもしようがない。の人にはあの人ふさわしい人がいる。兄貴にはピアノの先生をやつていてるようなどこかのお嬢さんがよく似合つ。今頃は出世してニューヨーク支部にいると⾔われても驚かない。10代の怖いものが無い時代なら向こう見ずな

恋もできる。でも今の私はそこまで夢を見る事はできなかつた。

私は私の人生を歩こう。

結婚なんて、契約だ。見合い結婚ならお互い相手にいらない期待を抱かなくて済むから、愛されない、愛せないなんて嘆く事は無い。

そして何よりも、これは母さんにできる最大の親孝行になるかもしないのだから。

つづく

L e f t   A l o n e

## 第三十五話 仲人ばばあ（後書き）

はい、先が見えてきました

ハッピーエンド　ハッピーエンド

まだ3月にもなつてもいないと叫うのにその日は異常なほど暑かつた。日差しが強く、風もなく、ホテルの中は効きすぎた暖房でムンムンしていた。

私は慣れない振り袖のせいもあって既に気持ちが悪くなつていて。「遅い！！」

笹川さんもかなりイライラしていたと思う。約束の時間を1時間以上過ぎていたにも関わらず、相手からの連絡は無く、先方が持っているという携帯は2つともつながらない。今回は当人一人だけの見合いと言つ事でセッティングされているから、他には連絡の取り様が無いらしい。勤め先の会社に問い合わせると、急に仕事が入りどこかに出かけたと言つ。この昼食用の個室もこのままでは使われずじまいだらう。

「ごめんな、優里ちゃん。」

笹川さんが済まなそうにしているから何も言えなかつた。着物に負けないように簡単な化粧はしていた。傷はそのまま見えるようにしたい、そう言つ私に、笹川さんは頷いて軽いメイクをしてくれた。そのグロスもはげて、唇がかさかさに渴く。

この日は大安吉田の土曜日で、ホテルの中は結婚式日和らしく着飾つた男女でにぎわつていた。

着物の着付けは笹川さんがしてくれたのだけれど、更衣室が芋洗いのように込んでいて足の踏み場がなかつた。結局一部屋押さえる事になつてしまつほどに。

「まあ、いいわ。今晚あたり泊まりたいって思つてたとこだから。こここのエステは最高なんだからね。それに、もし優里ちゃんがめでたく結婚したらあいつにホテル代払わせるんだから。」

彼女はいかにもお金持ちらしく、唯一空いていたエグゼクティブデラックスルームなる物を躊躇わずに取つてしまつた。ゴールドのダ

イナーカードをちらつかせアーリーチェックインのじり押しも忘れずに。

「それにしても、遅い！…ねえ、優里ちゃん、少し気分転換に散歩にでもいかない？」

彼女に誘われ立ち上がった瞬間、吐き気がこみ上げてきた。着物 자체も苦痛で、その上トイレにも行けないからと、ほとんど何も飲まずにいたせいた。それに、昨日の夜は疲れなかつた。

昨夜布団に横になつた時には、顔も知らない見合い相手の事を考えていた。多分スーツを着て現れるだろう、とか、眼鏡をかけて小さくお辞儀をするタイプの人じゃないだろうか、だと。そのはずが、油断するとあの人の事ばかりが繰り返し頭に浮かんできてしまい、どうしても振り払う事が出来なかつたのだ。

何度も頭を切り替えようとした。

見合い相手の年収ははつきりとは聞いていないが、私の3倍以上は有るというから、普通に考えて贅沢な暮らしが出来るだろう。無理をして贅沢をする必要は無いけれど、空想するのは悪くない。例えば、車。その人は高級車に乗っているのだろうか。下手をすると品川ナンバーのベンツかもしれない。そう思いながらクスリと笑つた。どうせならプリウスがいいな、と。

食べ物の好みはどうだろうか。私が作るものでいいって言つてくれるだろうか。洋食は苦手だけれど我慢してくれるだろうか。でも、もし少食だとがっかりしてしまつだろう。どんぶりに盛られた煮物を

「美味しかつた。」

と言つて平らげてくれる人がいいと思う。

タバコを吸う人だつたらどうしよう。キスする時に苦い味がするのは嫌だな。そう考えながら、深く息を吸い込んだ。そうすればあの人々の香りが戻つて来るかとでも思つてはいる自分の行動に嫌気がさした。

結婚する訳だから、必然その人に抱かれるだろうし、その人の子供も産む事になると思う。その事を不意に怖いと思つた。今の私は

14の私ではない。早まつたかも知らない、そんな言葉が渇になつて舞い上がり、

「ijoまで来たのだから。」

そう言つて自分を鎮めた。5年後の私を相手にしてくれる人はいかにもしれないけれど、今だつたらまだ何とかなるはずだといい聞かせ、買い手がいるうちに売り切つてしまわないと母さん達に悪い気がした。いつまでもこの家にいる事なんか出来ないから。

そんな思いを抱え夜を過ごした。

振り袖の派手な柄は花に蝶にかぶと虫の様なふしぎな模様。帯にはトンボがとまっていた。 笹川さんに言わせると、昆虫は良縁のシンボルなのだそうだ。こんな私にはふさわしくなかつたけれど。

「大丈夫？」

彼女はうつむいた私を心配そうに覗き込んできた。

「慣れない事するのつて、やつぱり無理があるんですよ。」

なんとか笑う事で、彼女の顔がほつと緩んだ気がした。

「でも少し休んだ方がいいわね。よかつたら部屋に戻らない？もう、こうなつたら、着物、脱いじゃいましょう。」

彼女らしい反応におかしくなる。もう少し着ています、そう答えたかつたけどさすがに辛かつた。このまま吐いてしまいそうで最低だつた。胸元から上がつてくる感触をぐつと堪えたその時

「我慢しない。」

笹川さんが怒つた声を出した。

「優里ちゃん絶対限界きてるから。」

それから私の肩を抱いた。

「もう、戻ろう、ね？」

従うしかなかつた。私は目の前のコップの水を一気に飲み干し、お代わりをもらつた。

「ご免なさい、お願ひします。その方が良さそ。」

待つのは辛かつた。立ち上がつた私に笹川さんはカードキーを渡した。

「とにかく先に部屋に帰つて休んでいて。一応ヤツはこのレストランに来る事になっているから、彼が来たら部屋に連絡するようスタッフに伝言頼んでくるわ。すぐに済むから追いつくわね。」

そうして私達は別れた。

広いホテルで、レストランから部屋に向かうエレベーターまではかなり歩く必要が有つた。私は冷や汗が出そうになりながら、ゆっくりと足を進める。

その途中には鏡が飾つてあって、ふと横を見た瞬間、見知らぬ私が映つた。その人は疲れていて、そのくせどこかほつとした表情をしていた。そう、私のどこかに、この縁談が流れた事を喜ぶ気持ちが有つたのだ。

「馬鹿だな。」

思わず咳き、首を振つていた。

今日の出がけに練習をして来た。見合い相手に気に入つてもられる様にと。それは

“ 笑顔の作り方 ”

と言つヤツで、ずいぶん昔にテレビでやつっていたのを覚えていた。口の端を持ち上げ、目尻に少し力を入れ。にこやかに。そんな自分に向かつて言つてあげた。

「そんな感じ。頑張れっ。」

それは数年前の事。もしまだあの人には会う事が有つたら、動搖なんかしないで笑い返してやろう、そう思つて練習した仕草だった。

フロントに飾られたカサブランカの華やかすぎる芳香が、そんな進歩のない私を惨めな気持ちにさせてくれた。

氣を取り直してエレベーターに向かつたその時、視線を感じた。何だか急に心臓が速く動き出したのが分かり、胸元を押さえ振り向いたそこに彼は立つていた。

懐かしい顔。でもさすがに6年の年月は彼を変えていた。少しやせた顎と、目尻には小さなしわ。その人はほんの少し目を見開き、そのくせためらわず真つすぐに私に向かつて歩いてきた。

「 勇利。 勇利なのか？」

疑いと確信を含んだ不思議な声色。 低く響くその声は間違いなく兄貴のものだった。

あれほど練習していたはずの笑顔は、 肝心な時にどこかへ隠れてしまっていた。

つづく

Left Alone

## 第三十七話 紙一重

「「」、「」無沙汰しています。」

彼を正面から見る事ができず、どう反応していいのか分からなくつてとつさに頭を垂れた。兄貴のため息の様な深呼吸と、沈黙。それが何を意味しているのかなんて分かりはしない。ただ、彼が躊躇わざ一直線に私の所まで進んで来た事が怖かつた。どうして私の事を見つけたりしたんだろう。どうして気づかなかつたフリをしてくれなかつたんだろう。どうして声なんかかけて来たんだろう。どうして・・・。今更何だと言うのだ。古い知り合いですつて顔で過去を忘れ挨拶でもしたいのか？そんな思いがぐるぐる回り、話す言葉が見つからず立ち尽くしていた。逃げ出せるのなら逃げ出したい。振り向いてしまつた自分の馬鹿さ加減を罵つた。先を急ぎ行かなければいけないつて思つてもらえる口実を必死に探す私に「ずいぶん綺麗になつた。」

彼の言葉は表面だけで滑つていつた。

「あれから元気にしていたかい？」

それは私たちの間には何も無かつた様な落ち着いた口調だつた。独りで苦しんでいた自分が限りなく馬鹿に思えた。

「はい。おかげさまで。」

愚にもつかない社交辞令。

“おかげさま”  
なんて無いのに。

「“僕はまだ未熟だ。”彼はそう言つたの。」

母さんの言葉を思い出した。

じりじりと顔の怪我が治るのを待ちながら、会いたくて、会いたくて、でも会いたいと言い出す勇気がなくて、悶々と彼からの電話

を待ち続けたあの日々を。捨てられたかもしれない、捨てられたかもしれない。捨てられたんだ。秒単位で悩んでいたあの切り刻まれていく様な時間の流れを。のど元を過ぎると熱さを忘れるというけれど、そんなの嘘だ。込み上がつて来る気持ちは現実で、胃の周りがギュウッて締め付けられて、田の前が白くなりそうだった。

そのくせ

「それならばよかつた。」

彼の声は軽かつた。それはずが。再び訪れた沈黙は重く、錘おもりを足につけ水の底へと引きずり込まれていく気分だった。もうここにいたくない。逃げようとする私を兄貴の一言が止めた。

「話しがしたいんだが。」

それは誘いと言つより懇願のようになに聞こえた。でも私は首を振つていた。時間が癒してくれない傷もある。私のそれは乗り越えたかの様に見え、ぱっくり口を開けていた。誰が好き好んで塩をすり込むと言つのだろう。

「どうして? せっかく会えたのに?」

私は一度と会いたくなかった。あの時の事を謝るつとしているならむしろ聞きたくなんか無い。

「結婚しますから。」

もし母さんに言つた言葉の本当の意味が

“ 責任をとるにはまだ未熟だ”

だつたとしても、今更蒸し返して欲しくなかった。

「こんな私でもいいって言ってくれる人がいるんです。そのお話で今日ここにきました。ですから、もう、あなたとはお会いする気はないんです。」

慄懾で無礼で冷たく言い放つた。自分の声が自分の声じゃないみたいに響く。微かに身体を硬くした兄貴の横をすり抜け行き過ぎようとした私の腕を強い手がつかんだ。

「待つて。」

その悲痛な声に涙が出そつた。間近で見上げるすぐ田の前には

この6年間毎晩のように夢見た顔が有った。

独りにして！

心が暴れた。兄貴といふと壊れそうになる。本当は今でも好きで好きで忘れられないのだから。愛しているからこそ、どうして捨てたのかとなじりたくなる。

あの時私を抱いた直後、一生待つと、私が基ときつちり別れるまでいつまでも待つと言つたその唇が恨めしい。この人は信じられる人だつて、今でも信じている自分がいて。違うと言い聞かせながら、それでも無垢な子供の様に信じてしまふ自分が哀れだつた。だから許せと言わても許せない。愛と憎しみは表裏一体だ。逃げる覚悟の私を

「行かせない。」

凍り付いた表情の兄貴が抱きしめた。その力は強かつた。

ただでさえ気分が悪かつた。その上、兄貴に会つてショックだつた。胸元から何かがせり上がり、足下がふらつく。嘘をつかれるのはもう嫌だ。

どこかで聞き覚えの有る声が

「早く部屋へ。」

そう言つた。私は倒れかけたらしい。意識はすぐに戻つたけれど、なんだか訳が分からぬうちに兄貴に抱えられ部屋まで戻つた。不思議な事にこんな時だつて言うのに兄貴の香りを覚えていて、少し汗ばんだその匂いのあまりの生々しさに、これは現実じゃないかもしない、そんな風に思えてしまつた。そう、これはあの春の日の続きかもしれない。本当の私は保健室で寝ついて、短い時間で墮ち込んでしまう悪い夢の中にいるんだ。

それを引き戻したのは

「もう、我慢し過ぎなの、優里ちゃんは。」

そつ言づ心配そうな声だった。とっさに

「大丈夫です。」

返事をすると、

「だから…！」

「 笹川さんが顔を歪めたのが見え

「もう、無理するのはやめなさい。」

「その声は諭す様に聞こえた。

つづく

Left

Alone

## 第三十八話 プロポーズ

無理なんてしていないから。ただ、お着物が辛いだけだから。

何だか自分の体じゃないみたいに急くて、兄貴の首に手を回し両脇で支えてもらいながら着物の帯を外してもらつた。立つて外さないと何本ものひもを使つている都合上絡まり易く上手く脱げないのだと言う。私は倒れない様に必死で体に入れていた。

それでも疲れきつっていた私はどうしようもなく兄貴の胸に顔を埋めた。懐かしい香りが体中に広がる。どうして私はこの人じやなきや駄目なんだろう。

兄貴は昔から特別だつた。兄貴の腕の中にいると自分が情けないほど弱くなる。いつだつてこの人は私の痛い所を突いてくる。その度に心臓を掴まれ、心が震えた。それは確かに痛いのだけれど、包んでくれる兄貴がいる事を知つてゐるから、安心して痛みに身を任せることが出来た。

兄貴の心臓の音がする。こんなに近くで感じている。その事で胸がつまり再び涙が沸き上がりそうになる。

「優里ちゃん、今日のお見合い相手の人、その人だから。」

笹川さんが呟いた。うつむく私にもう一度、

「お見合いの相手、その人だから。」

そう言つた。

彼の指がぴくんと動き私の背中を擦つた。私はもう涙を止められなかつた。彼のスーツを汚し、それでも涙を止める事ができなかつた。

帯が解けても身動きが取れず、両手で顔を覆つたまま。着物が弛み胸の締め付けも無くなつたと言つのに、微かだつたはずの目眩は勢いを増していた。

どうしてこの人じやなきや駄目なんだろう。

いつしか泣き疲れた私は眠りに落ちた。それは多分、兄貴の腕の

中があまりに心地よかつたせいだと想つ。

ゆづくじと頭を撫でる手がある。それから背中も。

彼と別れてから時々見る夢だった。疲れ過ぎて眠れない夜や、ふとした明け方に。優しい手が私を撫でる。まるで

“いいこだね。”

つて諭す様に。

“安心しておやすみ。”

と。守護霊みたいに守ってくれるその手を捕まえたい、本当に欲しいのは安らかな眠りじゃなく抱きしめてくれるその腕なんだ、そう思つただけれど、あまりの心地よさに負けいつも夢の世界に墮ちてしまつ。

目が覚めたときじこいるのか解らなかつた。真っ白い壁、夕焼け。ベッドに腰掛けたワイシャツの背中が

「起きた？」

そう囁いた。ひどく掠れた声。風邪でも引いているかのようだ。

「声、変。何か温かいもの飲んだ方がいいよ。」

無意識のうちにそう言つていた。ああ、そう言えばこの人の声は良く響く低音だつた。記憶の声と現実がつながる。

「暖房のせいだから気にしなくて大丈夫。それよりも、」ためらいがちに、でも一息で彼は言った。

「結婚の件、お願ひしといたから。」

その意味を理解できなかつた。

「勇利は相手さえ承知したらそのまま結納するつもりだつたと聞いているよ。だからそう言つ事だ。君を捨ててしまつた事をずっと後悔していく、今日会つてその事が身にしました。だから。」

彼は小さなひと呼吸をおいた。

「君が休んでいる間に絵里子さんに電話でそう話した。勇利の事を

もらい受けたいと。絵里子さんも納得してくれた。」

決定的な一言を聞いた気がする。やっぱり捨てられていたんだつて。でもそれ以上に自分の知らない所で人生が決まってしまった事が悔しかつた。私の人生なのに。

それに兄貴に謝つて欲しい訳じやない。結局悪いのは私だつたんだから。ましてや・・・・・。

「もうすぐ勇利は僕の嫁さんになる。妻になる。一人で暮らすんだ。毎日僕の為に料理して、ベッドを暖めて、キスをする。」

そう話す彼の口調はちつとも嬉しそうじや無かつた。この人は確かに兄貴で、何を話しているか分つてはいるはずなのに、言つてる事は絵空事みたいだつた。

「いいよ、そんな事しないで。」

傷のせいだ。この傷を見て責任を感じたんだ。現に私の顔を見ようともしないじやないか。

「勇利に決定権は無いんだよ。もう大人同士で話しさ決まつてしまつたんだから。」

その淡々とした口調が悲しく、情けなさで涙があふれた。ああ、また泣いている。私はこの人を縛りたいんじやない。それなのになぜこの人は間違つた選択をするんだろう。同情なんかまつぴらだつて言つてるじやないか！！

兄貴が好きだつた。もし全くの他人と新しい生活を始めるのなら、夢なんか抱かなくて済む。でも、兄貴は違う。無い物ねだりをして、そのくせまた失うのかとおびえて暮らすなんて「ごめんだ。

だつたらいつその事何も無い方がいい。独りで生きてくから。放つておいてほしい。

その事を伝えたかつた。一緒になんかなれないと。そのくせ肝心の言葉は出てこなくつて、ただ泣くだけで、喉が詰まつた。

うるく

彼の進もうとしている間違った道を引き返して欲しい、そう言いかけたその時、丸まっていた背中が不意に振り向き、

「辛い。」

と言つた。震える唇が、

「辛い。」

と。

「勇利が泣くのが辛い」

と。それは初めて見る兄貴の弱い部分だつた。強くてたくましいと信じていたその人が、かすれた声で私を呼んだ。

「勇利、お願ひだから泣かないで。」

突然、その言葉がまっすぐに心に落ちて行く。この人は本当に辛いのだ。私の為に心が弱くなつてしまい、辛いのだ。私が隠しているはずの気持ちをこの人にだけは吐露してしまう様に、この人はそんな私の全てを飲み込んでくれていたんだ。だから、辛いんだ。

どこにこんなに水が有つたのかと思えるほど涙が湧き上がる。この涙は兄貴の為だと思う。兄貴が辛いのが辛い。

私も兄貴の感情を飲み込み、一人はまるで一つの人間の様だつた。その胸に手を伸ばそうと動きかけた瞬間彼の体が降りてきて、まるで宝物の様に包み込まれ、

「なあ、頼むよ。俺だつて、俺だつて幸せになりたいんだ。」

その感情の波に飲まれた。私は兄貴の一一番柔らかくて傷つきやすい内側に守られていた。この世でたつた一つ信じられるもの。それが、この人だ。

不意に

“絵里子さんも納得してくれた。”

たつた今兄貴が言つたその一言が心に浮かび上がってきて、全ての謎が解けたようだつた。簡単な話しだ。母さんだ。

以前から母さんが兄貴を警戒していた事ぐらい知っていた。それにはあの時受けた検査がレイプ検査だつてことぐらい気づいてた。痕跡だつて残つていたはずだ。それを聞かされた母さんは必死で私を守ろうとしたに違いない。たとえ私が合意の上だつて言つたとしても兄貴はずっと年上で。怪我の上に避妊していないと分かつたら騙されていると思つたとしてもおかしくなかつたから。

きつとあの時母さんは兄貴を私に近づけない方がいいと考えたんだ。だから電話番号も教え無かつた。それなら兄貴から連絡が無かつた事も納得できる。全てのつじつまが合つていた。私から連絡がない事で兄貴は家まで会いに来たに違いない。そこで母さんと会つて話をしたんだ。そしてその時、母さんは彼が一度と私に近づかなければ釘を刺したんだ。

“本当に愛しているというのなら、身を引くべきだ。”

そんな感じで。だから兄貴は私から離れる以外なかつたんだと思う。優しい人だから。

「愛している。愛しているから、一緒になりたい。俺だつて、幸せになりたいんだ。」

彼の声がこだました。

そう、この人は私を愛していただから、二度と会えなくなつたのだ。

私はほんの少し笑つた。先を越されて負けてしまつた気がする。私の方がもつと、もつと愛しているのに。私もあなたを愛している。私だつて、あなたじゃ無いと幸せになれない。

この完璧なひどが、私の肩で泣いていた。

その晩彼は目を腫らした私を

“初めてのデート”

に誘つてくれた。本当にこれは

“初めて”

だつた。記憶が有つて、歳月が有つて。温め続けたものが有ると言つのに、私たちはまだ告白もしていない恋人同士みたいだつた。

笹川さんが着物の代わりに手配してくれていたラベンダーブルーのワンピースに着替え、私たちは歩いて少しの観覧車に向かった。空を漂う15分の間、私たちは何も言葉を発しなかった。そのくせてつぺんでは触れるだけの優しいキスをくれた。

並んで歩き、兄貴はただ微笑んで私の指を弄ぶだけ。時々もつと近づきたそうな素振りを見せては止め、体を引いては恥ずかしそうに目を伏せた。

レストランは週末という事も有つてどこもかしこも込んでいて入れそうにない。私は食欲が無かつたけれど、兄貴が、「仕方が無いから、今日は部屋で食べよう。」

と頼んでくれたルームサービスは思いのほか美味しかった。この人といふからだ。私は彼の差し出すお茶を受け取りながらそう思つた。食事の後、兄貴はお風呂にお湯を溜め私に入るよう勧めた。今晩は帰らない手はずになつている事を感じ、無性に甘えたくつて、考える事を放棄して湯船につかつた。シンクの横には着替えにパジャマの用意までされていた。

妙に疲れを感じベッドについた私を、彼は布団<sup>ヒゲ</sup>に撫でるようにな優しく叩いた。それは私が眠りにつくまで続いた。降り注ぐそれはまるで慈雨のようだった。

明け方、私は隣で眠る彼に手を伸ばしていた。懐かしい香り、懐かしい感触。たつた一度の事なのに、その何かもを鮮明に覚えている。だからその胸に顔を埋めその全てを確かめた。

「兄貴・・・・・。」

思わず漏れてしまつた咳きに、薄田を開けた彼が囁いた。

「はじめ。」

なんだかおかしかつた。私は笑いを噛み締めながら、彼の名前を呼んだ。

「肇、肇。」

言葉が転がるように飛び出した。

「他の事なんか、どうでもいい。」

恨みも、苦しみも、悲しみも。兄貴以外の事なら全部捨てられるから。私は彼のパジャマの下に手を添わし、ぬくもりを感じた。

「他の事なんてどうでもいいから。」

それから彼の軀にしつかりと自分を巻き付けた。たつた一つ。兄貴だけが欲しい。彼は私の目を覗き込み

「お帰り。」

を言った。

『ただいま。』

その言葉を言いたかつたけど、言葉にできなくて、そのまましがみつく手に力を込めた。

彼は何も聞かず私の中に小さなビックバンを残した。

私はその原始的な感覚に酔いしれた。この人を思う時に感じる恋の痛みとも少し違つ、胸元に向かつて昇つて来る歓びに、自分が女だと強く感じた。

自宅に帰ると、母さんと父さん、それからガキども一人が待っていて。兄貴は私よりも少し前を進みまるで盾になろうとしているかのように振る舞つた。一通り挨拶が終わつた後、それまで神妙にしていた弟達はやいのやいのと騒ぎ始め、どこで覚えてきたのか耳を塞ぎたくなる様な露骨な質問にみんな慌てた。

「仕方ないなあ、」といつら、黙らせてきます。』

私は二人の首根っこを掴み、玄関に向かつた。

「ケーキ、買つてこよう、な。』

それから弟達に耳打ちした。

「父さんが一緒だったら、たくさん買つてもらえるかもなあ。こういう時の父さんは太つ腹だから。』

お決まりのように弟達は狭い家の中で

「父ちゃん！……！」

を連呼し始め、広川さんが慌てて飛んできた。

「ねえ父さん、一緒にケーキ買いに行こうよ、ね。」

私はとつておきの笑顔を取り出した。広川さんは女の子が欲しかつたらしく、その分私に甘い。

ほんの少しだけ、母さんと兄貴に時間あげたかった。あの二人が密約を交わす時間を。6年前、何を話し合ったかは知らないけれど、多分一人とも私に知られたくないと思つてている事だ。だからそれを隠すお手伝いをする。

過ぎた事をとやかく言つ気はなく、もちろん誰も責める気なんかない。兄貴も母さんも私の事を想つていていたからした事だつて分かつているから。

「姉ちゃん、でつかいケーキがいい！」

「でつかいケーキ！」

ガキどもがショーケースに向かつて叫ぶ。

「じゃあ一番大きいのをお願いしようか。」

父さんは迷わずそれを指差した。

「優里はチョコレートが大好きだつたよな？ちょうど良いんじやないか？」

私は28cmというあり得ない大きさのケーキに目を見張つていた。

「これ、本当に食べれんのかなあ。」

疑う私にお店の人気が苦笑いをしていた。

「だいじょぶ　だいじょうぶ　」

その拍手のついた「一ラスに他のお客さん達が笑つてゐる。

「ご家族、仲がいいんですね。」

白髪のおばあちゃんが声をかけて來た。

「ええ、そうなんですよ。」

父さんが胸を張つた。

「とっても仲がいいんですよ。それにね、娘の結婚が決まりましてね。」

そう言つて私の方を少し見た。

「もう一人、家族が増えるんですよ。」

その横ではきりきりと田を輝かせた弟達が期待に胸を膨らませ私を見上げていた。

帰つた私に兄貴は

「ありがとう。」

と小さな声で囁いた。

私にはその理由が分った。

みんなでケーキを分けて食べる。みんなで分ける。独りじゃない。

みんなで分ける。

「そつちがでかい！」

「じやんけんだ！」

「姉ちゃんは太るから小さいのだよねー。」

そのちやぶ台の下で、笑っている彼の手が私の手をそっと包み、独りじないと教えてくれた。

## Hペローグ

妊娠に気づいたのは肇さんの方が先だった。

「遅れてこる気がするから調べてもらおう。」

そう言ってお腹をなでられ笑い飛ばした。絶対あり得ないって思つたからすぐに検査薬を使った、そのはずなのに。疑いもしなかつた目の前でピンクの+の印がくっきりと浮き出て来て、呆然としている私に彼が

「おめでとう。」

を言つ。

取り乱しているのは私だけ。

肇さんが報告したら、父さんは頷きながら彼の肩を叩き、母さんは赤飯の用意を始めた。見合いから1週間後には入籍していたけれど、とりあえず挙式までは自宅で暮らすつもりだったから、心の用意ができていなかつた。何もかも。まさしく私を尻目に肇さんは図々しくも私の部屋で暮らすようになつてしまつて

「離れているのは嫌だ。」

と毎々をこね、毎朝あの騒々しいちやぶ台と一緒にご飯を食べ、夜中にこいつそりやつて来てはむくみ始めた足を揉んでくれた。

「もうすぐこの子に君を盗られると思うと少しあくびだな。」

そんな事を呟きながら、寝ている私のまだ平らなお腹を擦つてる。

夜中にふとした拍子で田が覚めて、左手に絡んでいる彼の指を感じものすごく安心する。銀色の指輪が一つ並んでいて、彼は相変わらず時々だけど寝顔を言つ。

「むにゅむにゅ。」

もうすぐ転勤で忙しくなる。お式の用意だって大変だ。それなのに肇さんは平気な顔で笑つてゐる。

「愛してる。」

まるでそれが全てかのように。私はその腕の中で丸くなる。  
あのうるさいガキどもは私が妊娠したと分かったとたん豹変し、  
妙にかいがいしく家事をするようになった。

じつやつて幸せが増えしていく。

披露宴の出席の返事もほとんど集まり、沢山の祝辞が書き込まれていた。その中の一枚には、彼女も同席させたいから席を作れと書かれている一言も有り。私たちはそれを笑った。

「やっぱりあいつは尻に敷かれているんだ。」

そう言つ筆さんの表情にしこりは無かつた。

私は独りじやなかつた。取り残されたと思ったのは、自分しか見えてなかつた所為だつて今なら分る。独りが良い、なんて、嘘だ。

## H&ローグ（後書き）

今までお付き合い頂いてありがとうございました。  
やっぱり ハッピーホームが一番

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5694d/>

---

Left Alone

2010年10月9日19時56分発行